

十字架のことば

十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、
救いを受ける私たちには、神の力です。

(コリント人への手紙第一 1 章 1 8 節)

目次

はじめに

第1部 神様と人間耕作の摂理

第1章 神様はどんな方か

1. 神様は創造主である
2. 神様は「わたしはある。」という方である
3. 神様は全知全能のお方である
4. 神様は聖書の著者である

第2章 神様の人間創造と人間耕作

1. 人間を創造された神様
2. 人間を耕作される神様
3. 麦と穀

第3章 エデンの園でのアダムとエバ

1. エデンに園を設けて、アダムを導かれる
2. アダムを教えられた神様
3. 生んでふえたアダムとエバ
4. 数え切れない歳月をエデンの園で生きたアダム

第4章 自由意志で不従順になったアダム

1. 善悪の知識の木からは取って食べてはならないと命じられた神様
2. 聞き従わなかったアダム
3. アダムの不従順の結果 罪から来る報酬は死
4. なぜ神様は善悪の知識の木を置かれたのか？

第2部 世界の始まる前から隠された奥義

第1章 なぜイエス様だけが私たちの救い主であるのか

1. 敵である悪魔に任されていたアダムの権力と栄光
2. 土地の買戻しの法
3. 救い主の条件にふさわしいイエス・キリスト

第2章 なぜイエス様を信じると救われるのか

1. イエス様による救いの摂理
世界の始まる前から隠された神の奥義
2. なぜイエス様は木の十字架にかけられて、
血を注ぎ出さなければならなかったのか
3. なぜイエス様を信じると救われるのか
4. 「イエス」と「イエス・キリスト」
5. 信仰は敵である悪魔・サタンの策略に打ち勝つ

第3章 十字架に含まれた摂理

1. 飼葉おけに寝かされた摂理
2. 家畜小屋で生まれて、貧しく生きられた理由
3. 全身にむち打たれ、血を注ぎ出された摂理
4. いばらの冠をかぶられた摂理
5. 両手と両足に釘を打たれた摂理
6. 十字架刑と槍でわき腹を突き刺されたこと
7. イエス様の着物と下着についての摂理

第4章 十字架上の七言

1. 第一言：彼らをお赦してください。
2. 第二言：あなたはきょう、
わたしとともにパラダイスにいます。
3. 第三言：女の方。そこに、あなたの息子がいます。
そこに、あなたの母がいます。
4. 第四言：エリ、エリ、レマ、サバクタニ。
5. 第五言：わたしは渇く。

6. 第六言：完了した。
7. 第七言：わが霊を御手にゆだねます。
8. 十字架で死なれた時に起きた出来事

第3部 全き救いに至るには

第1章 御霊によって霊を生んでいく

1. 人の心の三つの要素
2. 御霊によって死んだ霊が生き返る
3. 真理に逆らう心と本性の悪も捨てる
4. キリストにつぎ合わされた人生

第2章 人の子の肉を食べて血を飲んでこそ永遠のいのちを持つ

1. 人の子の肉を食べなさい
2. 人の子の血を飲みなさい

第3章 水と御霊によって新しく生まれてこそ永遠のいのちを持つ

1. ニコデモの信仰
2. イエス様とニコデモの対話
3. 水と御霊によって新しく生まれてこそ

第4章 死に至る罪と死に至らない罪

1. 死に至らない罪
2. 死に至る罪

はじめに:

「十字架のことば」は「人類の救いについての神様の摂理」を明らかに説明してくれるみことばです。人類の救いのために世界の始まる前から隠された深い奥義であり、神様の大きい愛と公義を悟らせてくれるみことばです。クリスチャンならば誰でも知りたいと思う「神様はどんな方か?」「神様が天地万物と人を創造して、この地上に生きるようにされた目的は何か?」「神様はなぜ善悪の知識の木を置かれたのか?」「イエス・キリストはどういう方で、なぜイエス様だけが人類の救い主であるのか?」「イエス・キリストを信じるとなぜ救われるのか?」このようすべての質問に対する答えがまさに「十字架のことば」に入っています。

今までこの説教で多くの人々が神様の驚くべきみわざを体験しました。自分の罪を心から悔い改めるみわざが起きて、まことの信仰と確かな天国の望みを持つようになりました。罪と悪を捨てて、神様のみことばの中を歩むようになりました。メッセージを聞いて、自分の罪を悔い改めた後、イエス・キリストの御名で祈ると、数多くの人々が神様のみわざを体験しました。病気がいやされて、わずらいは完全になりました。悪霊が出て行って、闇の勢力が退きました。十字架に含まれた救いの道を聞いて悟る人はみな、神様がイエス・キリストの御名で施される驚くべきみわざを体験してきたのです。

皆さんがミカンを食べるとき、ほかの人がおいしいと言うから、ただ「おいしそうだ」と思っても、実際にミカンの味はわかりません。皮をむいて、直接食べてこそ味がわかって、栄養分を摂取してこそ益になります。信仰も同じです。「主イエスを信じれば救われる。」このように頭だけでわかって救われるのではありせん。また、ただ「信じなさい」と言われるから漠然と「信じます」と言うだけでは、力ある信仰生活はできません。「なぜイエス様だけが救い主であるのか」「イエス様を信じると言う、どのように救われるのか」その理由を確かに知らなければなりません。

そのような人には霊的な信仰が与えられるので、敵である悪魔・サタンが惑わせないし、伝道する時も、口に出す言葉に権威が伴います。「十字架のことば」を学んで、イエス様がなぜ救い主であるのか、確かに悟られますように。そして、誰が尋ねても正確に説明できるように、このみことばを完全に糧とされますように。それで、まことにイエス・キリストのいのちが内にあって、そのいのちを多くの人々に伝えられますよう、主の御名で祝福して祈ります。

第1部

神様と

人間耕作の摂理

第1章

神様はどんな方か

この世には「神はいない」と主張する人がたくさんいます。人間が想像の中で作り出した神を拝んだり、神様が造られた被造物の形を作って、それを「神」として拝んだりする人もたくさんいます。

しかし、人の目で見ることではできませんが、神様は確かに生きておられます。また、私たちが崇めて拝むべき神は、天、あるいは地に唯一の神様おひとりだけです。神様は宇宙万物と人間をお造りなされた方であり、万物の支配者であり、審判者であります。

それなら、神様とは具体的にどんな方でしょうか？ 実は、人間のほうから神様について説明することはやさしいことではありません。神様は被造物である人間を超える神であり、無限の存在だからです。限られた人間の知識の中でいくら考えてみても、神様に関してすべてわかって理解することはできません。

そして、世の中に「神様を信じている」と言う人は多いのですが、その中には神様の愛が感じられないし、救いの確信さえない人がたくさんいます。「あなたが信じている神様はどんな方ですか？」こう質問されたとき、自信を持って答えられない人もたくさんいます。子どもならば、当然お父さんについて知らなければなりません。お父さんと話をすることもできて、互いに心を交わすこともできなければなりません。

ところが、神の子どもだと言いながらも、父なる神様についてよく知らなくて、神様と交わりもないならば、救いの確信を持つことも難しいし、満された信仰生活をすることもできないのです。私たちが神様について全部は知らないとしても、神の子どもならば必ず知るべき最も基本的な内容があります。それなら、はたして神様はどんな方であるのか、今から四つに分けて説明します。

1. 神様は創造主である

<詩篇 53:1>を見れば、「愚か者は心の中で『神はいない。』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい不正を行なっている。善を行なう者はいない。」と書いてあります。愚かで悪い人々は、自分たちが神様を見ることができないからと言っ

て、神様を否定しようとする。進化論者たちは、生物は下等生物から高等生物に進化して、ついにヒトになったと言います。

しかし、<創世記 1:21>には「それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた。」と書かれています。また、<創世記 1:25>には「神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのほうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。」とあります。歳月が流れるにつれ、形は少しずつ変わってきましたが、神様は、初めからすべての生き物を種類にしたがって創造されました。

魚が進化して地の動物になり、地の動物が進化して鳥になったのではありません。類人猿がヒトに進化したのではなく、サルは初めからサルとして造られ、人間は初めから人間として造られたのです。そして、ただ人間だけが神のかたちに、霊と魂と肉をすべて持った存在として造られました。いくら人間に似ていると言っても、サルが霊を持つ人のように、神様を悟って崇めることはできないのです。サルが神を捜すでしょうか？ 後の世があることを知って、天国と地獄を知って、もっと敬虔に、もっと正しく生きようとするのでしょうか？

<創世記 1:1>に「初めに、神が天と地を創造した。」とあります。そして、<創世記 1章>には、神様は何もない無の状態から、六日の間、みことばで天地を創造された、と記されています。創造の最後の日である六日目には、人類の先祖である最初の人アダムをお造りになりました。

<ローマ人への手紙 1:20>を見ると、「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」とあります。神の力と神性は、私たちの目に見えないとしても、被造物によって知られ、はっきりと認められる、と書かれています。したがって、「私は神様とはどんな方か知らなくて、信じられませんでした」と審判の日に言い訳できないということです。神様は直接拝見することはできませんが、すべての被造物を見ると、創造主の神様がおられることと、創造主がおひとりであることがわかります。神様が造られたすべての物の中に、創造主である神様の証拠が現れているからです。

人をはじめとする動物の構造

その証拠として、一つ例を挙げてみます。世の中には実に多くの人々が生きて

います。さまざまな人種と民族があって、それぞれ言語と文化が違い、皮膚の色もさまざまです。しかし、そのすべての人に共通点があります。どんな人種、どんな民族も目は二つです。耳も二つで、鼻と口は一つです。その位置も同じです。顔の真ん中に鼻があって、顔の上のほうに目があります。口は鼻の下にあって、耳は顔の両側に一つずつあります。

ところが、人だけがこのように同じ構造と位置を持っているわけではありません。地上の動物や空中の鳥と昆虫、海の魚もすべて同じです。それぞれの特性により、若干の差はありますが、基本的にはみな同じ構造を持っています。また、食物を食べて消化して排泄する過程や構造、繁殖する方法と構造なども似ています。このように同じである理由は、唯一の神、創造主の神様の設計で造られたからです。

世の人々は創造論を認めないで、進化論を主張します。しかし、仮に彼らの主張のとおり人類が進化してきたなら、人はみな同じ一つの形にはならなかったはずでしょう。いろいろな形と構造に、いくらでも多様に進化したでしょう。また、創造主がおひとりでなければ、人や動物がこのように同じ構造と機能を持つことはできません。創造主が何人かいたなら、それぞれ好きな構造と機能で生物体を造ったはずだからです。

しかし、このように万物が一つの構造と機能を持っていることを見ると、明らかにただひとりの創造主の神様によって正確に設計されて造られたことがわかります。

自然現象に現れた創造の証拠

また、創造主なる神様の証拠は、自然現象を見てもあまりにも明らかです。地球は1日1回自転して、1年に1回太陽の周りを公転し、月は地球の周りを1か月に1回公転します。もちろん、自転もします。こういう自転と公転によって、地球にはいろいろな規則的な現象が生じます。昼と夜ができて、四季もできます。満潮と干潮ができて、大気が循環するようになります。

ところで、このような天体の位置や動きは、人や生命体が生きていくのに、最も必要で適している環境に設定されています。太陽と地球の距離も、地球と月の距離も、今ぐらいが最も適当です。太陽にもっと近くても熱くて耐えられないし、もっと遠くても寒くて耐えられません。また、地球と月の距離がもっと近くてもいけないし、遠くてもいけません。今の位置が満潮、干潮に最も適した位置なのです。

そして、このように満潮、干潮が起きるので、温度が調節され、さまざまな自然現象が起きるようになります。それとともに、風を起こして雲を移動させ、すべての所に再び雨を降らせるようになります。これより遠くてもいけないし、これより近くてもいけません。このように最も適当な距離で、測り知れないほど長い歳月の間、一寸の誤差もなく規則的に自転と公転をしてきたのです。

進化論の虚構性

はたしてこのようなすべての秩序が、進化論者たちの主張のように、ビッグバンによって偶然に作られたのでしょうか？ たとえば、時計を分解してみると、その中には多くの部品が精巧に組み合わされて動いているのがわかります。

ところが、誰かがそれを見せながら、こう言うとしましょう。「この時計は誰かが作ったのでありません。火山が爆発して、いろいろな部品が飛び出して、その部品がひとりで組み立って、規則的に動き始めました。」それなら、この話が信じられるでしょうか？ 絶対に信じられないでしょう。

ところが、この世とすべての物が進化によって造られたということは、これよりはるかに話になりません。時計とは比べられないほど精巧な宇宙が、どうしてひとりで造れるのでしょうか？ また、その精巧な宇宙が、どうしてこのように正確な秩序に従って自ら動くのでしょうか？

これは極めて優れた神様の知恵で、宇宙のすべての物が計画されて創造され、動かされているために可能なことです。創造主の神様がその御力によってすべての物を造られて、すべての物を動かしておられるのです。

こういう明らかな証拠があるために、最後の審判の日には誰も弁解することができないのです。このように創造の明白な証拠を見ながら、なぜ人は神様を信じないのでしょうか？ 人は目に見えるもの、手で触れるもの、自分の知識と思いで理解できるものだけを信じようとするからです。それでは、この自分の知識と思いはどこから来たのでしょうか？ 生まれながらにして持って出て来たのでしょうか？ この世に生まれて、神様を信じない人々に聞いて習った知識なのではないのでしょうか？ これらの知識によって、思いが働くようになったのではないのでしょうか？ 目に見えない神様がおられるという事実や、聖書に書かれている不思議とするしなど、人の力を超えることは認めようとしません。

しかし、聖書のすべてのみことばは、明らかに真実です。神様が天地を創造さ

れたことも事実であり、不思議としるしも、御力のわざも、みな実際に起きたことです。創造主の神様だけにおできになることです。人の知識と思いで限界があり、とうてい理解することも信じることもできないために、聖書を否認しようとしませんが、聖書に記された不思議としるしと御力のわざは、すべて事実です。

<ヨハネの福音書 4:48>に「そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。』」とあります。人の限界を超えるしるしと不思議を見ると、人の思いと枠が砕かれます。自分は全く不可能だと思っていたことを神様が行なわれるのを見て、聞いて、体験するとき、これまで自分が学んで正しいと信じてきた知識と神様のみことばが一致しなくても、神様のみことばだけがまことであり、真理であることを認めるようになります。

それで、聖書を見ると、神様は数多くの御力のわざを行なわれて、神様の生きておられることを現してくださいました。神様を信じないエジプトのパロとその家臣たちに、モーセは十の災いで神様を現して見せました。預言者エリヤは天から火を引き下ろして、三年半の日照りの中でも雨を降らせました。イエス様は、しるしと不思議によってご自分が神の御子であることを証しされました。異邦人の使徒であるパウロは、イエス・キリストの御名で病気とわずらいをいやし、悪霊を追い出し、死んだ者を生かしました。

このように創造主である神様だけが行なえるみわざを見ると、信じなかった人々も創造主の神様を認めました。福音を受け入れて、救い主イエス様を受け入れました。私たちが生きているこの時代にも、このような神様のみわざはどうしても必要です。しるしと不思議を現す神様の御力は、信じない人々に生きておられる創造主の神様を信じるようにする、最も確かな証しになるのです。

2. 神様は「わたしはある。」という方である

神様が天地万物を創造されたと言うと、たびたびこういう質問をする人がいます。「創造主の神様は誰が造ったのですか？」「神様はいつからおられて、その前には何があったのでしょうか？」と聞くのです。これについて<出エジプト記 3:14前半節>を見ると、「神はモーセに仰せられた。『わたしは、「わたしはある。」という者である。』」と書かれています。誰かが神様を生んだのでもなく、誰かが神様を造ったのでもありません。神様は、人が想像できない永遠の昔からすでにおられ、これからも世々限りなくおられる方です。

ところが、人間の経験と知識では、すべてのものに「初め」と「終わり」があ

ります。たとえば、人や動物にも初めと終わりがあります。「いつ、どんな両親から生まれた」という初めがあって、「いつ、どのように死んだ」という終わりがあります。いくら古くなった骨董品にも、必ずそれが作られた時があります。歴史的な事件にも、その初めと終わりがあります。ですから、神様についても、初めにどのように存在するようになられたかがあるはずだ、と思うのです。

しかし、人間の思考の限界を超えて考えるなら、創造主であり、絶対者である神様に何かの初めがあるとしたら、むしろそれがおかしいのです。仮に神様がある時点から存在するようになられたら、それ以前には何があったかを考えるようになるでしょう。また、誰かが神様を創造したり生んだりしたなら、神様も完全な方ではないということです。ですから、絶対で完全である神ならば、その方は当然、初めも終わりもなく、もともと「わたしはある。」という方でなければなりません。

それでは、永遠の昔から「私はある。」という神様は、どんな姿でどのように存在しておられたのでしょうか？

<ヨハネの福音書 1:1>に「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」とあります。ここで「初め」とは、万物が創造される前、ただ神様おひとりだけが存在しておられた大昔、はるか昔の時間を言います。被造物である人間の限られた経験と知識では決して理解できない、永遠の昔を意味しているのです。このように永遠の昔から「わたしはある。」と仰せられる神様について、「ことばは神であった。」と書かれています。神様は何かのかたちを持っておられたのでなく、ことばそのものとして存在しておられました。

<ヨハネの手紙第一 1:5>を見ると、「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」とあります。ここで「光」と「暗いところ」という言葉には、霊的な意味が入っています。「暗いところ」とは、不義、不法、罪と悪など、真理でないすべてのものを意味します。反対に「光」とは、罪や悪が全くないことであり、愛、善、義など、真理に属するすべてのものを意味します。

ところが、神様は霊的な意味で光であるだけでなく、実際にも光として存在しておられました。このように、ことばである神様は、美しく妙なる光の中で、清く澄んだ声を帯びたかたちとして存在しておられました。人が想像もできないほど美しい光の中に、清く澄んで穏やかでありながらも、全宇宙にとどろくような

勇壮な声としておられたのです。

このように、光と声としておられた神様は、ある時点になると、人間を創造しようと思われました。互いに愛を分かち合う対象がほしくなられたのです。このような人間についてのすべての計画を成し遂げるために、まず神様は、三位の神様に分離されます。御父である神様から、将来、人類の救い主になられる御子イエス様、そして助け主聖霊様に分離されたのです。こうして三人の方としてそれぞれ存在するようになられましたが、この三人の方の元は同じです。それで、「三位一体」と表現するのです。

このように三位一体に分離されて、神様は具体的なかたちになられました。そのかたちがどんなものなのか、<創世記 1:26>でよくわかります。「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」と書かれています。つまり、神様に似るように、御父、御子、御霊の三位一体の神様のかたちに人を造られたのです。私たち人を見ると、神様がどのような方なのかわかります。もちろん、人は外見だけでなく、心も神様の心に似るように造られました。

偶像礼拝に対する警戒

被造物である人とは違って、「わたしはある。」と仰せられる神様は、永遠の昔から世々限りなくおられる方です。「わたしはある。」と仰せられる神様だけが、完全なまことの神であり、私たちが拝んで愛する対象です。

ところが、ある人々はこのような神様を知らないので、人間が作り出した偶像を拝んでいます。金属や木、石などで形を作って、その前に行って拝むのです。天には北斗七星、北極星、太陽、月もあって、また、天使もいますが、そのような天にあるものを拝む人々もいます。

もし、自分が生んだ子どもが自分が親と知らずに、ほかの人のところに行って、「お父さん」「お母さん」と言うなら、どれほど心が痛むでしょうか？ 同じように、人が自分を創造された神様を求めないで、人が作り出した偶像を拝むなら、神様の心はどれくらい痛まれるでしょうか？ したがって、神様は偶像礼拝をとんでも嫌われるのです。

<出エジプト記 20:3-5>で「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。

あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」と言われました。ただ「私はある。」と仰せられる神様おひとりだけがまことの神であり、私たちはその方だけを拝んで仕えなければなりません。

3. 神様は全知全能のお方である

聖書を見ると、信仰で全能の神の力を体験した人々について、あちこちに記されています。神の力で葦の海が分かれたり、太陽と月が動かなくなったりしました。天から火が下りて来たり、三年半の日照りの中でも激しい大雨が降ったりしました。神の御姿であられるイエス様も、全能なる神様のみわざをそのまま現されました。死んだ者を生かし、すべての病気とわずらいを治されました。風と波を静めたり、水の上を歩かれたりしました。イエス様が復活、昇天された後も、全能の神の力は使徒たちによって続いて現れました。

特に使徒ペテロの場合は、人々が病人を大通りへ運び出し、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるようにするほどでした。使徒パウロの場合は、パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当たると、その病気は去り、悪霊は出て行きました。使徒たちに現れる御力がとてつもなく大きいので、彼らの影や手ぬぐいによってさえ、神様のみわざが現れたのです。

<ヘブル人への手紙 13:8>を見ると、「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」とあります。二千年前も、千年前も、今日も、同じように働いておられるのです。このみことばのように、イエス・キリストによる神の力も、聖書が記された当時だけあったのではなく、今日でもいくらでも現れます。

神様はこのように全能であるだけでなく、全知の方、すなわち、すべてのことをご存じである方です。人の心もご存じであって、今後起こることも、みなご存じです。このようにすべてのことをご存じの神様は、神様と明らかに交わる人々を用いて、将来の事を知らせてくださり、預言するようになります。

<アモス書 3:7>に「まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。」とあります。すなわち、神様が認める、神様の愛するしもべ、または預言者たちに、ご自分のはかりごとを示さないでは、何事もなさないのです。今日も同じです。旧約時代だけでな

く、今日も同じなのです。

神様が預言者たちに下さった数多くの預言が、聖書のあちこちに記されています。人類の救い主が来られること、イスラエルの滅亡と再建、また、終わりの時までの世界史の流れについても、詳しく預言されています。聖書の預言はそのまま成就されてきたし、まだ成就されていないことは、終わりの日、主の再臨までになされることです。

今日も神様は、神様と交わる人々を用いて、将来の事を教えてくださいます。私は今まで、神様が下さった多くの預言のことばを伝えてきました。たとえば、1987年、韓国の大統領選挙の時は、ノ・テウ候補が当選すること、どのくらいの票で当選して、なぜそうなるのかも教えてくださいました。それ以後、キム・ヨンサム、キム・デジュン候補が次々と当選することを預言しました。そして、その預言どおりになったことがわかります。

アメリカのレーガン大統領の当選、イギリスのサッチャー首相の当選も預言しました。インドのインディラ・ガンジー首相やソ連のチェルネンコ書記長など、いろいろな人物の死も、神様はあらかじめ知らせてくださったし、この前は周りの人々にさえ隠された、中東のある指導者の死を私に知らせてくださいました。それは誰も知らなかったし、その国の国民も知らなかった事実でしたが、神様が知らせてくださってからさほど経たないうちに、亡くなったというニュースがありました。

1999年、コソボ事態に関しても預言して、将来この紛争がどのように再発するのも知らせました。原油価格の変動と中東の流れについても預言しましたし、アメリカ、ヨーロッパ、旧共産圏など、世界の主要勢力の流れが、三つ巴戦の様相で固まることも預言しました。

前にキム・デジュン元大統領が北朝鮮を訪問した時も、キム・ジョンイル国防委員長が答礼訪問すると言って、マスコミ全体が、また、国民全体がそれを信じました。また、全世界もそれを信じました。しかし、私は講壇で、キム・ジョンイル国防委員長は来ないと宣言しました。北朝鮮に対する太陽政策の失敗と、今後、北朝鮮が門戸を開放すること、そして、再び閉じることなども預言しました。

そのほかにも神様は数多くの預言を下さり、その一つ一つがそのまま成就され続けています。人としては不可能などんなことも、神様は十分におできになるし、過去、現在、未来のどんなことでも神様はみなご存じです。このように世界史のすべての流れをご存じの神様は、人それぞれの心と将来もご存じです。ですから、

全知全能の神様に人生のすべてゆだねれば、神様はどんな時にも栄える道、祝福の道にだけ導いてくださるのです。

4. 神様は聖書の著者である

教会に来ると、誰でも聖書に接するようになります。聖書には「救いの道」が明らかに記されています。神様がなぜ人間をお造りになったのか、人類の歴史をどう導いていかれるのか、人間耕作の始めと終わりについて説明しています。また、天国と地獄、救い主であるイエス様、人としてなすべきことなどについて、明らかに教えてくれます。

こういうみことばを信じて行なっていく時に、救いといのちを得ることができ、天国に入る資格を得るようになります。世の中には、その数を想像することもできないほど多くの本があります。しかし、人に救いといのちを与える本は、ただ聖書だけです。

聖書は旧約 39 巻、新約 27 巻、全 66 巻で構成されています。そして、この聖書を記した人は、旧約 26 人、新約 8 人、計 34 人だと言われています。たとえば、「創世記」はモーセが、「伝道者の書」はソロモンが、「イザヤ書」は預言者イザヤが書き記しました。新約の記述者としては、四福音書を記したマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと、使徒パウロ、ペテロ、ヤコブ、ユダがいます。そして、聖書が書かれた期間は、旧約が約 1500 年、新約が約 100 年、合わせて約 1600 年です。約 1600 年という長い歳月にかけて、34 人もの人々が記した書物を集めたものが、聖書です。

ところで、この聖書全体の著者は、神様です。先に説明したように、34 人の記述者がいますが、彼らは著者ではなく、ただの代筆者です。たとえてみましょう。次男と遠く離れて住んでいる母親が、次男に手紙を書こうとします。それで、母親は一緒に住んでいる長男に、手紙の内容を口で言って書かせます。では、その手紙は誰の手紙でしょうか？ 長男が書いたのですから、長男の手紙でしょうか？ 違います。たとえ書いた人は長男であっても、その内容は、明らかに母親のもので、このように聖書も、その内容は神様のみことばですが、神様がみこころにかなう人々をつかさどられ、聖霊の働きによって書き記すようにされたのです。

<イザヤ書 34:16>「主の書物を調べて読め。これらのもののうちどれも失われていない。それぞれ自分の連れ合いを欠くものはいない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊が、これらを集めたからである。」

<テモテへの手紙第二 3:16>「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」

<ペテロの手紙第二 1:21>「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」

聖書の記述者がいくら多くても、聖書全体は、まるでひとりが記したように、互いに矛盾するものがなく、一貫性があります。それはまさに、全知全能の神様が、聖霊の働きによってつかさどられたからです。

聖書は、このように聖霊に感じて記された書物ですから、解釈する時も、必ず聖霊に感じて解釈しなければなりません。人間的な考えや知識で解釈すると、間違った解釈をするようになります。<ペテロの手紙第二 3:16>に「その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所のみを曲解し、自分自身に滅びを招いています。」とあります。

今日、このようにして滅びを招いている人々がどんなに多いでしょうか。そして、聖書は書かれたそのままを信じればよいのに、それを反対に教える人がどんなに多いでしょうか。一つ一つの節に含まれた神様のみこころを正しく悟るためには、それに当たるみことばの連れ合いを知るべきであり、それによって完全に霊的な意味を悟らなければならないのです。

聖書の預言の成就

聖書は歴史的にも証しすることができます。旧約聖書のイスラエルの歴史と、周辺民族との出来事と登場人物、場所や慣習などを見ると、一つ一つが非常に事実に基づいて書かれたことがわかります。聖書には多くの預言がありますが、その一つ一つが、実際そのまま成就されてきました。

たとえば、<ルカの福音書 19:43-44>に「やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」とあります。これは、エルサレムの滅びについてのイエス様の預言です。

その時から 40 年余り過ぎた A.D.70 年、ローマのティトス将軍がエルサレム城を滅ぼしましたが、その過程で、イエス様の預言がそのまま成就されたことがわかります。ローマ軍はエルサレム城の四方に土城を築き、城を陥落させました。城を占領した後は、子どもまで惨たらしく殺して、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されないほど、建物を完全に破壊しました。

このほかにも、聖書にはいろいろな歴史的な事件が預言されています。その中でも最も重要なものは、イエス様についての預言です。聖書の核心的テーマである「救いの道」を完成するためには、罪人になった人類を救うことができる「救い主」が、必ず来なければならなかったのです。それで神様は、旧約のところどころに、メシヤ（救い主）になられるイエス様の誕生と働き、苦しみ、復活などについて詳しく預言しておかれました。そして、時が来ると、約束されたとおり、イエス様をこの地上に遣わしてくださいました。イエス様が旧約の預言を完全に成就された内容が、新約に詳しく記されています。

その中のいくつかを調べてみましょう。まず、イエス様の誕生についてのことです。<イザヤ書 7:14>には「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」とあり、<ミカ書 5:2>には「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」と書かれています。このような預言どおり、イエス様は聖霊によっておとめマリヤに宿り、ベツレヘムのある宿屋の家畜小屋で私たちのためにお生まれになりました。

また、イエス様がお生まれになったとき、当時ユダヤの王だったヘロデがイエス様を殺そうと、二歳以下の男の子たちを全部殺させました。ところがこの時、

神様はヨセフの夢によって、イエス様があらかじめエジプトに逃れるようにされました。ヘロデが死んだ後、もう一度夢によって、エジプトからイスラエルへ帰るように指示されました。これについても、旧約聖書<ホセア書 11:1 後半節>に「わたしの子をエジプトから呼び出した。」と預言されてあります。

イエス様がエルサレム城に入城される時も、<ゼカリヤ書 9:9>に書かれているとおり、ろばに乗って入城されました。「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子のろばに。」と書かれているとおりです。

また、<詩篇 41:9>に「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。」と言われたように、イエス様の最も近くでみことばのパンを与えられていたイスカリオテ・ユダが、イエス様を裏切って売りました。<ゼカリヤ書 11:12>に「私は彼らに言った。『あなたがたがよいと思うなら、私に賃金を払いなさい。もし、そうでないなら、やめなさい。』すると彼らは、私の賃金として、銀三十シケルを量った。」とあったように、ユダがイエス様を売った値段は、銀貨三十枚だったことがわかります。つまり、旧約で預言したそのまま、銀三十枚でイエスを売ったのです。

このように、イエス様についての旧約聖書の多くの預言は、新約時代に一つ一つ、すべてそのまま成就しました。

新約聖書の<コリント人への手紙第一 15:6>には、イエス様が死んでからよみがえられたことを直接見た証人が、五百人以上もいると書かれています。「その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。」とあります。このように直接目撃した証人たちによって、主の復活は世に広く伝えられました。

主と、主について記された聖書のすべてのみことばが明らかな真実であり、神様のみことばであることが、今日まで世に伝えられてきたのです。そして、この証人たちによって伝えられた内容を聞いて、心から信じた人々は、今日も聖書の著者である神様に出会って体験します。神様が与えられた聖書の約束のことばを信じて行なうとき、その約束を守ってみことばを成就される神様のみわざが体験できるのです。

聖書は、主の再臨が近づく時の前兆と、終わりの時に世界の情勢がどう移り変わっていくかを預言しています。これから起こる七年患難と第三次世界大戦、千年王国と大審判、そして、天国と地獄に至るまで、今後の出来事についても預言しています。また、このような歴史の流れの中を生きていく私たちが、どうすれば救われて祝福を受けるのか、どうすれば永遠の天国に至るのか、これらすべてのことも聖書には詳しく記されています。

ところが、ある人々は「神様を信じています」と言いながら、聖書が神様のみことばであることを心の底から信じません。「聖書が神様のみことばだと信じます」と言いながら、そのみことばが完全に信じられない場合もあります。ですから、自分の思いに合わない時や自分の益に合わない時は、みことばどおり行なうことができません。

聖書は明らかに神様のみことばであり、完全に神様が成し遂げられるみことばです。したがって、聖書に約束されたみことばを信じて行なう人には、神様が必ずその約束どおり祝福を下さいます。

これまで、神様は天地万物の創造主であり、「わたしはある。」と仰せられる方であり、全知全能の方であり、聖書の著者であられると説明しました。もちろん、そのほかにも神様についてはいろいろと説明することはできます。神様は光であり、愛であり、終わりの日に万物をさばかれる裁判長であり、私たちを愛してくださる父であります。私たちが聖書を読んで口ずさみ、そのみことばどおり行なっていくほど、ますます神様について多くを悟るようになり、愛の父なる神様に明らかに会うようになります。

<箴言 8:17>には「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す者は、わたしを見つける。」と書かれています。私たちが誰かを心から愛するなら、喜んでその人の願いを聞いてあげます。神様を愛することも、神様を熱心に捜すことも、結局は、神様のみことばである聖書を信じて、そのみことばを守り行なうことなのです。

第2章

神様の人間創造と人間耕作

1. 人間を創造された神様

私たちの神様は、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもない方であり、人の想像もできない遠い大昔から、「私はある。」という方としておられました。そうするうちに、いつしか神様は一つの計画を立てるようになられました。天地創造と人間創造の計画でした。その計画を成し遂げるために、神様は永い歳月にかけて、一つ一つ準備作業を始められました。

まずは、神様がおられた霊の空間から、将来、天地万物と人間を造る、肉の空間を分けられました。そして、もともとおひとりでおられた神様から、御子と御霊の神様を分離なさり、御父・御子・御霊の三位一体の神様として存在されるようになりました。そして、その時から神様もかたちを持たれましたが、それが私たち人間と同じかたちでした。霊の世界の中には、天の軍勢、天使、ケルビムなどの霊の存在を、肉の空間の中には、将来人間が生きていく地球を造っておられました。

このようにすべてを用意されてから、神様は本格的に天地創造のみわざを始められます。<創世記1章>を見ると、神様が六日間で天地万物を創造された過程が、おおまかに記されています。第一日には光を、第二日には大空をお造りになり、第三日には地と海を分けられた後に、植物と草、果樹などを造られました。第四日には空に太陽と月、星を造られ、第五日には海の生き物と鳥を創造されました。

第六日には家畜やはうもの、野の獣を造られて、最後に人を造られました。このように、霊の世界と肉の世界を分けられて、天と地と万物を造られたすべての過程が、結局は人を創造するためでした。まるで赤ちゃんが生まれる前に、生まれてくる赤ちゃんのために部屋を整えて、服やすべての物を用意しておく親のように、神様は人が生きるのに適する環境を造り、その後で人を造られて、すべてのものを豊かに味わって生きるようにされました。

人をお造りになった理由

では、神様はなぜ人をお造りなされたのでしょうか？ なぜ今日までこの地上に多くの人々が生きていくようにされるのでしょうか？ この問いに答えられるなら、人がなぜ生きるのか、どのように生きるべきかについても、答えが得られるでしょう。まことの人間の価値を悟るためには、神様が人間を創造された目的を悟らなければなりません。自分が生まれた目的にかなう人生でこそ、まことに価値があり、意味のある人生です。

<伝道者の書 3:11>に「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」とあります。このみことばのように、神様は人の心に永遠への思いを与えられました。その心があるために、良心が正しい人々は、たとえ神様について聞いたことがなくて知らないとしても、漠然とですが、神を認めて捜すようになります。「私は神を信じない」と言っている人も、心の深いところでは「ひょっとして、本当に天国と地獄があればどうしよう」と、後の世に対する恐れを持つこともあります。それで、地獄に行かないように、自分なりに正しく生きようと努力したりします。

土地のちりで形造り、いのちの息を吹き込まれると

<創世記 2:7>に「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」とあります。天と地を造られるとき、神様は万物をみことばで創造されましたが、人はご自身が土地のちりで形造られました。ただうわべだけおおざっぱに造られたのではなく、五臓六腑と骨と筋肉、すべての組織まで、完璧にお造りになりました。生きている姿そのままを細やかにすべて造られた後に、神様がいのちの息を吹き込まれると、その時から人は霊が生きて、動けるようになりました。

ところが、ある人はこういうみことばを聞くと「信じられない」と言います。「土地のちりで造られた形が、どうやって生きて動けるのだろうか」と疑うのです。しかし、被造物である人も、知識が発達すると人に似たロボットも作り出します。人の頭脳をまねてコンピュータを作ったり、人工臓器や人工皮膚を作り出したりします。

被造物である人にもこういうことができるのに、まして全能の神様が人を創造されるのに何の難しいことがあるのでしょうか？ 複雑な部品を組み立てて機械を作って、それに電源をつなぎさえすれば、まるで生きているかのように動きます。

これは、私たちの神様が、私たち人間の五臓六腑を含むあらゆるものを作られた後に、いのちの息を吹き込まれると、人の霊が生きて動けるようになったことと同じです。

創造主の神様は、最初の人アダムとエバをお造りになってから、人が子孫を生み出していくように、いのちの種を下さいました。それが男の精子と女の卵子です。精子と卵子の中には、親のすべての気質が結集しています。その小さいいのちの種の中に、容貌はもちろん、性格、知能、習慣などが全部入っていて、子どもたちは親に似るようになります。

目でも見えない小さいそのいのちの種、精子の中に、また卵子の中に、このようなものが全部入っているのですから、どれほど不思議なことでしょうか。このように、親に似て生まれるようにいのちの種を下さった方も神様であり、その種によってみごもるようにされる方も神様です。親の精子と卵子が結びついて子どもができますが、その命が宿ることは神様がつかさどられます。

神のかたちに

子どもが親と先祖に似るとすれば、人類の先祖であるアダムは誰に似たのでしょうか？ <創世記 1:27>を見ると、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」とあります。アダムとエバは、まさに聖なる神のかたちに造られた、ということです。

この時、人が神のかたちに造られたとは、ただうわべの姿だけを言うものではありません。人において重要なものは霊と魂であり、からだは霊と魂を入れる器にすぎません。人が神のかたちに造られたという時に、もっと重要な意味は、人の霊が神様の霊から出て来て、神様に似た霊で造られた、ということです。それで、神様は私たちの「霊の父」と言うのです。

2. 人間を耕作される神様

人類は長い間、「なぜ生きるのだろうか？」という問いへの答えを探すために、絶えず努力してきました。しかし、この人生の目的については、私たちが創造主の神様を認める時だけ、明快な答えが出ます。創造主の神様が「なぜ人間を造られて、この地上で耕作されるのか」を悟ればよいのです。ここで「耕作」という表現を使った理由は、聖書の中のたとえに由来するからです。

耕作に関するたとえ

聖書には多くのたとえがありますが、その中でも特に、地を耕して実と穀物を取り入れるたとえがたくさん出て来ます。たとえば、<マタイの福音書 13 章>を見ると、イエス様は人の心を四つの畑にたとえておられます。人の心の畑の種類によって、神のことばという種がその心に蒔かれる時に、真理によって実る程度が違うことを説明されました。

また、<マタイの福音書 3 章>の麦と殻のたとえや、<マタイの福音書 13 章>の麦と毒麦のたとえで、将来あるさばきについて説明されました。麦のような人々は、審判の日に天国の倉に入るけれど、毒麦と殻のような人々は、地獄の火に投げ込まれる、ということです。

聖書のこのようなたとえで、神様は、この地上に人を造って人類の歴史を摂理のうちに導かれる過程が、まさに耕作のようだ、と教えてくださるのです。農夫が刈り入れるために地を耕すように、神様も農夫のように私たちを耕しておられるということです。

人間耕作の理由

それで、神様が私たち人を創造して、この地上に生きていくようにされるすべての摂理は「人間耕作の摂理」とも言えるのです。それでは、神様はなぜアダムを創造して、今日まで人間を耕作されているのでしょうか？

人間耕作の目的はまことの子どもたちを得ることです。神様は愛を分かち合う子どもを得たいと願われたのです。

創造主の神様は神としての驚くべき御力と、恐ろしい審判者としての権威、厳格な公義など、神性的な面を持っておられます。しかし、これと同時に、神様は愛と憐れみ、慈しみなどの人性的な面もお持ちです。喜んでうれしく思われたり、悲しんで嘆いたりもされます。このように人性を持っておられるので、神様はさびしくおひとりであるよりは、互いに愛を分かち合う対象を願われました。それで、人間を創造して耕作することを計画されました。

もちろん、あえて人間を造らなくても、神様には多くの天使と天の軍勢がいました。彼らは神様に無条件に従う存在であり、神様を崇めてたたえて栄光をささげました。従うことも従わないこともできるけれど、神様を愛するがゆえに従おうと選択するのではなく、無条件に従う存在です。その中には、人性を与えて、

自分で選べるように造っておいた天使たちもいました。その中のひとりがルシファーです。それで、ルシファーは従順ではなく、裏切りを選んだのです。しかし、神様はこういう天使たちとは別に、心からわき上がる愛で自由意志によって従う、まことの子どもたちを望まれたのです。

たとえを一つ挙げてみましょう。ある人に息子がひとりいました。その息子は時には問題も起こしたりして、親の心を痛めます。けれども、親に叱られるとすぐ悔い改めて、赦しを求めてかわいくふところに飛び込んできます。そのうち、年を重ねるほど親の心を理解して推し量れるようになります。親を理解するほど、その恵みに対する感謝と愛も深くなります。

ところで、この家庭には非常に優れた性能のロボットが一体あります。このロボットは人の形をしていて、人のように声を出したりして、言われるとおり無条件に従うように造られました。難しいことも言われたとおりにすらすらやり遂げるので、とても人の役に立って、先に言った子どものように、問題を起こしたり、親に心配をかけたりしません。

それでは、本当の親ならばどちらを願うでしょうか？ 「性能が良くてよく言うことを聞くロボットがいるから、子どもはいらぬ」と言うでしょうか？ いくら従順で人に似たロボットだとしても、心を分かち合う実の子に比べることはできません。

神様も、このように心が分かち合えるまことの子どもたちを得ることを願われました。よく従うようにだけ造られた天の軍勢と天使たちよりは、心から神様を愛して、自ら従う子どもたちがほしいと願われたので、人を造られたのです。耕作によって神様のみこころを悟り、神様を心から愛する子どもたちを得れば、彼らを永遠の天国に導いて、そこで喜びと幸せだけを味わいながら生きていくようにされたのです。

3. 麦と殻

農業をしてみると、麦だけ出て来ることはありません。たとえ農夫が最善を尽くして耕作しても、収穫の時は麦だけでなく、殻も混ざって出るものです。殻は食べられず、麦と一緒に倉に入れておくと、麦まで食べられなくなります。ですから、殻は肥料に使ったり、火で焼いたりしてしまうしかありません。

同じように神様も、人間を耕作された後、最後には麦と殻とを分ける作業をされます。〈マタイの福音書 3:12〉を見ると、「手に箕を持っておられ、ご自分の脱

穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」とあります。

ここで「消えない火」とは、地獄の火を意味します。神様が定めておかれた終わりの時が来ると、神様は人間耕作を締め切って、この地上に生きたすべての人々をさばかれます。この時、麦になれなくて殻になった人々は、さばきによって地獄の火に落ちるのです。

それでは、天国に行く「麦」と、地獄に行く「殻」とは、それぞれどんな人でしょうか？

麦

「麦」とは、イエス・キリストを受け入れて、神様を愛してみことばどおりに生きていく人を言います。こまめに罪と悪を脱ぎ捨てて、聖なる神様のかたちを取り戻した人です。

殻

一方、「殻」とは、神様を信じないで、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れなかった人であり、真理に逆らうものと暗やみの中にとどまっている人です。

また、「神様を信じている」と言いながら、疑って完全に信じられない人で、やはり真理に逆らうものと暗やみの中にとどまっている人も「殻」です。口では「主を信じている」と言っても、相変わらず神様のみことばどおり生きないで、世の中の欲を追って罪と悪の中に生きる人も「麦」ではなく「殻」です。それで、<マタイの福音書 7:21>で「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と言われたのです。

<テモテへの手紙第一 2:4>に「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」とあります。神様は、すべての人が神様のみこころを知って、麦となって救われることを望んでおられます。それで、ひとり子イエス様まで十字架の死に渡してくださいました。

それにもかかわらず、主を救い主として受け入れない人や、相変わらず罪の中に生きる人は、神のかたちに造られた人としてのまことの価値を取り戻すことができません。神様のまことの子どもになれない、ということです。こういう人々

は人のすべきことを行なわないので、獣にすぎない存在であり、「麦」ではない「殻」になるのです。

このように人としての価値を失った「殻」を、「麦」になった人々と一緒に天国に入れることはできません。世の欲に従って、互いに嫌ってそねみ、欲と争いとあらゆる悪を持った人々を天国に入れると、どうなるでしょうか？ それでは、天国が幸せで美しいところ、栄光のところと言えなくなります。

それでは、天国に入って来ることができない人々は、どうすればよいでしょうか？ ただ消滅してしまうのでしょうか？ いくら「殻」のような人々でも、人の霊と魂は、霊である神様のいのちの息が吹き込まれたので、永遠不滅なもので消滅しないのです。ですから、彼らも一か所に集めて、永遠に閉じこめておかなければなりません。その場所がまさに地獄であり、「殻」になった人々は、それぞれの罪の報いにより、永遠の火の中で刑罰を受けるようになります。

私たちは、神様が耕作なさる目的にそって、良い麦になるために生きるべきです。第一に、創造主の神様を信じて、私たちの救い主イエス・キリストを受け入れなければなりません。また、神様のみことばに聞き従いながら、聖霊の力で変えられて、聖められて生きなければなりません。そのようになれば、神様は私たちをまことの愛が分かち合えるまことの子どもとして認めてくださいます。そして将来、私たちを美しい天国に導いて、永遠の幸せと喜びを分かち合われるのです。

第3章

エデンの園でのアダムとエバ

1. エデンに園を設けて、アダムを導かれる

<創世記 2:8> 「神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。」

<創世記 2:15-17> 「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。神である主は、人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。』」

2. アダムを教えられた神様

最初にアダムが造られたとき、アダムの姿は成長したおとなのかたちでしたが、知識の点では、まるで生まれたばかりの赤ちゃんのようでした。これは、たった今生まれたばかりの赤ちゃんを考えれば簡単に理解できます。赤ちゃんには知識や知恵がありません。神様が脳細胞の中に記憶装置を下さいましたが、まだ見て聞いて教えられたものがない無の状態ですから、本能的なこと以外には何もできません。

同じように、アダムが初めて霊の生きた者として造られた時は、たった今生まれたばかりの赤ちゃんのように、何も入力されていない無の状態だったので、霊の知識や知恵がなかったのです。まるで、新しく買ってきた高性能のコンピュータの中に、まだどんなデータも入力していないようなものです。こういう状態から、アダムはだんだんと神様からいろいろな知識を学んでいきました。神様について、霊の世界について、真理と善と光について、多くの霊の知識を学んで、万物を治められる知識なども学びました。こうして多くの知識を学んだアダムは、ついに万物の霊長として、すべてのものを従えて支配する資格を備えるようになりました。

<創世記 2:19>には「神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥

を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。」と書かれています。

今日、いくら優れた鳥類学者でも、地球上のすべての鳥の形と特性全部は知らないでしょう。ところが、アダムは鳥だけでなく、あらゆる野の獣まで、彼らの特性と生態を知って、それぞれに最もふさわしい名をつけました。アダムは万物の霊長として、すべてのものが治められる資格を備えていたのです。

3. 生んでふえたアダムとエバ

神様は、このようなアダムがひとりであるのは良くないと思われて、アダムのあばら骨一つを取り、助け手として女であるエバを造られ、その後、一体となるようにされました。

これは、アダムが自分でさびしいと感じたのではなく、永い歳月、おひとりでおられた神様がアダムのことを考えて施された愛であり、生んで、ふえて、地を満たすように祝福されたのです。

<創世記 2:20-25>に「こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。すると人は言った。『これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。』それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。」と書かれています。

また、<創世記 1:28>には「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」とあります。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」と仰せられたとおり、彼らは多くの子どもたちを生んでいきました。

アダムとエバがエデンの園で生きながら子どもを生んだということは、聖書でも明らかに確認できます。<創世記 3:16 前半節>に、罪を犯して、エデンの園から

追い出されるエバに「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」と言われた神様のみことばがあります。みごもりの苦しみを「大いに増す。」ということは、以前にもみごもりの苦しみが少しはあったという意味です。子どもが生まれてくるには、骨盤が広がる痛みが伴うものです。ただ、呪われる前はその苦しみが少なかったけれど、その後からは苦しみが大いに増す、ということを言われているのです。それで、今日、子どもを産む時は、多くの痛みと苦しみが伴うようになりました。

4. 数え切れない歳月をエデンの園で生きたアダム

それならば、アダムとエバはエデンの園ではたしてどれほど生きたでしょうか？ 聖書に具体的に記されていませんが、彼らがそこで生きた歳月は、人が想像できないほど永い期間でした。エデンの園は病気も、老いも、死もない所です。このような所でアダムとエバは、人には計れないほど永い歳月を過ごしました。

しかし、聖書はこのような過程をただの数節で記しています。したがって、神様がアダムをエデンの園に導かれた後、すぐに善悪の知識の木の実を取って、滅びの道に向かったと誤解する人々がたくさんいます。それで「神様を信じている」と言いながらも、「人間耕作の歴史は六千年にしかないのに、数十万年前のもの」と推定される化石が出て来るのはなぜですか？」と質問することもあります。

聖書に記された人類の歴史は、最初の人アダムが創造されてからの歴史を意味します。これはアダムがエデンの園で生きた歳月を含んでいるのですから、本当に数え切れない歳月だということを悟らなければなりません。しかし、人間耕作の歴史は、アダムが善悪の知識の木の実を取って食べ、呪われて、エデンの園からこの地上に追い出された後の歳月だけを意味するのです。エデンの園でアダムが神様のみことばに聞き従って生きていた数え切れない歳月は、人間耕作の歴史の中には含まれません。

したがって、アダムがエデンの園で数え切れない歳月を生きていく間、地球の地殻と地質などに多くの変化があったし、各種の生物にも繁殖、または絶滅の過程があったので、このような痕跡が化石として残っているということを悟らなければならないでしょう。神様が<創世記 1:28>で祝福されたとおり、最初の人アダムはエデンの園で多くの子孫を生んで、万物の霊長としてまことに永い歳月、生きたのです。

第4章

自由意志で不従順になったアダム

1. 善悪の知識の木からは取って食べてはならないと命じられた神様

神様は、豊かなエデンの園で思いきり神様の子どもとしての権勢を味わって生きていけるように、最初の人アダムに自由意志を下さいましたが、ただ一つ禁じられたものがありました。それは、善悪の知識の木から取って食べてはならないと命じられたことでした。

<創世記 2:15-17> 「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。神である主は、人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。』」

まことに神様を愛して信頼するなら、仮に善悪の知識の木の実を食べたい心があっても、神様の命令なので食べないでしょう。反対に、神様を愛さないならば、結局は命令が守れないという結果を生みます。したがって、神様はエデンの園の中央に善悪の知識の木を置いて、創造主である神様と被造物である人との間に秩序を立てられましたが、同時に自由意志も下さったのです。これは、心の底から聞き従う子どもを得るためでした。

2. 聞き従わなかったアダム

愛の神様は最初の人アダムに、神様のみことばに聞き従えば永遠のいのちと幸を得て、反対に、聞き従わなければ死に至ることを知らせて、善悪の知識の木の実を食べないように、細かく教えてくださいました。

しかし、永い歳月が流れていくうちに、アダムとエバは神様のみことばをないがしろにするようになり、結局、善悪の知識の木の実を取って食べてしまいました。神様に立ち向かおうと虎視眈々、機会をうかがっていたサタンが、野の獣のうちで一番狡猾だった蛇を操ってエバを惑わすと、結局アダムも神様のみことばに聞き従わなくなったのです(創世記 3:1-6)。

1) どのようにしてアダムは神様の命令に聞き従わなくなったか？

(ア) エデンの園を耕して、そこを守る権威を受けたアダム

<創世記 2:15>を見れば、神様はアダムにエデンの園を耕して、そこを守るようにされました。これは敵である悪魔・サタンの侵入を防ぐためです。

<創世記 2:15>「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」

(イ) サタンが蛇を操ってアダムとエバを誘惑

それにもかかわらず、どのようにしてサタンがエデンの園にいる蛇を操ることができたのでしょうか？

サタンは実質的な形がある存在でなく、空中の権威を持って支配している悪い霊のことです。したがって、サタンはまるで空中に飛び交っている電波のようなものなので、エデンの園にいる蛇の思いに働きかけて、人を惑わすことができたのです。

<創世記 1 章>を読むと、神様の創造の過程で一つ特異な点が発見できるでしょう。毎日新しいものを創造された後に、必ず「神は見て、それをよしとされた。」と記されているのに、唯一大空を創造された第二日だけは、そのようなことばがありません。これにはとても重要な理由があります。

<エペソ人への手紙 2:2>に「空中の権威を持つ支配者」すなわち「今も不従順の子らの中に働いている霊」が出て来ますが、このように悪い霊どもが将来、大空で空中の権威を持って支配することを予知されたからです。

(ウ) 蛇がどのようにエバを惑わしたか？

エバと非常に親しかった蛇

家族や親しい友人、あるいは愛する人が神様の戒めを破るように惑わすと、人はもっと簡単に真理から抜け出てしまうものです。敵である悪魔・サタンがエバを惑わす時も、ふだんからエバと親しかった蛇を利用しました。

サタンが単なる野の獣にすぎない蛇を使ってエバを惑わすことができたのは、エデンの園では人が花や木、動物など、すべての生物と話ができたからです。

その当時、蛇は今日とは違って、人に愛されて親しかったのです。すべすべしてきれいだし、長くて丸い上にさとくて(マタイ 10:16)、エバの心がよくわかって楽しませたので、いつもエバの近くにいてかわいがられたのです。今日、犬がほかの動物より人の言うことをよく聞いて利口なので、主人から愛されるのと同じことです。

ところで、今日はほとんどの人が「蛇は考えただけでも気味が悪くて、鳥肌が立つんですが」と言って嫌います。それは、蛇が人間の先祖エバを誘って、滅びの道に向かわせた張本人なので、本能的に嫌うからです。

私たちが蛇の狡猾な属性を理解するためには、もともと持っている土質について知らなければなりません。どの土もそれぞれ成分が違います。成分自体は時間が経っても変わりませんが、どんな物質が加えられるかによって土の質が変わり、荒くて悪い土になったり、やわらかくて良い土になったりするのです。

<創世記 2:19>を見れば、神様が土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとありますが、それぞれ野の獣にふさわしい土を選んで創造されたのです。かといって、蛇の場合、初めから神様が狡猾に造られたものではありません。人から愛されるほどさとく造られましたが、蛇の土質にサタンの悪い成分が入ったので、狡猾な動物になったのです。したがって、もし蛇がサタンの声を聞かなくて、ただ神様のみこころにだけ従って行なったとすれば、さとくて良い動物になったのに、サタンの声に従っていったので、結局人を惑わし、死に導く狡猾な動物になったのです。

神様のみことばを心に留められなかったエバ

サタンに操られた狡猾な蛇は、神様がアダムに善悪の知識の木の実だけは取ってはならないと命じられたことを知っていました。それで、エバに「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」と尋ねたのです。この時、エバは「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」と答えました(創世記 3:1-3)。

神様は明らかに「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」と言われました(創世記 2:17)。それなの

にエバは「『死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」と、神様のみことばを変えて答えたのです。これは、神様のみことばを心に留めることができないという証拠であり、明らかに信じられないという疑いの表現です。

ですから、不確かな答えを聞いた蛇は、さらに積極的にエバを惑わしたのです。<創世記 3:4-5>を見れば、「あなたがたは決して死にません。」とまで言って、神様のみことばを完全に否定するだけでなく、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と言って、再度惑わしたことがわかります。

肉の欲と目の欲、暮らし向きの自慢が入り込む

このようにサタンがエバの思いに欲を吹き込むと、善悪の知識の木が以前と違って見えました。<創世記 3:6>に記されているとおり、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかったので、エバはその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与え、彼も食べてしまいました。サタンの働きを受けている蛇の誘惑を、神様のみことばではね除けられないから、結局、肉の欲と目の欲、暮らし向きの自慢が入り込み、神様のみことばに聞き従わなくなったのです。

ある人は「人に悪があったので、善悪の知識の木の実を食べたのではないか？」と言います。しかし、アダムが不従順になる前は、全く悪がなくて、ただ善だけがありました。ただし、自ら選択できる自由意志によって、善悪の知識の木の実を食べることも、食べないこともできたのです。

ところが、永い年月が流れるうちに神様のみことばを心に留めていられなくて、サタンが蛇を使って惑わすと、神様が立てられた秩序に不従順になり、悪が入って来たのです。これは、子どもが悪に染まっていく過程を見れば、簡単に理解できます。

言葉と行動が乱暴な子どもがいるとすると、これは初めから悪いからそうなったわけではありません。初めは、ほかの人の乱暴な言葉や悪口を聞いて、どんな意味かも知らないまままねしたり、誰かが人を叩くのを見て、自分もまねして叩いてみたりするようになったでしょう。ところが、相手が泣く姿を見るたびにおもしろくなって、これが一度、二度と続くと、悪が芽生えて育ったということです。

同じように、霊が生きた者として創造された人に初めから悪があったのではな

く、自由意志で善悪の知識の木の実を食べたので悪が入ったのであり、その時、初めて罪が芽生えたのです。

3. アダムの不従順の結果 - 罪から来る報酬は死

神様が禁じられた善悪の知識の木の実を食べたアダムとエバは、神様のみことばどおり必ず死ぬようになりました。<創世記2:17>で「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」と言われたとおりになったのです。

<ヤコブの手紙 1:15>に「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」と書かれています。また、<ローマ人への手紙 6:23>を見れば「罪から来る報酬は死」という霊の世界の法則が出て来ます。それなら、はたして死が、不従順の罪を犯したアダムとエバにどのように臨んだのでしょうか？

1) 霊が死ぬと神様との交わりが途絶える

神様は明らかに「必ず死ぬ。」と言われましたが、聖書を見れば、アダムとエバは不従順になった後、すぐに死んだのではなく、永い歳月を生きて子どもを生んだことがわかります。

それでは、神様が言われる「死」とは、はたして何を意味するのでしょうか？ここで「死」とは、単に呼吸が絶える肉体の死でなく、霊の死を意味します。

もともと人は霊の生きた者として、神様と交わりができる「霊」と、霊の支配を受ける「魂」、そして、霊と魂を入れる「からだ」で創造されましたが(第一テサロニケ 5:23)、神様の命令を破ると、人の主人である霊が死ぬようになったのです。

神様は全く罪がおありにならないし、ただ光の中におられる聖なる方ですから、罪人は神様とともにいることができません。したがって、霊の生きた者だった時は、霊である神様と交わりができましたが、罪によって霊が死ぬと、神様との交わりが途絶えてしまったのです。

人の霊は神様と交わりながら、神様からいのちを与えられてこそ生きるのですが、アダムが罪を犯して罪人になった後は、それ以上聖なる神様と交わることができなくなりました。ですから、神様との交わりが途絶えてしまった人を、敵である悪魔・サタンは自分のものにして、罪を犯すようにさせて、ついには地獄へ引いて行くようになったのです。人のからだは死んだら朽ちてなくなりますが、

人の霊と魂は消滅しないので、結局、地獄に入り、永遠の刑罰を受けるのです。このようにアダムと神様との間に交わりが途絶えたことを「アダムの霊が死んだ」と言うのです。

2) エデンの園から追い出されて、労苦と死が避けられない人生になる

そうしてアダムとエバは、とても美しく豊かなだけでなく、いのちの木の実があって思う存分食べて、心配や憂いや苦しみもなく永遠に生きられるエデンの園から追い出されるようになりました。この時から人間耕作が始まり、労苦と死が避けられない人生になります。

(ア) 女に臨んだ呪い

<創世記 3:16>に「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」とあるとおり、この時から人類の苦しみが始まりました。女はみごもりの苦しみが大いに増し、苦しんで子を産まなければならない、夫を恋い慕うが、彼に支配されるようになりました。

(イ) 男に臨んだ呪い

男は呪われた土地で、一生苦しんでようやく食を得られるようになって、結局はひと握りの土へ帰る人生になってしまいました。

<創世記 3:17-19>に「また、アダムに仰せられた。『あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。』」とあるとおりです。

(ウ) 人だけでなく万物も呪われる

このように万物の霊長である人が罪を犯して呪われると、人が治めていた土地だけでなく、すべての家畜と野の獣も、ともに呪われるようになりました。それで、ハエや蚊のように病気をもたらす害虫が生じるようになったし、土地からはあざみといばらが出て来て、人が汗を流して畑を耕してようやく糧を得るようになりました。

<ローマ人への手紙 8:20-22>に「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」とあるとおりです。

3) すべてのアダムの子孫は罪人として生まれ、死の道に向かう

それだけではなく、最初の人アダムが不従順の罪を犯すと、アダムの血を受け継いだすべての人も罪人として生まれ、罪の報酬である死の道に向かうようになりました。

<ローマ人への手紙 5:12>の「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、それというのも全人類が罪を犯したからです。」のみことばとおりです。

すべての人は原罪を持って生まれる

神様は人を創造されたとき、いのちの種を与えて、生んでふえるようにされました。それで、人はいのちの種である精子と卵子が結びついて生まれますが、精子や卵子の中には親の気質が入っていて、親の顔つきや性分はもちろん、好み、習慣、食の好み、はなはだしきは歩き方まで似たりします。

このように親の気質を受け継いですべてが似るように、人間の先祖アダムが罪を犯した後、彼の罪の性質は子孫に自然に遺伝したのです。これを「原罪」と言います。不従順になったアダムの血を受け継いだすべての人は原罪を持って生まれるのです。

原罪の証拠

真理をよく知らない人は、「えっ、私がなぜ罪人ですか？ 私は何の罪も犯さなかったんですが」と反問するかもしれません。または「アダムが犯した罪がどうして私の罪になるんですか？」という疑問が起こるかもしれません。

理解を助けるために、まだ1歳にもなっていない子どものことを考えてみましょう。もし、自分のお母さんがほかの子にお乳を飲ませているのを見たとすれば、どうするでしょうか？ ほとんどの子は自分のお母さんのお乳を飲んでいるほかの子を押しつけようとします。それでもお母さんがお乳を飲ませるのをやめ

なければ、その子を叩いたり、お母さんを叩いたりするのが見られます。それでもお母さんが知らないふりをすれば「ワーン！」と泣いてしまいます。

このように、親が子にそねみや嫉妬、憎しみと欲を教えていなくても、すでに心の中に罪の性質が宿っていることが見られます。それで、人は生まれた時から親から受け継いだ原罪がある、ということを知らなければなりません。

自ら犯した罪

また、この世を生きていながら自ら犯した罪がどれほど多くあるでしょうか？ 光であられる神様の前では、ただ行ないに現れる不法だけでなく、憎しみ、さばき、欲など、心にいただいた悪ささえも暗やみであり、罪です(マタイ 5:28)。

したがって、聖書には、律法を行なうことによっては、誰ひとり神の前に義と認められないし、すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない、と書かれているのです(ローマ 3:20,23)。

4) 一生、ちりを食べなければならない

それでは、サタンに操られてエバを惑わした蛇は、どんな呪いを受けたのでしょうか？

<創世記 3:14>に「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。」と書かれています。「おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。」とありますが、実際に蛇はちりを食べるのではなく、鳥や昆虫、カエルやネズミを食べます。

ここで「ちり」とは、霊的に土地のちりで創造された私たち人のことを言い(創世記 2:7)、「蛇」とは敵である悪魔・サタンを意味します(黙示録 20:2)。ですから、神様が蛇に「ちりを食べなければならない。」と言われたのは、暗やみの中にとどまる人々が敵である悪魔・サタンの餌食になる、ということです。

ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めている

したがって、たとえ神の子どもといっても、悪を行なって罪を犯せば、敵である悪魔・サタンが働くので(第一ペテロ 5:8)、試練や患難がやって来るのが見られます。また、「神様を信じている」と言いながらも、神様のみことばを確かに信じられない人々を惑わし、死の道に導きます。まるでサタンがエバを惑わしたとき、親しかった蛇を使って働いたように、妻や夫、友だちなどの周りの人々を通

して働きます。

たとえば「主日大礼拝だけでいいのに、どうして夕方礼拝までささげるの？」
「どうしてそんなによく集まるの？」「神様は心の中までみんなご存じなのに、何
であんなに声を出して祈るの？」と言って惑わすのです。

しかし、神様は、安息日を覚えて聖なる日とせよ(出エジプト 20:8)、集まるこ
とに努めて(ヘブル 10:25)、わたしを呼べ(エレミヤ 33:3)と言われました。この
ような神様のみことばが心に完全に臨んでいる人ならば、サタンが惑わすことも
できないだけでなく、いくら惑わしても倒れません(マタイ 7:24-25)。

4. なぜ神様は善悪の知識の木を置かれたのか？

アダムが罪を犯したことと、その結果について聞いた人は、一つ疑問を持つよ
うになります。「神様は善悪の知識の木をなぜお造りになったのだろうか？」「初
めから神様が善悪の知識の木を置かれなかったら、アダムが取って食べなかった
のではないか？ それなら罪を犯さなかったし、死の刑罰にあわなくてもすんだ
のに。」

しかし、神様は明らかにアダムが善悪の知識の木の实を取って食べることをご
存じでした。そして、アダムをとて愛しておられたのに、善悪の知識の木の实
を置かれたのです。その理由は何でしょうか？ 結論から言えば、善悪の知識の
木の实を置かれたのは、アダムにまことの幸せを与えるためでした。

1) まことの幸せが悟れなかったアダム

アダムが住んでいたエデンの園は、とても美しくて平安で、どんな乏しいこと
もない所でした。このような所で暮らしていたアダムは、とても幸せだったはず
です。ところが、そうではなかったのです。アダムは幸せではなかったのです。
もう少し正確に言えば、アダムは幸せというものが感じられなかったのです。つ
まり、幸せというものを知らなかったのです。

2) まことの幸せは相対性を体験して

なぜなら、アダムは幸せの反対になる不幸を体験したことがなかったからです。
エデンの園で暮らしていた時のアダムは、病気や死、事故などを体験したことが
一度もなく、それによって悲しみや苦しみにあったこともありませんでした。
もちろん、不幸がどのようなことかを説明すれば、頭で理解することはできます。
しかし、不幸を直接経験しなかったら、不幸というものがどれほどつらいことな

のか、心から悟ることができません。

人があるもののまことの価値を知るためには、それと反対になるものを体験して、相対性を悟らなければなりません。仮に、私たちが生まれてから今まで病気にかかったことが一度もない、としてみましましょう。そうすると、病気による苦しみや悲しみがどんなことなのか、いくら説明を聞いても、心からは感じられません。ほかの人が病気にかかって苦しんでいるのを見ると、少しは感じますが、病気にかかった人の苦しみをそのまま感じることはできません。こういう人は、自分の健康についても、その分感謝が少ないのです。

しかし、健康だった人が病気にかかって苦しむと、健康の重要性を心から悟って感謝するようになります。すべて同じです。飢えて苦しんだ人でこそ、豊かな食べ物を見て心から感謝できます。悪があってこそ善がどれほど良いものなのかを知り、闇があってこそ光がどれほど大切なのかがわかります。貧しさがなければ富に感謝することがないし、憎しみがなければ愛が良いものなのかもわかりません。不幸が全くないエデンの園に住んでいたアダムは、自分の幸せが悟れなかったのです。死を見たことがないので、「善悪の知識の木から、取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」と言われても、そのみことばの意味を心から悟ることはできませんでした。神様はアダムをととても愛して、彼にすべてのものを与えてくださったのですが、アダムはまことに心の底から感謝できなかったのです。

3) 世で苦しみを味わって幸せを悟ったアダム

しかし、善悪の知識の木の実を取って食べて、エデンの園から追い出された後は、すべての状況が変わりました。アダムは呪われた世で生きていきながら、前は知らなかったいろいろな苦しみを味わうようになりました。飢えと疲れ、寒さと暑さ、死、別れ、そして、罪と悪による悲しみや苦しみを経験しながら、アダムはエデンの園に住んでいた時がどれほど幸せだったのかを悟るようになりました。

4) 親の心で人間を耕作される神様

もし人がまことの幸せと不幸が何かも知らないまま永遠に生きていくなら、どんな意味があるのでしょうか？ たとえつかの間苦労をしても、後で「これがまさに幸せなんだなあ」と感じられるなら、それこそ価値ある幸いな人生です。

子どもたちが勉強が大変だからと学校にやらないで、思いのまま遊ばせる親が

どこにいるのでしょうか？ 本当に子どもを愛するなら、たとえつらくて疲れても、より良い明日のために、学んで経験を積むように助けるでしょう。この地上に人間を置いて耕作される神様の心も、まさにこのような親の心と同じです。

それで、神様は善悪の知識の木を置いて、アダムが自由意志により善悪の知識の木の実を食べても放っておかれたのです。そして、人間耕作を受けて、この地上ですべての喜怒哀楽を経験するように、摂理のうちに計画されました。相対性を体験して、まことの愛と喜び、感謝が何かを悟ったとき、愛そのもの、真理そのものであられる神様を心から愛して、恐れ尊ぶことができるからです。

5) 神の子どもたちは天国で永遠にまことの幸せを味わう

この地上で人間耕作を受けてまことの幸せを悟った人が、永遠の天国に至るとき、その喜びと感激は口で言えないでしょう。この地上では、人は朽ちて死ぬしかないけれど、永遠の国、天国に行けば、死や別れもなく、苦しみも朽ちることもありません。また、この地上では黄金や宝石が貴重だと思いますが、天国では道が全部純金で、家もとても美しく尊い宝石で建てられています。

使徒パウロは神様の摂理のうちに第三の天を見たので、喜びと感謝をもって異邦人の使徒になり、苦しみの道を歩んだのです。この地上で福音を伝えて、むちで打たれて血を流すことも、牢に入れられることも、神様が報いてくださるので、すから、むしろ祝福の道でした。

このように、神様を信じる人々の希望はこの地上にあるのではなく、ただ天国にあります。この地上の人生はつかの間ですが、天国は永遠の国です。涙、悲しみ、苦しみ、病気、死がない幸せな国なので、この地上でも、報いを望みながらいつも喜んで生きていけるのです。

もし、エデンの園でまことの愛と幸せを知らないまま永遠に生きることと、相対性を知って人間耕作を受けた後、永遠の天国に入ってまことの幸せを味わうことのうち、一つを選べと言われれば、どちらを選ぶでしょうか？ まことに神様が善悪の知識の木の実を置かれた愛と摂理を悟ったとすれば、しばらくの間、涙、悲しみ、苦しみ、死を体験しても、この地上で人間耕作を受けて永遠の天国に入るほうを選ぶでしょう。

第2部

世界の始まる前から

隠された奥義

第1章

なぜイエス様だけが私たちの救い主であるのか

エデンの園で蛇に惑わされたアダムとエバは、結局神様のようになろうとする欲から、善悪の知識の木の実を取って食べてしまいました。それによって、罪を犯したアダムとエバだけでなく、すべての子孫も罪人になるという人類の悲劇が始まったのです。

1. 敵である悪魔に任されていたアダムの権力と栄光

<ルカの福音書 4:5-6>を見れば、悪魔が四十日断食なされたイエス様を試みる時、またたくまに世界の国々を全部見せて、「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」とっています。これは、誰かが持っていたいっさいの権力と栄光を敵である悪魔に任せたので、自分も思いどおり誰かに渡せるということの意味します。

それでは、世界の国々を治めるいっさいの権力と栄光が、どのようにして敵である悪魔に任されたのでしょうか？

<創世記 1:28>に「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」と書かれています。

このように最初の人アダムは、もともと神様から万物を支配して従わせる権威を受けて、万物の霊長として生きていたのです。ところが、サタンに操られた蛇に惑わされて、神様が禁じられた善悪の知識の木の実を取って食べ、不従順の罪を犯した後からは、状況が全く変わってしまいました。

<ローマ人への手紙 6:16>に「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に

至るのです。」とあるので、私たちが罪に服従すれば罪の奴隷となって死の道を行き、義に服従すれば義の奴隷となり、天国に行くのです。

したがって、不従順の罪を犯して、罪の奴隷となって死に至るようになった最初の人アダムは、神様から受けたいっさいの権力と栄光を敵である悪魔に奪われるしかありませんでした。奴隷のものが主人のものになるのは当然だからです。このように、アダムひとりの不従順のゆえに全人類が墮落するという途方もない結果を招きました。また、アダムの子孫はみな、あらゆる試練と患難をもたらす敵である悪魔の奴隷になって、死の道を歩むようになりました。

2. 土地の買戻しの法

福音を伝えれば、世の人々は「なぜイエス・キリストを信じなければ救われないのか?」「世の中には多くの偉人がいて、多くの宗教があるのに、なぜイエス・キリストだけが唯一の救い主で、なぜキリスト教にだけ救いがあるのか?」という質問をしばしばします。

イエス様は<ヨハネの福音書 14:6>で「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と言われました。また、<使徒の働き 4:12>にも「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」とあります。イエス様以外には世のどんな人も人類の救い主になれないし、イエス様を救い主として受け入れなくては、誰も救われないのです。

1) すべてのことは霊の世界の法則による

それなら、なぜイエス様だけが私たちの唯一の救い主なのでしょうか?

それは、霊の世界の法則によるからです。この世にも法があるように、霊の世界にも法則があります。人が死の道を歩むのも、罪が赦されて救われるのも、みなこの霊の世界の法則によるのです。アダムが罪を犯した後、人類が死に向かうようになったのも「罪から来る報酬は死」という霊の世界の法則によったからでした。罪を犯して敵である悪魔・サタンに奴隷になったのも、「人が誰かに奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷である」という霊の世界の法則に従ったからでした。同じように、人が死という刑罰から解放されて救われるのも、霊

の世界の法則に従わなければなりません。

2) 土地の買戻しの法とは？

死に至るようになったすべての人の罪を贖い、敵である悪魔に任されていた、いっさいの権力と栄光が取り戻せる霊の世界の法則が、まさに土地の買戻しに関する法です。神様はこの法則に従って、隠された奥義として世界の始まる前に人間の救いの道を備えておられました。

<レビ記 25:23-25>を見れば「地は買戻しの権利を放棄して、売ってはならない。地はわたしのものであるから。あなたがたはわたしのもとに居留している異国人である。あなたがたの所有するどの土地にも、その土地の買戻しの権利を認めなければならない。もし、あなたの兄弟が貧しくなり、その所有地を売ったなら、買戻しの権利のある親類が来て、兄弟の売ったものを買戻さなければならない。」と書かれています。

つまり、土地はみな神様のものであるから、買戻しの権利を放棄して売ってはならず、貧しくなって土地を売ったとしても、親類や本人が買戻せるようになることが土地の買戻しの法です。

神の選民であるイスラエルの民は、このような神の法を守り、他の国の土地法とは違って、土地を売買する時に永久に売ることができないように、土地売買契約書を作成します。どんな経路で売買するのかという契約過程と、後で返してもらえるように、土地の買戻しの内容を詳細に書いた契約書を2部作成した後、買う人と売る人の印鑑を押して証人を立てます。その後、契約書の1部は、規定どおり封印して聖殿の倉に保管し、もう1部は、封印しないで聖殿の入口に広げておきます。それで、いつでも親類が来て、代わりに土地を買戻せるようにしておきます。また、親類の中に買戻せる人がいなければ、本人が豊かになって買戻す力ができたとき、その土地を買戻せるようにしたのです。

一般に世では、土地の持ち主が一度売ったら、その後は買った人の心にかかっています。買った人がお金を受け取って返してくれれば幸いですが、お金をあげても売ろうとしなければ、どうすることもできません。お金をもっとたくさんあげるから売ってくれと言っても、売るつもりがなければどうすることもできないのです。ところが、イスラエルの法では、土地を買った人が売りたくなくても、売った人の親類が来て代金を支払えば、必ずその土地を返さなければならないの

です。

3) それなら、土地の買戻しの法と人類の救いとは、どんな関係があるのでしょうか？

土地の買戻しの法に罪人になった人類が救われる道が示されている、とはどんな意味でしょうか？ それは、神様の所有である土地を売り買いする法は、もともと土で造られた人にも直接関わる法だからです。

<創世記 3:19>には「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」と仰せられた神様のみことばがあります。そして、<創世記 3:23>には「そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。」とあります。また、<マタイ 13章>や<ルカ 8章>を見ると、イエス様は人の心を畑、すなわち、土にたとえて説明しておられます。

神様はみことばに聞き従わなかったアダムに「あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」と言われました。これにより、「土」の霊的な意味は、土で造られた「人」であること、人は土から取り出されたので、結局土へ帰ることを教えてくださいました。このように、土地のちりで造られた人が敵である悪魔の手に渡されて、再び神様に取り戻される霊の世界の法則は、売った土地を再び買い戻す法に、直接関わっているのです。

(ア) 土地の買戻しの法によれば、すべての土地は神様の所有であるから、人が永遠に売ることができません(レビ 25:23-25)。

(イ) これは霊的に、土で造られた人はみな神様に属しているために、永遠に売れないということを意味します。

(ウ) また、アダムが神様から受けた権威も、本来神様の所有であるから、人が永遠に売ることができないのです。土地を買い戻すにふさわしい資格を備えた人が現れれば、土地を返さなければならないように、敵である悪魔に任されていた権威を取り戻すにふさわしい資格を備えた人が現れれば、敵である悪魔はいっさいの権威を再び返さなければならないのです。

4) 土地の買戻しの法に完璧に基づいた救い主

公義の神様はこのような土地の買戻しの法に基づき、アダムが敵である悪魔に奪われたいっさいの権威を取り戻せる資格を持った、ひとりの人を備えておられました。これがまさに人間の救いの道です。

救いの道を開くために必要なのは、罪の報酬として売られたアダムのいのちを贖うにふさわしい資格を備えた人です。その人がすなわち、人類の救い主になるのです。まことの子どもを得ようと人間耕作を計画された神様は、すでにアダムを贖うことのできる救い主についても、計画を立てておられました。アダムが善悪の知識の木の実を取って食べることもご存じであって、救い主としてふさわしい人が必要なこともご存じだったので、その条件にかなう人を備えておかれたのです。その方がまさに、イエス・キリストです。

3. 救い主の条件にふさわしいイエス・キリスト

どんな契約でも互いに守るべき条件があるように、土地の買戻しの法に従って、敵である悪魔に任されていたアダムの権威を取り戻すためには、罪を贖うことのできる条件を備えなければなりません。

すべての人は不従順の罪を犯したアダムの子孫なので、自分の力では罪の問題を解決することができません。ただ罪を贖うことのできる資格を備えた人がいてこそ、すべての罪の問題を解決してくれるのです。それでは、土地の買戻しの法に従って、罪の問題を解決する条件とは具体的に何で、なぜイエス・キリストだけがふさわしい資格を備えたと言えるのでしょうか？

1) 一番目に、アダムの親類である「人」でなければならない

<レビ記 25:25>に「もし、あなたの兄弟が貧しくなり、その所有地を売ったなら、買い戻しの権利のある親類が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければならない。」とありました。土地の買戻しの法によれば、お金がなくて土地を売るようになっても、親類が代わりに買い戻してくれるのです。

したがって、敵である悪魔に任されていた権威を取り戻すための一番目の条件は、アダムの親類である「人」でなければならない、ということです。

<コリント人への手紙第一 15:21-22>にも「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダ

ムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」と書かれています。これについては、使徒ヨハネが記した<ヨハネの黙示録 5:1-5>にも書かれています。

「また、私は、御座にすわっておられる方の右の手に巻き物があるのを見た。それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印で封じられていた。また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、『巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。』と言っているのを見た。しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。巻き物を開くにも、見るにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激しく泣いていた。すると、長老のひとりが、私に言った。『泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。』」

ここで「七つの封印で封じられた巻き物」とは、アダムが神様に聞き従わず罪人になって、神様と悪魔との間に交わされた契約書の束のことです。ところが、この巻き物を開いて、その七つの封印を解くのにふさわしい人を探しても、天にも、地にも、また、地の下にもいなかったということです。

まさに土地の買戻しの法にふさわしい資格を備えた人でなければならないのに、天には天使がいるけれど、人ではなく、地の上を見ると、すべての人がアダムの子孫なので罪人にすぎず、地の下のよみには、地獄に行く罪人と悪魔に属するものしかいないからです。

このために使徒ヨハネが激しく泣いたので、長老のひとりが「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」と言います。「ダビデの根」とはユダヤ部族からダビデの子孫として来られたイエス様を意味します(使徒 13:22-23)。すなわち、イエス様が救い主の条件にふさわしい人だということです。

ある人は「神様が神だから、神の御子であるイエス様も神ではないか？ どうして神が人の親類になれるのだろうか？」と思うかもしれませんが。しかし、<ヨハネの福音書 1:1>に「ことばは神であった。」とあり、14 節には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。」と書かれています。

このように、ことばである神様が、私たちのような人となってこの地上に来られた方がイエス様です。イエス様は神の御子として神性と人性をともに持たれた方です。しかし、私たちのような肉と骨があるからだを持ってこの地上に生まれ、成長の過程を経られました。

イエス様の誕生を基点として世界史が紀元前(B.C.)と紀元後(A.D.)に分けられていることだけ見ても、イエス様がからだを持ってこの地上に来られたことは、歴史的に明らかな事実です。したがって、神の御子として人となってこの地上に来られたイエス様は、アダムの子孫、すなわち、「人でなければならぬ」という救い主の条件にふさわしい資格を備えられた方です。

2) 二番目に、アダムの子孫であってはならない

兄弟の借金を返そうとするなら、まず自分に借金があってはならないように、ほかの人の罪を贖おうとするなら、本人に罪があってはなりません。ところが、アダムの不従順により、アダムの子孫はみな罪人になったので、いくら飛び抜けた人格を備えた聖人であっても、ほかの人の罪を代わりに負ってあげられないのです。

それなら、イエス様は救い主の条件の二番目の条件にふさわしい資格を備えた方でしょうか？ <マタイの福音書 1:18-21>には、イエス様の誕生の過程について記されていますが、決して男女が結ばれて宿ったのではなく、聖霊によって宿られた方だということを強調しています。

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れないうちであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。』」

このように、イエス様は肉的にはダビデの子孫ですが、マリヤがヨセフとまだいっしょにならないうちに、聖霊によって宿られた方ですから、どんな罪の性質

もありえません。しかし、不従順の罪を犯したアダムの子孫は男女が結ばれて宿りますから、気質を通じて罪の性質を受け継いで生まれます。これを「原罪」と言いました。このような原罪がある限り、決してすべての人類の罪を贖うことはできません。それで、イエス様は人となってこの地上に来られた時に、おとめマリヤのからだを借りて、聖霊によって宿られたのです。

3) 三番目に、敵である悪魔に勝てる力がなければならない

<レビ記 25:26-27>を見れば、「その者に買い戻しの権利のある親類がないときは、その者の暮らし向きが良くなり、それを買い戻す余裕ができたなら、売ってからの年数を計算し、なお残る分を買い主に返し、自分の所有地に帰る。」と書かれています。これは売った土地を買い戻すなら、それほどの力がなければならないという意味です。

ほかの人の借金を返してあげたいといくら切実に思っても、自分にそれほどの財力がなければ、何の役にも立ちません。このように、罪を贖うためには、罪を犯した人を取り戻す力がなければなりません。霊の世界では、罪がないことが力です。

したがって、敵である悪魔に奪われたアダムの権威を取り戻すためには、罪があってはならないのです。罪がなくてこそ、敵である悪魔を支配する権威が与えられるからです。

それなら、はたしてイエス様には少しも罪がなかったでしょうか？ イエス様は聖霊によって宿られたので、人の気質を通じて受け継いだ原罪がありませんでした。また、幼い時から律法を完全に守られたし、愛で律法を全うされた完全な方です。生後八日目に割礼を受けて(ルカ 2:21)、公生涯に入る前の 30 歳になるまで両親を敬い、33 歳で十字架につけられて死なれるまで、何の罪も犯さず、ただ神様のみこころに従われました。

<ペテロの手紙第一 2:22-24>「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがた

は、いやされたのです。」

<ヘブル人への手紙 7:26>「また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。」

このようにイエス様は全く罪がなかったので、敵である悪魔に勝てたし、人類を救い出す力を持っておられました。イエス様が現された数多くの御力のわざが、このような事実を証しています。イエス様は悪霊を追い出し、目が見えない、耳が聞こえない、歩けないなど、人の力ではどうすることもできないわずらいでも、みことばで完全にされました。はなはだしきは風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われると、風はやみ、大なぎになるみわざが現れたのです(マルコ 4:39)。

4) 四番目に、命までも与えられる愛がなければならない

たとえ土地を買い戻せる力がある親類がいるとしても、その人に愛がなければ、土地を取り戻すことができません。このように、罪の問題を完全に解決するためには、自分を完全に犠牲にできる愛がなければなりません。

<ルツ記 4:1-6>を見れば、ボアズが貧しかったナオミのことを知って、最も近い親類に土地の買戻しを勧める場面が出て来ます。しかし、土地を買い戻す者が「私自身の相続地をそこなうことになるといけませんから。あなたが私に代わって買い戻してください。私は買い戻すことができませんから。」と答えます。このように、最も近い親類が土地を買い戻せる力があるとしても、愛がなければ買い戻せないのです。結局、ナオミの次の親類ボアズが土地を買い戻せる力があって、愛があったので、彼の代わりをしました。

このように、ボアズは土地を買い戻せる愛があったので、合法的に土地を買い戻す者となりました。そして、ルツと結婚して、彼女との間に生まれた息子がダビデの先祖になるという、途方もない祝福を受けました。ボアズはダビデ王の曾祖父として、イエス様の系図に載せられるようになったのです。

イエス様は人となってこの地上に来られ、聖霊によって宿られたので、アダムの子孫ではないし、罪が全くないので、罪を贖う霊的な力を持っておられました。このような三つの条件を完全に備えたとしても、仮に霊的な愛がなかったとすれ

ば、人類の罪を贖うことができなかつたでしょう。なぜなら、人類の罪を贖うということは、罪人になった人類が受けなければならない死の刑罰を代わりに受けることを意味するからです。

全く罪がない身でありながら、この世で最も凶悪な罪人のように木の十字架にかけられ、あらゆるあざけりとさげすみを受け、水と血をすべて注ぎ出して代わりに死ななければならないという、途方もない犠牲が伴うのです。

何の罪もない王の息子が、無知で悪い民の代わりに死んだということは、歴史上、類がありません。まして、この地上の王とは比べることもできない、全知全能で天下万物を治められる神のひとり子イエス様が、罪人になった人類の代わりに木の十字架にかけられ、血を注ぎ出して死んでくださったのですから、その愛をどうして言葉ですべて表現できるでしょうか。

しかもイエス様は、この地上におられる間、ただ善だけ行なわれた方です。罪人を赦してくださっただけでなく、さまざまな病気にかかった者をいやして下さり、悪のきずなを解いて、平和と喜びと愛を下さり、天国の望みと救いを与えてくださいました。

したがって、<ローマ人への手紙 5:7-8>に「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあるのです。神様は義人でもなく、善人でもない罪人たちのために、ひとり子イエス様を十字架に渡してくださることにより、私たちを愛するという証拠を確かに現されたのです。

第2章

なぜイエス様を信じると救われるのか

1. イエス様による救いの摂理

世界の始まる前から隠された神の奥義

1) 世界の始まる前から備えられた人間の救いの道

神様は世界の始まる前から人間の救いの道を備えて、すでに旧約聖書の最初の書、創世記に、イエス・キリストの現れと十字架による救いの奥義について預言されました。

<創世記 3:14-15>に「神である主は蛇に仰せられた。『おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつ়。』」とあるのです。

ここで「蛇」とは、靈的に敵である悪魔・サタンを意味します。「蛇がちりを食べる」とは、敵である悪魔・サタンがちりで造られた人を支配するという意味です。そして「女」とは、靈的にイスラエルを意味して、「女の子孫」とは、メシヤ、すなわち、イエス・キリストを意味しているのです。

また、「蛇が女の子孫のかかとかみつ়」とは、イエス様が十字架につけられて死なれることを意味します。「女の子孫が蛇の頭を踏み砕く」とは、十字架につけられたイエス・キリストによって、敵である悪魔・サタンの陣が打ち砕かれることを預言しているのです。

一般に蛇は、尾が踏まれたり体が切られたりしても力を失いませんが、頭を捕まえられれば少しも動けません。したがって、蛇と女との間に敵意があり、女の子孫がその頭を踏み砕くというみことばは、靈的に、敵である悪魔・サタンがイエス・キリストによってその権力を失うという意味です。

一方、「蛇が女の子孫のかかとかみつく」とは、靈的に、敵である悪魔・サタンがイエス様を十字架につけて処刑させることを意味します。これはそのまま成就されました。

2) イエス様が人となってこの地上に来られた理由

靈の世界の法則により、アダムとエバは罪を犯したので、悪魔・サタンの子どもになりました。もう一度神の子どもになるためには、罪があってはなりません。したがって、人類には彼らの罪を赦してくれる人が必要でした。しかし、この世では誰も人類の罪を赦してくれる人がいなかったのです。それで、イエス様が私たちを贖ってくださるために、天の御座を捨てて、人となってこの地上に来られました。

3) 悪魔・サタンはついにイエス様を十字架刑にする

イエス様はこの地上におられた間、ただ良いことだけを行なわれた方です。罪人を赦して下さっただけでなく、さまざまな病気にかかった者をいやし、悪のきずなを解き、平和と喜びと愛を与え、天国の望みを下さいました。

しかし、敵である悪魔・サタンは何の罪もないイエス様を、あらゆる手段と方法を使って、結局十字架につけて殺してしまいました。なぜそうしたのでしょ

か？
アダムとエバが善悪の知識の木の実を取って食べる不従順の罪を犯したので、天地万物を治める権力は敵である悪魔に任されていました。しかし、将来女の子孫が現れて、敵である悪魔に任されていた権力を取り戻すことを、神様は知らせてくださいました(創世記 3:15)。敵である悪魔はこのようなことを知っていたので、女の子孫が現れて、自分を踏み砕く前に殺そうと決意しました。それでこそ、不従順になったアダムから任されていた権力が永遠に持てると思ったのです。

しかし、敵である悪魔は女の子孫とは誰なのかわからなかったので、旧約時代から神様に愛される預言者が現れるたびに、さまざまな方法で殺そうとしました。モーセが生まれた時も、エジプトの王パロをそそのかして、当時イスラエルの女性が産んだ男の子はすべて殺すように働いたし(出エジプト 1:15-22)、イエス様が人となってこの地上に来られた時には、ヘロデ王を操りました(マタイ 1:13-18)。

敵である悪魔・サタンはまた、祭司長と律法学者とパリサイ人たちをそそのかして、イエス様を殺すためにあらゆる策略を巡らせました。ついに全く罪がないイエス様をむごたらしく十字架刑で殺した後に、敵である悪魔はこれ以上自分を

妨げる者がいないので、とこしえに世の王になれると思って、勝ち誇りました。

4) イエス・キリスト、神の知恵

<コリント人への手紙第一 1:18>に「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」とあるように、全能の神の御子が被造物にさげすまれて殺されることは、非常に愚かに見えます。しかし、このような愚かに見える神様の計画が、実はどの人の計画よりも賢いのです。それで、<コリント人への手紙第一 1:25>に「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」とあるのです。

5) 世界の始まる前から隠されたイエス・キリストによる救いの道

神様に不従順になり、死の道を歩んでいたすべての人類を救いの道に導くために、神様が備えられた方法がまさに、イエス様を十字架につけて死ぬようにすることでした。

それで、<コリント人への手紙第一 2:7-8>に「私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」と書いてあるのです。

敵である悪魔は、このように隠されていた神様の知恵が悟れなかったので、イエス様を殺したことで自分が勝ったと思いました。ところが、これは「罪から来る報酬は死」(ローマ 6:23)という霊の世界の法則、すなわち、神様のみことばに完全に背くことでした。なぜなら、イエス様は聖霊によって宿り、アダムの血を引かなかったので原罪がなく、律法どおり行なわれたので自ら犯した罪もないので、死に至ることがありえない方だったからです。ところが、敵である悪魔はこのような霊の世界の法則に逆らい、ローマ総督ピラトを使って、傷もしみもないイエス様を十字架につけたのです。

<ルカの福音書 4章>には、悪魔が四十日断食なされたイエス様を三度試みる過程が記されています。その中の一つは、国々を治める権力についての試みでした。また、悪魔はイエス様を連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任

されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」と言いました(ルカ 4:6)。すでに悪魔は、神様のみことばに聞き従わないで罪の奴隷になったアダムから、すべての権力が任されていたのです。

ところが、今度は敵である悪魔が神様との約束である霊の世界の法則、すなわち、罪によって死に至るといふ霊の世界の法則を破ったので、再びその権力を神様に返すしかなかったのです。結局、敵である悪魔はイエス・キリストを信じる人々を治める権力を失ってしまったのです。

そうして、驚くべき神の知恵と十字架につけられて死なれたイエス様の愛により、イエス・キリストを信じる人ならば誰でも、悪魔のふところから神様のふところに移ることができるようになりました。これがすなわち、世界が始まる前から備えられたイエス・キリストによる救いの道、すなわち「十字架のことば」なのです。

<ローマ人への手紙 5:17-19>「もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。」

神のひとり子イエス様は人となってこの地上に来られましたが、聖霊によっておとめマリヤの胎に宿られ、ご自身を犠牲にして十字架を負うことができる愛を現してくださいました。したがって、誰でもイエス・キリストの御名によって救いに至るのであり、ただその御名によってだけ救われるのです。それで、<使徒の働き 4:12>に「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」と書かれています。

2. なぜイエス様は木の十字架にかけられて、血を注ぎ出さなければならなかったのか

1) 律法の呪いから私たちを贖うため

死刑の方法にはさまざまなものがあるのに、なぜイエス様はあえて木の十字架にかけられて、血を注ぎ出さなければならなかったのでしょうか？

<ガラテヤ人への手紙 3:13>に「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、『木にかけられる者はすべてののろわれたものである。』と書いてあるからです。」とあります。これは、イエス様が木の十字架にかけられて死なれたことによって、すべての人類を律法の呪いから贖い出されたということです。

最初の人アダムの不従順により、すべての人は罪人になり、呪われて死の道を行くほかありませんでした。<ローマ人への手紙 6:23>に記されたとおり、「罪から来る報酬は死」という律法に呪われていたのです。

このような律法の呪いから贖い出すためには、霊の世界の法則に従って、呪われた者となって木にかけられなければならなかったので(申命記 21:23)、神様はすべての人の身代わりとして、神の御子イエス様を木の十字架に渡されるほかありませんでした。

<申命記 21:23>「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならぬ。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる地を汚してはならない。」

したがって、イエス様はすべての人を律法の呪いから救おうと、代りに呪われて、木の十字架にかけられて血を注ぎ出されたのです。これによってすべての人は律法の呪いから贖い出されて、神の子どもとされる特権を得る道が開かれたのです(ローマ 5:17-19)。

2) 血を注ぎ出すことがなくては罪の赦しがない

<レビ記 17:11-14>に「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。……すべての肉のいのちは、その血が、そのいのちそのものである。」と書かれています。

すべての生き物は血があってこそいのちが維持できるし、血がなければ死ぬので、いのちそのものであると書かれています。しかし、肉のいのちは、結局は朽ちてひと握りの土へ帰るのであり、霊のいのちが得られない罪人は、永遠の死である地獄に行くようになります。

したがって、永遠に生きられる霊のいのちを得るためには、罪が赦されなければなりません。そのためには<ヘブル人への手紙 9:22>に「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」とあるとおり、必ずいのちそのものである血を注ぎ出さなければならないのです。そのために旧約時代には、罪を犯すたびに動物の血でいけにえをささげなければなりませんでした。

しかし、イエス様がただ一度、原罪と自ら犯した罪がないきよい血、すなわち霊に属する血を注ぎ出して、すべての人々が完全に罪が赦されて、永遠のいのちを得る道を開いてくださったのです。ですから、もうそれ以上、動物をほふっていけにえとしてささげる必要がないし、ただイエス・キリストを信じることで罪が赦されて、救われるのです。

3. なぜイエス様を信じると救われるのか

1) 信仰で心の戸を開き、主イエス様を受け入れて罪が赦される

<ヨハネの黙示録 3:20>に「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」とあります。

霊的に「戸」とは、思いのことを言います。主が私たちの思いの外で、たびたび「思いの戸を開けなさい」とたたかれるのです。誰でも主の御声を聞いて戸を開けさえすれば、主はその人とともにおられると約束されました。

心の戸を開くためには、まず「思いの戸」を開かなければなりません。神様のみことばを聞くと、自分の思いと知識にこだわらず、それを認めて受け入れなければなりません。

「目に見えない神様をどうやって信じるのか?」「おとめがみごもったとか、死んだ人が生き返ったとは、理解できない。」このように疑って否むのではなく、自分の知識と思いを超える神の力を認めなければなりません。

天下万物を見ても、神様を信じることができる証拠がいくらでもあります。また、本教会に現れる数え切れない神様の力を見ても、人の力ではできないことが神様にはいくらでもできることがわかります。人がいくら賢くて能力があるとしても、神様の知恵と力に比べれば、あまりにもつまらない存在なのです。

2) 聖霊を賜物として受けて、死んだ霊がよみがえる

ですから、へりくだった心で自分の思いを打ち砕いて、「神様は全知全能の創造主で、神様のみことばはまことだ」と認めなければなりません。このように認めて心の戸を開ければ、神様が私たちの心に聖霊を与えてくださり、死んだ霊が生き返ります。<使徒の働き 2:38>で「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」と約束されました。

3) 神の子どもとして天の国籍を得るようになる

<ヨハネの福音書 1:12>には「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」と書かれています。心の戸を開いて、悔い改めて、聖霊を受ければ、聖霊の働きでまことの信仰を持つようになります。みことばどおり生きる力も受けて、聖霊が働きかけるので、今後の事に対する知恵も得るのです。これがすなわち、水と御霊によって新しく生まれるということであり、このように新しく生まれた人は、神の子どもになります。神様が「私の息子よ、娘よ」と呼んでくださって、私たちは神様を「父」と呼べるのです。また、神の子どもは天国のいのちの書に名が記されて、天国の国籍を持つようになります。

4) 天国の民ならば、天国の法を守るべき

この地上でも、どの国でも守るべき法があるように、天国の国籍を持った天国の民ならば、天国の法を守らなければなりません。つまり、創造主であり、私たちの父であられる神様のみことばを守り、行なうべきなのです。ところが、「主を信じます」と言って、聖霊を受けたとしても、みことばどおり生きないで相変わらず罪を犯せば、敵である悪魔・サタンがその人を訴えて、試練や患難をもたらします。試練や患難にあいながらも、罪を犯し続けながら生きていると、結局、いのちの書からその名が消されて、天国にも行けなくなります。私たちが天国の法に従って生きる時だけ、敵である悪魔・サタンに訴えられず、天国に至る時まで、神様に守られて祝福されるのです。

4. 「イエス」と「イエス・キリスト」

ところで、ここでもう一つ覚えなければならぬ、重要なことがあります。それは、「イエス」という名と、「イエス・キリスト」あるいは「主イエス」という名には、大きい差があるということです。

1) イエス - ご自分の民をその罪から救ってくださる方

<マタイの福音書 1:21>に「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」とあります。このみことばどおり「イエス」という名前の意味は「ご自分の民をその罪から救ってくださる方」、すなわち、「これから救ってくださる」という意味です。つまり、これから十字架を負って、血を注ぎ出し、私たちを救ってくださる方だと、今言われているのです。

2) キリスト - 油そそがれた者、救い主の資格を得た人

一方、「キリスト」とは「油そそがれた者」という意味で、「救い主の資格を得た人」を言います。ギリシャ語では「キリスト」、ヘブライ語では「メシヤ」と言います。日本語では「救い主」、あるいは短く「主」と表現します。したがって、「主イエス」あるいは「イエス・キリスト」と言うと、これは「救い主としてご自分の民をその罪からすでに救ってくださった方」という意味が含まれているのです。

では、イエス様はいつ救い主になられたのでしょうか？

十字架につけられて死なれた後、死の力を打ち砕いてよみがえられた時です。したがって、「イエス」という呼び方は、十字架を負う以前のことで、よみがえられた後は「イエス・キリスト」と言わなければなりません。それで、主がよみがえられた後は、弟子と使徒たちが祈ったり、みことばを語ったりするとき、ただ「イエス様」と言わずに、必ず「主」や「キリスト」を付け加えました。

たとえば、<使徒の働き 3:6>で、ペテロとヨハネが宮の門で生まれつき足のきかない男をいやす時も、「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。「イエスの名によって歩きなさい」と言ったのではなく、明らかに「イエス・キリストの名によって」と命じました。<エペソ人への手紙 5:20>にも「いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父な

る神に感謝しなさい。」とあります。この時も「イエス様の名によって」ではなく、「主イエス・キリストの名によって」感謝しなさい、と書かれています。

3) 「イエス・キリスト」あるいは「主イエス・キリスト」の御名による祈り

これには霊的にかなり重要な意味が含まれています。私たちが正確に救いの摂理を悟って、「イエス・キリストの御名によって祈ります」と言う時と、漠然と「イエス様の御名によって祈ります」と言うのとでは、その祈りの力が全く違います。自分にはできないことも、救い主になられたイエス・キリストにあってはできることを信じて、その信仰を告白して祈るので、さらに大胆で力ある祈りになります。私たちが祈って悪い霊を退ける時も、イエス・キリストがすでに敵である悪魔・サタンの死の力を打ち砕かれたことを知って、勝利された主の御名で命じることになるので、敵である悪魔・サタンが恐ろしくて震えて退くようになります。これらのことを必ず覚えて、「イエス様の御名によって」でなく、「イエス・キリストの御名によって」、または「主イエス・キリストの御名によって」祈らなければなりません。

5. 信仰は敵である悪魔・サタンの策略に打ち勝つ

1) 救いの摂理が完成された後の敵である悪魔・サタンの策略

救いの摂理は、誰も知らない奥義として、神の恵みと主の愛によって完成されました。ところが、敵である悪魔・サタンは、この奥義を悟らずにイエス様を殺した後に、むしろ自分の死の力を失ったことを知ったとき、どれほど悔しかったのでしょうか？

だからといって、敵である悪魔・サタンがおとなしくあきらめて、人々が救われるように放っておきません。今度は作戦を変えて、人々が救い主を受け入れないように疑いを与えて、正しい信仰生活をしないように惑わしています。それで、自分のように滅びに引きずって行こうとしているのです。

2) 信じない人々への戦略

信じない人々には、思いに働きかけて、「創造は科学的でなくて信じられない」「死んだ人がどうやってよみがえるのか？」とか、「十字架につけられて死なれたイエス様を信じるからといって、どのように救われるのだろうか？」と疑いを吹き込むのです。

しかし、<コリント人への手紙第一 1:21>に「事実、この世が自分の知恵によっ

て神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」と書かれています。いくら敵である悪魔・サタンが妨げて惑わしても、神様は善良な人々に福音を聞くようにされます。それで、今日まで数多くの人々が主を受け入れて、信仰によって救われました。

3) 主を受け入れた聖徒たちへの戦略

敵である悪魔・サタンは、すでに主を受け入れた聖徒たちも惑わします。「『主よ。主よ。』と言いさえすれば、世の人々と同じように罪を犯しても救われる」と、罪を犯したい誘惑を吹き込みます。ただ信仰によってだけ、敵である悪魔・サタンの戦略に勝てることを心に刻まなければなりません。

第3章

十字架に含まれた摂理

イエス様は、罪人たちの罪を贖うために死なれて、三日目に死の力を打ち砕いてよみがえり、私たちに救いの門を開いてくださいました。私たちが闇から光へ移し、悪魔の奴隷から神の子どもへ、地獄から天国へ導いてくださいました。

このように救いを全うするまで、イエス様の生涯のすべては徹底した霊の世界の法則によって、神の摂理に従って完成されました。すなわち、罪人たちのために殺されましたが、「木にかけられなければならなかったこと」は、罪人たちが受ける呪いを贖うための摂理であり、「血を注ぎ出して死なれたこと」は、血を注ぎ出すことによってだけ罪の赦しがあるからだと先に述べました。

これだけでなく、イエス様がこの地上に来られてから、十字架の苦しみを受けるまでのすべての過程の中に、細やかな神の摂理が含まれています。イエス様は家畜小屋でお生まれになり、飼葉おけに寝かされて、一生を貧しく生きられました。そして、死なれる時は、全身にむち打たれて、頭にはいばらの冠をかぶって、手と足は十字架に釘づけられました。裸のまま十字架につけられました。

イエス様が着ていた着物は、ローマの兵士たちが四つに分け合い、下着はひとりがかじを引き、取りました。また、イエス様はローマの兵士に槍でわき腹を突き刺され、血と水を注ぎ出されました。

このような一つ一つの過程にも、それぞれ神の摂理が含まれています。これが神の恵みと恩寵であり、私たちに祝福してくださるための摂理です。私たちがこのような摂理を悟り、その中に含まれた祝福を信仰をもって求めていくとき、その祝福を味わって生きられます。

1. 飼葉おけに寝かされた摂理

<ルカの福音書 2 章>にはイエス様の誕生についての記事があります。聖霊の力によってイエス様をみごもったおとめマリヤは、夫のヨセフとともにベツレヘムに行きました。当時、ベツレヘムの宿屋には彼らのいる場所がなかったので、マリヤは、ある宿屋の家畜小屋で出産しました。布にくるまれたイエス様を寝かせる所がないから、家畜の餌を入れる飼葉おけに寝かせました。

ふつう、赤ちゃんは暖かい部屋で生まれて、居心地の良いベッドに寝かせられます。ベッドがなかった昔でも、床に毛布を厚く敷いて、そこに赤ちゃんを寝かせて布団をかけました。ところが、万軍の主、神のひとり子イエス様は、なぜこのように家畜小屋で生まれて、飼葉おけに寝かされたのでしょうか？ これも、神様が私たちに祝福を与えられるための摂理でした。

1) 獣にすぎない人の子ら

<伝道者の書 3:18>に「私は心の中で人の子らについて言った。『神は彼らを試み、彼らが獣にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。』」とあります。神様が人を試みると、獣にすぎなかったということです。こういうみことばを聞くと、ある人は「なぜ人が獣にすぎないのだろうか？」と不思議に思うかもしれませんが、しかし、実際、人の悪さを考えてみれば、獣にも及ばないことも多くあります。

ライオンやヒョウのような猛獣も、空腹だったり、自分が危ないと感じたりする時でなければ、余計な殺傷はしません。また、動物の中にも、一度つがいになれば一生相手を裏切らない動物がいて、子のために大変な犠牲を払ったりします。家で飼う犬は自分の主人に忠誠を尽くして、時には主人のために命をささげたりします。犬が裏切ったという話はあまり聞いたことがありません。

しかし、私たち万物の霊長と言われる人は、主人をどんなによく裏切るのでしょうか？ 自分の欲望をさらに満たすために戦争を起こして、女、子ども、病人などの区別なく、数多くの人々を殺します。家族や隣人との間にも、まことの愛が見つけにくいのです。

離婚率は日経につれて増加し、物質の欲のために親子の間、兄弟の間でも互いに争って、告訴して、はなはだしくは殺したりもします。自分の益にならなければ、親や恩師、長年の友だちも裏切って、恩をあだで返す場合も数多くあります。人が人を金で売り買いして、はなはだしきは自分の子どもまで売り渡したりします。子どもたちも暴力組織を作り、とても口ににくいことを行ったりします。このほかにも、毎日伝えられるニュースを見ると、想像しがたいような惨たらしい事件が絶えず報道されています。

このような姿を見ると、人が獣よりましだとは言えないのです。本来、神様は善で聖なる神様のかたちに人を造られました。ところが、アダムの罪を犯して以

来、罪人になった人々は、神様の善なるかたちを失ってしまいました。霊が死んで、魂と肉だけで生きていくので、魂と肉だけで造られた獣のような存在になってしまいました。

そして、心が罪と悪で染まっていくほど、ますます世の欲に従って、自分の欲に従って、あらゆる罪を犯して生きていくようになりました。このように罪と悪に染まり、獣のようになってしまった人々が、どうして聖なる天の御国に入れるのでしょうか？ 人の元の姿を取り戻してこそ神の子どもになり、天国に行けるのです。イエス様がこの地上に来られて、飼葉おけに寝かされたことは、このように獣にすぎない人類を贖って、救い出されるためでした。

2) いのちの糧であるイエス様

<ヨハネの福音書 6:51>に「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」とあります。人が天から下って来た生けるパンを食べる、ということは、神様のみことばを心に糧とすることを意味します。人のからだは糧を食べてこそ生きていけるように、人の霊も霊の糧を食べてこそ生きていけます。霊の糧をどれだけよく消化して、霊に耕したかによって、それだけ霊に、また、全き霊に入るのであり、魂に幸いを得ているということです。魂に幸いを得ているほど、すべての点で幸いを得、健康である祝福が臨むのです。

イエス様は、神のことばが人となってこの地上に来られた方です。みことばであるイエス様がこの地上に来られて、獣のような人類にとっていのちの糧になってくださいました。イエス様によって人は自分の元の姿を取り戻し、失った神のかたちを取り戻すようになりました。これを教えてくださるために、神様はイエス様を、家畜の餌の器である飼葉おけに寝かせるようになされたのです。

3) 人のすべて

それでは、これから私たちはどうすれば獣のような人生から抜け出して、まことのいのちが得られるのでしょうか？ 私たちが人のすべきことをすべて行なって、人間らしく生きられる道とは何でしょうか？

<伝道者の書 12:13>に「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。

神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」とあります。人間にとってすべてとは、神を恐れて、神の命令を守ることだ、ということです。<箴言 8:13 前半節>には「主を恐れることは悪を憎むことである。」ともあります。

そして、神の命令を守ることは、神のことばである聖書に記された命令を守ることです。「いつも喜んでいなさい。」「絶えず祈りなさい。」「すべての事について、感謝しなさい。」その他、そねんではいけない、憎んではいけない、酒に酔ってはならない、安息日を守りなさい、誓願したことは守りなさい、悪はどんな悪でも避けなさい、愚かな議論を避けなさいなど、聖書にはこういう命令が数多くあります。聖書で「しなさい」と言われたことはして、「してはならない」と言われたことはせず、「守りなさい」と言われたことは守って、「避けなさい」と言われれば避けるべきです。このように聖書の戒めに従うことが、すなわち神の命令を守ることです。

ところが、口では「神様を信じます」「神様を恐れ敬います」と言うけれど、実際に神の命令は守らない人々がたくさんいます。口では神のことばを教えますが、いざ自分と言うと、みことばどおり行なわない人も多いのです。また、聖書のみことばどおり行ないなさい、と言うと、「そんな数え切れないほどの命令をどうしてすべて守れるんですか？ それでは信仰生活が本当に大変です」と言ったりします。しかし、神様は私たちに苦勞させるために、これらのみことばを命じられるわけではありません。

世の親たちも子どもに多くのことを要求します。「一生懸命勉強しなさい」「好き嫌いせずに食べなさい」「行儀良くしなさい」「きれいに洗いなさい」などと言うのは、親が子どもに苦勞をさせるためでしょうか？ 違います。子どもにとって益になると思うので要求するのです。子どもを愛するからといって、「勉強は難しいから、遊んでいてもいいよ」「掃除は面倒くさいから、そのままにしておいてもいいよ」と教えることはできません。「毎日お風呂に入る必要はない。二、三日に一回でもかまわない。手と足は一日に何回も洗わないで、一回だけ洗いなさい」とは教えないではありませんか？ 本当に子どもを愛するなら、人のすべきことを教え、最善を尽くして人間らしく生きることを教えなければなりません。

「しなさい」と言われることをするとき、祝福されて答えられ、天国に行けるので「しなさい」と言われるのです。つまり、神様は子どもたちが地獄へ行かないために「してはならない」「避けなさい」と言われるのです。そして、天国へ行

くために「守りなさい」「しなさい」と言われるのです。そして、光の中を歩いて、失った神様、つまり、御父のかたちを取り戻しなさい、と言われるのです。

私たちがそのように聞き従うとき、結局私たちに健康の祝福、物質の祝福、すべての祝福を下さるのです。肉の子どもたちも、親を愛して信頼するなら、親の言うことを聞きます。同じように、私たちのためにあまりにも大きい愛を施してくださいました神様を愛するなら、そして、十字架につけられて死なれた主を愛するなら、神様のみことばに聞き従うことが難しくありません。

尊い神の御子がみすばらしい家畜小屋でお生まれになり、飼葉おけに寝かされた摂理を明らかに悟って、心から神様を恐れ敬い、神様のかたちを完全に取り戻さなければなりません。

2. 家畜小屋で生まれて、貧しく生きられた理由

イエス様は王の王、主の主であり、創造主なる神の御姿であられる方です。<ヨハネの福音書 1:3>に「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」とあり、<ヨハネの福音書 3:35>に「父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。」とあります。このように万物の主人であられるイエス様が、天のすべての栄光を後にして、荒れ果てた地上に来て、みすばらしい家畜小屋でお生まれになりました。

生まれた時だけそうなのでなく、一生、イエス様は貧しく生きられました。私たちはそれでも貸間もあって、自分の家もあるけれど、私たちの主には家がありませんでした。<マタイの福音書 8:20>で「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」と言われたように、イエス様は福音を宣べ伝えて病人をいやすために、住む所もなく、あちこちを駆け回られました。時には飢え渴きながら、時には休むこともできずに、みことばを宣べ伝えられました。

イエス様は豊かに生きる力がないから、貧しく生きられたのではありません。イエス様は水でぶどう酒を作られたこともあり、五つのパンと二匹の魚で五千人以上を食べさせても、パン切れの余りが十二のかごにいっぱいになる奇蹟も行なわれました。また、ペテロがイエス様に命じられたとおり、魚を釣って、口をあけると、魚の口からお金が出て来たこともあります。もし、イエス様がご自分の

ために力を使われたなら、いくらでも豊かな人生が味わえたはずです。

イエス様があえてこの地上で貧しく生きられた理由は何でしょうか？

<コリント人への手紙第二 8:9>に「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」とあります。富んでおられたイエス様が、私たちの代わりに貧しくなられて、私たちには富む者となる祝福を下された、という意味です。人には初めから貧しさゆえの苦しみがあったのではありません。エデンの園で暮らしていた時は、あらゆるものが豊かであり、地が豊かな実を産み出したので、その実をただ取って食べればよかったです。

ところが、アダムが罪を犯してからは、人とともに万物も呪われて、土地はいばらとあざみを生えさせたので、顔に汗を流して、ようやく糧を得るようになりました。このように人類が貧しくなった原因は、アダムが罪を犯したので呪われたからです。もちろん、貧しさそのものは罪ではありませんが、結局、これはアダムが罪を犯したことによる呪いの一つです。

したがって、イエス様はご自身が貧しく生きられたので、人の貧しさを贖ってくださり、私たちが豊かになるようにして下さったのです。貧しさは罪ではないので、私たちの主が血を注ぎ出される理由はありませんでした。それで、私たちの主が貧しく生まれて、ご自身で一生涯を貧しく生きられて、私たちの貧しさを贖って下さったのです。

しかし、罪によることならば、血を注ぎ出さなければなりません。罪から来る報酬は死です。まさに血によってだけ罪が赦されるので、原罪も、自ら犯した罪もない、私たちの主の尊い血が注ぎ出されなければなかつたのです。それで、私たちが思いで犯した罪に対しては、主が頭にいばらの冠をかぶられて、私たちが手と足で犯した罪に対しては、主が手と足に釘を打たれ、また、私たちが全身で犯した罪に対しては、主が裸になってむち打たれ、全身に血を流して、横腹を槍で突かれて、水と血をすべて注ぎ出されたのです。

物質の祝福を受ける方法

ある人々は、神様に物質の祝福を求めるのは間違っている、と言います。しかし、聖書には、神様が私たちを富む者にされるという数多くの祝福のみことばがあります。また、信仰の父アブラハムをはじめとして、イサク、ヤコブ、ヨセフ、ダニエルなど、神様を恐れ敬い、そのみことばに従った人々は、豊かで富んだ人

生を送ったことがわかります。私たちも、貧しさを贖ってくださった主の恵みのうちに、富む者になる祝福を受けなければなりません。

イエス様を正しく信じて、富む者になってこそ、神様に栄光が帰せるのです。自分が貧しく生きていながら「イエス様を信じれば祝福されます」と伝道したら、相手の人は何と言うのでしょうか。「自分が祝福されれば？」と言うでしょう。伝道する者がからだの具合が悪いのに、「主を受け入れれば、いやされます」と言えば、「自分がいやされれば？」と言うでしょう。むしろ栄光をさえぎるようになるのです。

もちろん物質の欲をもって祝福を願うのではなく、神様の栄光のために願われなければなりません。<ヤコブの手紙 4:2 後半節-3>に「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」とあります。信仰のある人ならば、財政で祝福されてどこに使うでしょうか？ 欲に従って贅沢するのではなく、みなしごややもめに施して、宣教して、聖殿を建築するなど、魂の救いのために使うはずでしょう。ですから、このように願って祝福されることによって、神様に栄光をささげて、祝福された物質を神の国のためにささげて、天国に尊い報いを積み上げていくのです。

<マタイの福音書 7:7-11>に「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さないことがありましょう。」とあります。親なら当然、愛する子どもが願うものを与えようとするでしょう。愛の豊かな父なる神様も、子どもたちが信仰で求めるものはみな与えたいと願われます。

ところが、無条件に「お父さん、祝福してください」と祈るからといって、祝福されるわけではありません。それには条件があります。<ヨハネの手紙第三 2 節>には「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」とあり、すべての点で幸いを得、ま

た健康であるためには、たましいに幸いを得ていなければならないことがわかります。

ここで「たましいに幸いを得ている」とは、神様のみことばのとおり生きていくことによって、失った神様のかたちを取り戻すことを意味します。また、<申命記 28:2>に「あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたは祝福される。」とあります。このように神様のみことばに聞き従う人は、「はいるときも祝福され、出て行くときにも祝福される」のであり、「貸すであろうが、借りることはない」し、「主はあなたをかしらとならせ、尾とはならせない。ただ上におらせ、下へは下されない。」と約束されました（申命記 28:6-13）。

<ガラテヤ人への手紙 6:7>に「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」とあります。蒔かずに刈り取ろうとする人は、神様の法則に逆らおうとすることであり、神様を侮る人です。農夫が農業をする時も、豆を蒔けば豆を刈り取り、米を蒔けば米を刈り取ります。

また、<コリント人への手紙第二 9:6-7>に「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」とあります。農夫が百坪の良い土地を持っているとしても、十坪だけに種を蒔くなら、それ以上は刈り取れません。いくら信仰が大きい人だといっても、豊かに蒔いた時でこそ豊かに刈り取るのであって、少しだけ蒔いた時は、少ししか刈り取りません。

ところが、神様が与えられる祝福は、蒔いただけ下さるものではありません。押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、すなわち、倍以上を下さり、たましいに幸いを得ているほど、三十倍、あるいは六十倍、あるいは百倍にして報いてくださいます。また、同じものを蒔いたとしても、すぐに刈り取る時より、長く待って刈り取る時は、その祝福がよりいっそう大きくなるのが見られます。ちょうど、もやしのようなものはすぐ育ちますが、高価な果物や高麗人参のようなものは、収穫まで長く待たなければならないのと同じです。このように霊肉ともにすべての祝福が、まさに信仰をもって蒔くすべての人に臨むのです。

3. 全身にむち打たれ、血を注ぎ出された摂理

「罪から来る報酬は死」という霊の世界の法則のとおり、人類は罪によって死の道を歩むようになりました。イエス様は私たちを生かしてくださるために、木にかかれて、血を注ぎ出してくださいました。木にかけられたことは、律法の呪いから私たちを贖うためであり、いのちそのものである血を注ぎ出して、私たちを死から贖ってくださったのです。

ところが、家畜小屋で生まれて、飼葉おけに寝かせられた時や、貧しく生きられた時は、血を注ぎ出すことはありませんでした。貧しさそのものは罪ではないので、イエス様が貧しさを贖うために、血を注ぎ出す必要はなかったのです。しかし、罪を贖うためには、血を注ぎ出すことがなければならず、病気とわずらいも罪によるものなので、これらをいやすためにも、血を注ぎ出さなければなりませんでした。

神様の摂理のうちに十字架を負われる時になると、イエス様はユダヤ人の手に渡されて、ユダヤの総督ピラトの法廷に連れて行かれました。ピラトはイエス様が何の罪もないことがわかりましたが、群衆の圧力に押されて、イエス様をむちで打ち、十字架につけるように引き渡してしまいました。

十字架も残酷な刑罰ですが、むちで打たれるのも決して軽い刑罰ではありません。当時、世界最強国であったローマの、よく訓練された兵士がむちを打つと、むちがからだを一回転半して絡み、皮膚を切り裂くだけでなく、むちの端にある鉛のかたまりがからだの中に食い込みます。このむちをまた強い力で引っ張ると、肉がむちについてはがれていきます。イエス様はこういう激しい刑罰を受けて、骨が見えるほどの傷を負って、多くの血を注ぎ出されました。

1) 病気をいやされる主

では、なぜイエス様はこのようにむち打たれ、ひどい苦しみを受けて、血を注ぎ出さなければならなかったのでしょうか？ なぜ神様はひとり子イエス様がこういう苦しみを受けるように許されたのでしょうか？

<イザヤ書 53:5-6> 「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎

を彼に負わせた。」

イエス様がむち打たれて、血を注ぎ出されたのは、私たちがいやされるためでした。<出エジプト記 15:26>で、私たちが戒めを守って罪を犯さなければ、どんな病気も臨まないと約束されています。したがって、病気がいやされるためには、みことばどおり生きていなかったことを悔い改めて、まず罪の赦しを受けなければならぬのです。

<マタイの福音書 9:2>にも「すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、『子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。』と云われた。」とあります。その後でイエス様が命じられると、中風の人がいやされて、起きて歩きました。病人をいやされる前に、まず罪の問題を解決してくださったのです。

<ヨハネの福音書 5:14>では、いやされた人に「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。」と云われました。一度いやされたけれど、もっと悪い事が起こるのは、また罪を犯すからなのです。ですから、また罪を犯さないならば、病気が再発しないし、また、もっと悪い事が起こることもないのです。

したがって、病気を贖うためには、血を注ぎ出すことがなければならないのです。イエス様はむち打たれて、血を注ぎ出して罪を贖い、私たちの代わりに苦しみを受けられて、私たちをすべての病気の苦しみから自由にしてくださいました。

<マタイの福音書 8:17>に「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。」とあります。ここで「わずらい」とは、何かの菌による病気とは違って、医学でどうすることもできないもの、生まれつきからだが不自由なことで、たとえば、歩けないこと、小児マヒなどを指します。

2) 信仰の告白の重要性

<ペテロの手紙第一 2:24 後半節>に「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とあります。「いやされる」ではなく、「いやされた」と書かれています。完了形を使っています。ですから、イエス様がむち打たれて、血を注ぎ出されたので、私たちの病気が贖われたことを信じる人は、これ以上わずらいや病気で苦しみを受ける理由がありません。

ところが時々、信仰があると言いながらも、「私は弱いから倒れる時もあるし、罪を犯す時もあります。人がすべてみことばどおりに生きるのは難しいです」と言う人もいます。自ら「私は弱い」と口に出すと、弱くなるしかなく、「罪を捨てるのは難しい」と口に出すと、信仰生活をするのがつらくなるしかありません。<箴言 18:21>に「死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べる。」とあるからです。どんな状況でも「私は神様の恵みで健康です」「満たされています」と告白する時は、その信仰の告白のとおり、神様の恵みと力が臨み、疲れにも十分勝てるし、不可能が可能に変わるので。

私たちがいやされるために祈りを受ける時も、「祈りを受けたので、いやされると信じます」ではなく、「すでにいやされたと信じます」と告白するとき、その信仰のとおり神様が働いてくださいます。「祈りを受けたのでいやされると信じますが、今はやっぱり痛みがあります。まだ痛いです」と言うなら、これは信仰ではありません。「相変らず痛いのに、どうしていやされたと言うんですか？ それでは嘘にならないでしょうか？」と言う人もいます。しかし、霊の信仰が何かを理解すれば、そのようには言いません。

<マルコの福音書 11:24>に「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」とあります。この時も、祈って求めるものは何でも「受けると信じなさい」ではなく、「すでに受けたと信じた」とき、そのとおりになると言われました。

<ヘブル人への手紙 11:1-2>に「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人々はこの信仰によって称賛されました。」とあります。信仰は、すでになされたことを見て告白するのではなく、見えないものを信仰で望むとき、実際に現れるのです。信仰で望むとき、見えない無から見える有が創造されます。かといって、心では信じてもいないのに、口だけで「信じます」と言うからそのままなされる、という意味ではありません。心から真実に信じられる信仰を口で告白するとき、その信仰のとおりになります。ですから、「私はすでにいやされたと信じます」「答えられたと信じます」と告白することは嘘ではなく、霊の信仰の告白であり、真実を語ることです。

たとえを挙げて説明してみましょう。花の茎を切って花びんに生けると、その花は死んでいるのでしょうか？ 生きているのでしょうか？ 今は生きているようですが、根から離れているので、すでに命を失っています。ですから、この事実がわかれば、「死んだ」と答えます。ですから、命から、根から離れたので、もう一日、二日経てば、しおれていき、数日後には枯れてしまいます。今も死んでいく

ところなのです。

このように、主を受け入れない人々について、聖書では「死んだ」と表現します。明らかに呼吸をして、飲み食いして、欲を満たしているのに、「死者」だと言われるのです。今は生きているようですが、その中には永遠のいのちがないので、結局地獄に行きます。それで、「死者」だと聖書は表現するのです。

病気の治療についても同じです。このように信仰で望むとき、「神様の力で病原菌が、がん細胞がすでに焼き尽くされた。病気とわずらいが私から離れてしまった」と告白すれば、その信仰のとおり主が働かれます。すでにイエス様がわずらいと病気を贖うためにむち打たれて、血を注ぎ出してくださったからです。

ところが、これが信じられずに信仰で告白できないなら、相変らず病気が離れません。いくら祈りを受けても、自分の心では「私は痛い、まだいやされていない」と信じるから、相変らず痛いのです。このような否定的な思いを打ち砕かない限り、神様のみわざを体験することはできません。肉の思いを働かせずに「信じます」と言うと、すぐその場でもマヒしたからだが動いて、立ち上がって歩いて走ることもできます。

3) 信じると告白したのに病気が離れない理由

イエス様がむちで打たれて病気を贖われましたが、その事実を信じるという人の中でも、相変わらず病気で苦しむ人が多くいます。これは、神様が正しいと見られることを行なわなかったからです。<出エジプト記 15:26>に「そして、仰せられた。『もし、あなたがあなたの神、主の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行ない、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは主、あなたをいやす者である。』」とあります。

ここで「エジプト」とは、霊的に世の中を指し、エジプトを出たとき、エジプトに下した「病気」とは、世の中のすべての病気を総称しています。私たちが神様の命令を守り行なうなら、どんな病気にもかかることはなく、ひょっとして病気にかかったとしても、悔い改めて立ち返るなら、「わたしは主、あなたをいやす者である。」と仰せられたように、全能の父なる神様がいやしてくださるのです。

ところが、ここで正しいことを行なうといっても、人のほうで自分が見て正しいことを行なうのではなく、神様が正しいと見られることを行なわなければならない、と言いました。人が見て正しいことは、人によって違います。世のすべて

の人が、生まれて育ちながら見聞きして習ったことが違って、育った環境と価値観が違うからです。この人は正しいと思うことも、あの人は正しくないと言うこともあります。したがって、真理そのものであられる神様のみことばを基準として、神様が正しいと言われたことだけが、まことに正しいのです。

たとえば、子どもがほかの子どもに叩かれてきたら、人によって反応が違います。ある親はとても気を悪くして、相手のところに行って問い詰めたりもします。それで、子どものけんかが親、つまり、おとなのけんかに発展することも見られます。ある親は泣く子を叱りつけながら、「お前はなぜ叩かれてばかりいるのか？ お前も叩きなさい」と言います。はなはだしきは「一回叩かれたら、お前は二回、三回と叩きなさい」と言う親もいます。

しかし、真理は何と教えているのでしょうか？ 「右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」「平和を追い求めなさい。」「敵を愛しなさい」と言います。これがまさに神様が正しいと見られることです。もし、人が小さい時から神様が正しいと思われることを追い求め、教えられて成長するなら、その人は将来、多くの人々をいだいて理解して、先立って導ける大きい器になるでしょう。神様が正しいと思われることを追い求めるとき、人が見てその時は損をするようでも、結局は神様がその人を認めて、高めてくださるからです。

神様のすべての命令を守りなさい、という言葉を知ると、ある人は「その多くのおきてを、どうやってすべて守れるのだろうか？ 大変だ」と思います。しかし、私たちが神様の命令を守り行なうことは、難しいことではありません。「神様が命じられたので聞き従える。私がするのはなく、聖霊様が助けてくださり、神様が恵みを下さり、力を下さるので、十分にできる」と、このように信じて行なうと、とても簡単です。

しかも、いくら命令が多いようでも、要約すれば十戒になります。また、御霊の九つの実、愛の章にある霊の愛、八つの幸いを心に耕していくなら、神様が正しいと見られることが行なえるのです。これらを耕せば、残ったものはすべて耕せるということです。

本当に神様を愛して、天国の望みがあるなら、天国の栄光と報いを望むなら、命令を守ることが難しくもなく、従えない理由もありません。ひょっとして「私にはあまりにも捨てることが多いから、いつすべて捨てられるのだろうか」と言う方がいても、心配することはありません。憤りであっても、憎しみであっても、

姦淫であっても、一番捨てにくいものを心に置いて、集中的に祈って断食して捨てたら、残りはとても簡単に捨てられます。まるで、木を抜くにしても、大きい根を引き抜くと、小さい根は一度に抜けるようなものです。

<歴代誌第二 16 章>に、南ユダのアサ王に関しての記録があります。もともとアサ王は神様によく仕えた王です。ところが、アサ王の治世の第三十六年にイスラエル王国の王がユダに上って来ると、神様だけにより頼んでいた信仰が変わってしまいました。異国に賄賂を送り届けて、イスラエルを攻めるように願ったのです。これに対して、予見者が来て王を責めました。以前は、もっと強い異国の軍隊が攻めて来た時も、王が神様により頼んだ時は、神様が彼らを王の手に渡されたのですが、今度は、王が異国の軍隊に頼ったので、神様が王に御顔を隠されるようになった、と知らせてくれました。

すなわち、神様にだけより頼んだ時は神様が守ってくださったのに、神様により頼まないで、今は世に頼って人に頼るから、神様が御顔を隠してしまわれたのです。<歴代誌第二 16:9>を見ると「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。あなたは、このことについて愚かなことをしました。今から、あなたは数々の戦いに巻き込まれます。」とあります。神様の御目は地球の果てまで、全宇宙をあまねく見渡しておられます。ですから、心と思いと力といのちを尽くして神様を愛する者に、御力を現してくださるのです。

このように責められても、アサ王は悔い改めませんでした。むしろ預言者を迫害して、神様と罪の隔ての壁を積み続け、結局、治世の第三十九年に、両足とも重い病気にかかってしまいました。では、どうすればよいでしょうか？ その時でも魂を砕いて罪を告白し、神様にすがらなければならないのに、王は相変わらず神様を求めるのではなく、逆に医者を求めました。

しかし、<歴代誌第二 16:13>に「アサは、彼の先祖たちとともに眠った。すなわち、その治世の第四十一年に死んだ。」とあります。つまり、結局は病気で死んでしまいました。神様により頼んだならば、神様が完全にいやして下さり、もっと長生きしたはずなのに、世と人に頼るから、神様のみわざが見られなくて、結局、病気で死んでしまったのです。神様が彼のことをとても残念に思われたので、こういう記録を聖書に残しておかれたのです。

今日も同じです。多くの人が口では「全知全能の神様を信じます。生死禍福をつかさどる神様を信じます」と言います。しかし、実際に自分に何かの問題が起こると、どうするでしょうか？ 神様により頼むのではなく世に頼り、祈って神様に求めるのではなく、病院に頼って、薬に頼る人がたくさんいます。いくらみことばをたくさん聞いて知っていても、命令を守り行なわないから、また、神様を心から愛さないから、いやされる霊の信仰が与えられないのです。

私たちが聖霊を受けて、神の子どもとされる特権を受けたら、これからは闇から出て、光の中で正しいことを行なっていけば、神様との間に詰まった罪の隔ての壁が打ち壊されます。打ち壊されるほど、自分の中に信じられる信仰が与えられます。この信仰が与えられるほど、すべてのことに神様のみわざを体験していきます。病気にかからなくなり、たとえ病気にかかったとしても、すでにいやされたと信じると、直ちにいやされるのです。

4. いばらの冠をかぶられた摂理

イエス様は神の御子であり、王の王であり、主の主として、栄えある冠をかぶるにふさわしいお方です。ところが、イエス様がこの地上でかぶられた冠は、金や宝石で飾られた栄えある冠でなく、鋭いいばらの冠でした。

<マルコの福音書 15:16-18>に「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、それから、『ユダヤ人の王さま。ばんざい。』と叫んであいさつをし始めた。」とあります。イスラエルのいばらはとても長くて硬いトゲを持っています。ローマの兵士たちは、このトゲのある枝で人の頭よりわずかに小さい冠を編んで、これをイエス様の頭の上に押しつけてかぶせました。その長くて硬いトゲがイエス様の頭に食い込むと、皮膚が破れる苦しみとともに、イエス様の顔は血に染まりました。

それでは、なぜ神様は愛するひとり子イエス様に、このようないばらの冠をかぶらせたのでしょうか？ それは、人が思いで犯す罪を赦してくださるためでした。人の心に真理に逆らうものがあるために、真理に逆らう思いが浮んで、悪い感情をいただくようになります。他人を憎んで、そねみ、ねたみ、さばき、罪に定めます。他人のものをほしがったり、情欲をいだいたりもするし、うわべでは敬うふりをして、心では無視してさげすんだりする場合があります。

こうして思いと心で罪をいただくので、結局は行ないとして罪を犯すことにまですなります。世では、いくら悪い思いと心を持っていても、行なわなければ罪とは言いません。しかし、聖書では、心に罪をいだいたり、思いで罪を犯したりすることも、すべて罪だと言われています。

<マタイの福音書 5:28>には「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」とあります。また、<ヨハネの手紙第一 3:15>には「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」とあります。実際に兄弟を殺さなかったとしても、心をご覧になる神様の前では、憎むだけでもすでに人を殺したことと同じであり、みな罪になるのです。

イエス様がいばらの冠をかぶって、血を注ぎ出された理由は、まさにこのような思いで犯す罪までも赦してくださるためでした。このようなことを信じて罪の赦しを得た人は、思いと心までも聖められて、変えられなければなりません。

1) 肉の思い

私たちが思いで罪を犯さないためには、まず「思い」について知らなければなりません。人の頭には、知識を入れて活用することができる記憶装置があります。人が生まれてから見聞きして学んだ多くのことが、「感じ」とともに入力されます。これが「知識」です。このように入力された知識が、必要に応じて再生されて出て来るものを「思い」と言います。

ところが、生まれて育ちながら入力された知識は、人によってすべて違います。成長した環境が違い、学んだことが違います。もし、同じ環境で同じ人に教わったとしても、それぞれどんな感じで受け入れたのかが違います。このように受け入れた知識が違うので、人によって価値観も違って、善と悪とをさばく基準が違います。同じ状況に置かれても、知識を引き出して思う内容も、それぞれ違ってきます。

たとえば、同じ場面を見ても、ある人は「嫌だ、悪い」と思うこともあるけれど、ほかの人は「良い、美しい」と思うこともあるのです。ある国では教養ある行ないとして認められることが、他の国では無礼な行ないだと非難されることもあります。このように、人によって思いが違うだけではありません。世の人々の思いは、神様の真理に合わないことがほとんどです。

初めにアダムがエデンの園に住んでいたとき、アダムには真理の知識だけがありました。神様が真理だけを教えてくださいましたからです。その時、アダムは思うことも、真理の思いだけでした。ところが、アダムが罪を犯した後は、アダムの心から真理の知識が抜け出て、代わりに真理に逆らう知識で満たされました。愛して、仕えて、理解しようとする、真理の知識の代わりに、憎んで、欲を出して、高くなろうとする、真理に逆らう知識で満たされました。サタンはその真理に逆らう知識に働きかけ、神様のみこころに逆らう思いをするようにしていきます。

たとえば、自分の同僚が功を立てて、多くの人々の前でほめられたとしたら、サタンはそこで真理に逆らう知識に働きかけて、悪い思いをするようにさせます。「あのひとりで功を立てたわけでもないのに、ひとりほめられている」と不満を持ったり、「私も同じように苦労しているのに、なぜあの人だけが認められるのだろうか？ 私は何だろう」と気を落としたりします。その人に真理の知識だけがあるなら、そうしないはずでしょう。サタンが思いに働きかけないので、「あの人がほめられてよかった。私ももっと努力しなければ」と真理を喜びます。

また、相手が自分の気に入らない行ないをするとき、真理に逆らう思いが働くと、「あの人はとても利己的で無礼だ」とさばいて、「あんな人とは口もききたくない」とわだかまりを持ちます。心にむらむらとわき上がってくる憤りをがまんするために苦労したりします。しかし、真理の知識を持っていると、相手の悪い行ないを見ても、さばいたり怒ったりするのではなく、「あの人には何かの理由があるのだろう。私が理解して包んでいかなくては」と思うはずで。

人が真理の知識だけを自分の中に入れてきたなら、真理の思いだけをします。しかし、人は生まれてから真理に逆らう知識を積んで生きてきたので、そこから出て来る思いも、結局は真理に逆らうしかありません。私たちが神様を信じてからは、まず知識を真理に変えていかなければなりません。それでこそ思いもまた、真理の思いに変えられます。

たとえば、傷んだ材料で料理を作れば、結局傷んだものができるしかありません。だから、新鮮な料理を作るなら、材料を新鮮なものに変えなければなりません。そのように、心にある知識を真理に変えてこそ、思いも真理に変えられるのです。そのためには、神様のみことばを熱心に聞いて、霊の糧にしなければなりません。霊とまことによって礼拝をささげて、ただ「はい」と「アーメン」と告白して心に受け入れ、自分を変えていかなければなりません。そうしていくなら、早いうちに誰でもすみやかに霊に入ることができます。

ところが、ある人々は神様のみことばを聞くとき、自分の思いに合うと「アーメン」と言いますが、自分の思いと合わないことがあれば、「それは違いますが」と言います。「低くなって仕える者は高められる」と言っても、「高められようと努力しても高められることが難しいのに、仕えて低くなるなんてとてもできない」と思います。「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。」と言うと、「それなら、この世をどう生きていくのか」と言います。いつも損して生きているように思われるのかもしれないかもしれません。

全知全能の神様はまことに仕える者を高めてくださり、みことばに聞き従う人を祝福されます。しかし、人は自分の知識と経験に合わないので、みことばが信じられなくて、神様のみこころに逆らう思いをするようになるのです。このように、神様のみこころに逆らう思いを「肉の思い」と言います。人に「肉の思い」をさせるのは、まさにサタンです。

聖書には、ペテロが肉の思いを働かせて、イエス様に叱られた場面があります。イエス様が、将来神の摂理のうちに十字架を負うと言われると、ペテロは「主よ。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」と言ったのです。ペテロは悪い意図でそう言ったのではありません。愛するイエス様が死ぬことを願わなかったので、もどかしい心で言ったのです。これは、人が聞くと良くて正しい言葉のように聞こえるかもしれませんが。

ペテロは主を愛するのでそう言ったのですが、私たちの主はどう言われたでしょうか。「ペテロ、あなたは私を愛しているんだな」と言われたのでなく、「下がれ、サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と言われました。これは、ペテロが自分の思いで言ったからです。肉の思いではほめられそうなことかもしれませんが、神様をご覧になる時は、叱られることなのです。

「下がれ、サタン。」というイエス様のことばは、ペテロに「サタンだ」と言われたのではなく、ペテロに神様のみこころに逆らって思うように働きかけているのが、サタンであることを悟らせてくださったのです。

肉の思いは、肉の人の立場からは、賢くて良いものだとも考えられます。しかし、<ローマ人への手紙 8:7>に「というのは、肉の思いは神に対して反抗するも

のだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」とあります。肉の思いは神様に対して反抗するものですから、神様とは何の関係もなくなります。肉の人が見て、いくら賢くて良く見えるといっても、肉の思いを働かして事を行なった時は、神様と関係がありません。

肉の思いを打ち壊してこそ、無から有を創造する霊の信仰が持てます。肉の思いを捨ててこそ、神様の心と御旨がわかって、神様に喜ばれることもでき、神様のみわざを体験することもできます。神様の力は人の知識と思いを超えており、神様の知恵と知識は人が推し量ることはできません。私たちが肉の思いを働かさずに聞き従いさえすれば、限りのない神様の力を常に体験することができます。私たちが肉の思いを働かせずに、ただ神様にだけ頼るなら、神様は必ず働いてくださいます。

問題は、人が肉の思いを働かして神様にだけ頼らずに、人の知恵と方法を使うところにあります。人の思弁と知識を働かせて、神様のみことばが信じられないようにして、聞き従えないようにする思いは、すべて肉の思いです。ところが、人は数え切れないほどの肉の思いの中で生きています。ですから、皆が神様に対して反抗するようになったのです。

このように肉の思いによって神様に対して反抗するようになった私たちの罪を赦して、私たちを救うために、イエス様はいばらの冠をかぶられました。それでは、このような恵みを受けた私たちは、これからどうすればよいのでしょうか？

<コリント人への手紙第二 10:5>に「私たちは、さまさまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」とあります。このみことばどおり、私たちはさまさまの思弁を打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにして、キリストに服従させなければなりません。それでこそ敵である悪魔も服従するようになります。

すなわち、神の知識に逆らって立つ肉の思いを捨てるべきであり、今まで正しいと思ってきた知識も、神のことばに外れることはすべて捨てなければなりません。そうしていくうちに、私たちの思いは真理の思いになり、神様のみこころにかなう思いに変えられるようになります。

2) 肉の欲と目の欲と暮らし向きの自慢

思いで犯す罪を捨てるためには、何よりも心を聖くしなければなりません。具

体的に言うと、肉の欲と目の欲と暮らし向きの自慢を捨てればよいのです。<ヨハネの手紙第一 2:16>に「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」とあります。すなわち、これらは世の支配者、敵である悪魔から来たものです。

心に悪があって、世を追い求める属性がぎっしりある時は、いくら真理の思いをしようとしても、肉の思いが浮び上がるものです。「肉の欲」があれば世の欲に引かれ、世のものを追い求めて味わいたいと願います。このような肉の欲は肉の行ないを生み出して、神様のみことばどおり生きられないようにさせます。

<ガラテヤ人への手紙 5:19-21>に「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」とあります。神の国を相続できないということは、つまり、救われないということです。

ある罪は、犯しても悔い改めて立ち返れば赦されますが、赦されない罪もあります。それは死の道に向かう罪です。これについて、神様は聖書の旧約や新約に明らかに記しておかれました。まさに「肉の欲」があるために、このような肉の行ないをしたがるようになるのです。

次に、「目の欲」とは、目で見て耳で聞くことによって心が揺れ動き、肉のことを追い求めさせる属性のことです。このような目の欲があるために、人々はますます世の欲を追い求めていくようになります。

また、「暮らし向きの自慢」とは、現実のすべての快樂を追い求めて、自慢しようとする属性です。暮らし向きの自慢により、高くなって認められようとし、名誉と権勢などを求めようとするのです。

心からこのような肉の欲と目の欲、暮らし向きの自慢を捨てれば、思いも肉の思いでなく、神様が喜ばれる霊の思いができます。

3) 天国の冠を与えるため

イエス様がいばらの冠をかぶられたので、私たちは将来天国に行って、すばらしい冠がかぶれるようになりました。天国の冠にもいろいろな種類があります。この世でも、ある競技が開かれたとき、参加者全員に与える参加賞があるかと思

えば、特別賞もあって、金、銀、銅メダルなど、順位によって与える賞もあります。そのように、天国で受ける冠も、この地上でどんな人生を歩んだのかによって、いろいろな種類に分けられます。

<コリント人への手紙第一 9:25>には「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」とあります。ここにある「朽ちない冠」は、主を受け入れて、真理を聞いて、罪と戦って捨てようと努めた人に与えられます。

また、<ペテロの手紙第一 5:4>にある「栄光の冠」とは、罪と戦って捨てて、みことばを守り行ない、神様に栄光を帰した人に与えられる冠です。次に、<ヤコブの手紙 1:12>と<ヨハネの黙示録 2:10>には「いのちの冠」があります。この冠は、神様を愛して死ぬまで忠実であり、悪はどんな悪でも避けて、聖められた人に与えられる冠です。そして、使徒パウロのように完全に聖められて、その上神様に喜ばれる信仰をもって使命をよく果たした人々は、<テモテへの手紙第二 4:8>にある「義の栄冠」を受けるようになります。また、<ヨハネの黙示録 4:4>には、天国の長老たちがかぶる「金の冠」が記されています。この時、天国の長老とは、この地上で長老の努めを持った人々のことではありません。神様がその信仰を認められる長老として、完全に聖められて、全家を通じて忠実であり、永遠に変わらない純金のような信仰を持った人々です。

このように神様は、神様の子どもたちがこの地上でどれくらい聖められたのか、どれくらい忠実だったのかによって、それぞれ違う冠を下さるのです。特に「義の冠」や「金の冠」は、神様の御前に最も認められる人々に与えられます。このような冠を受けた人々は、天国で太陽のように輝く栄光を受けるようになります。

イエス様が苦しみのいばらの冠をかぶられたので、私たちが思いで犯す罪を贖われただけでなく、将来、天国で私たちがこのようにすばらしい冠がかぶれるようにしてくださいました。

5. 両手と両足に釘を打たれた摂理

イエス様は服を脱がされたまま、十字架に手足を釘づけられました。私たちが知っている一般的な死刑の方法は、死ぬまでの心の苦しみのほうが恐ろしいけれど、肉体の痛みは比較的短い時間に終わります。しかし、十字架刑は、長い間非常に激しい痛みを与える死刑の方法です。殺人者や反逆者など、重罪人にだけ行なわれる厳しい刑罰でした。

まず、木で大きい十字の形を作り、その十字架の上に両手と両足を釘で打ちつけます。それから十字架を立てると、体重が下へさがり、手と足に釘を打たれたところに、さらに激しい苦しみが増えられます。急所を避けて釘を打つので、早く死ぬこともできません。血を流し続けながら、息が絶える最後の瞬間まで、その激しい苦しみをそのまま受けなければならないのです。

イエス様はこのような十字架の刑罰を受ける前、一晩中連れ回されて尋問を受けられ、ひどいむち打ちといばらの冠のため血だらけになって、重い十字架を背負ってゴルゴタの坂道を上がられました。丘の上に着くと、百人隊長の号令に合わせて、兵士たちは一回、もう一回と、かなづちを打ち下ろして、イエス様は残酷な苦しみの中で十字架につけられました。熱い太陽が照りつける中、長い時間つるされていると、血の臭いをかぎつけて毒虫が飛んできます。このように十字架につるされたまま、イエス様は完全に息絶えるまで、六時間ほど激しい苦しみを耐え忍ばなければなりませんでした。

それでは、イエス様が手と足に釘を打たれなければならなかった理由は何でしょうか？

これは、人が手と足で犯したすべての罪を贖うための摂理でした。<マルコの福音書 9:43-45>には「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身でいのちにはいるほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいのちにはいるほうが、両足そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。」と書かれています。手があるので、その手ではいけない事をして、足があるので、その足で行ってはいけない所に行って罪を犯すことが、どんなに多いのでしょうか？

それでは、私たちは地獄に行かないために、罪を犯さないために、手と足を切らねばならないのでしょうか？ 今日でも、旧約の律法を守る国々では実際にそうしています。「目には目を、歯には歯を」という原則に従って、手で盗むと手を切り、相手の目に被害を与えた場合は目をえぐり出して、姦淫すれば石で打って殺します。

しかし、イエス・キリストを救い主として受け入れた子どもたちは、そうする必要がありません。手足を切らなくても、悔い改めるなら赦されて、聖霊の力で

罪を避けることができます。すでに罪のないイエス様が両手と両足に釘を打たれて、血を注ぎ出されたので、手と足で犯す罪を贖ってくださったからです。

また、<マルコの福音書 9:47>には「もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出さない。片目で神の国にはいるほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。」とありますが、目で犯す罪とは、結局、見て聞いて感じることによって、思いの中で犯す罪です。これは、前に説明したとおり、イエス様が頭に茨の冠をかぶって、血を注ぎ出して贖ってくださったので、私たちは目をえぐり出さなくてもよくなったのです。このように、私たちの罪を赦し、地獄の火から救うために、イエス様がこの残酷な十字架の苦しみをご自身で受けられたのです。

本当に神様の愛を知って、私たちの主の大きい愛を知って、信じて感謝したら、手と足で肉の行ないをしないのです。肉の行ないをすれば、救われなくて地獄へ行くことになっているのに、信じたらどうして肉の行ないをするのでしょうか？

もちろん、変えられようと努めていても、まだ信仰が弱い時は繰り返し罪を犯す場合があります。そんな時も、心から悔い改めて、再び罪を避けるために努力していけば、神様も赦してくださいます。再び恵みを下さり、罪を避ける力を与えてくださいます。信仰の一段階や二段階にいる人がまだ肉の行ないをしているからといって、地獄へ行くのではありません。まだ幼い信仰なので、真理をよく知らないのです。まだ罪を犯すけれど、みことばでいつも変えられながら信仰の一段階から二段階に入って行くので、彼らが肉の行ないをしても、悔い改めれば赦されます。

しかし、信仰の三段階に入った人は、赦されません。信仰の一段階を過ぎて肉の行ないを断ち切ろうとして、信仰の二段階に入りました。二段階に入って肉の行ないを捨てて、信仰の三段階に入ってきました。もう信仰の三段階に入った人は、肉の行ないをすてはいけません。乳を飲む信者でなく、堅い食物を食べる信者になったからです。

ところが、堅い食物を食べる信仰になりながら、乳を飲む信者がするように、再び肉の行ないをしたら、人の価値を失ったこと、神の子どもとしての価値を失ったことと見なされます。それは、信仰を捨てたということであり、神様の前に「信じます」という告白が偽りだということです。それで、信仰の三段階に入った人々が肉の行ないをすれば救われないと、聖書は旧約にも新約にも、あちこちに記さ

れているのです。

<ヘブル人への手紙>の6章や10章を見れば、信仰の三段階以上にある者、すなわち、信仰もあって、聖霊を受けた体験もあって、神の力も味わって、神のことばもわかる者たちがことさらに罪を犯せば、または、イエス様をもう一度十字架にかけるようなことをすれば、悔い改めの霊が与えられないので、罪の赦しを受けられなくて救われない、と警告しています。

ところが、ある人々は「主を信じています」と言い、口では「悔い改めます」と言いながら、相変わらず罪の中に生きています。神様は、こういう悔い改めは偽りだと言われます。<ヨハネの手紙第一 1:6>にも「もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。」とあります。すなわち、闇の中を歩んでいる人は、真理を行っていないとみなされます。

また、<ガラテヤ人への手紙 5:19-21>には、肉の行ないをする者、すなわち、行ないで罪を犯す者たちは「神の国を相続することはありません。」とあります。これはつまり、救われないという意味です。救われて天国に行くためには、これらの罪を犯してはいけません。イエス様が私たちの罪のために手と足に釘を打たれ、苦しみを受けられたことをまことに信じる人は、再び罪を犯すことができません。

また、罪を犯したことを心から悔い改めて立ち返ったなら、同じ罪を繰り返して犯さないはずですが、罪を避けないで以前の姿のまま生きる人は、まことの信仰がある人でもなく、神様を愛する人でもありません。救いとも関係のない人です。

罪を避けて聖なる神様に似せられていくことは、人の力では不可能ですが、神様の力では可能です。また、神の子どもならば、当然すべての罪を捨てて聖められなければなりません。

イエス様が血を注ぎ出して木にかけられ、代わりに呪いを受けられたので、これを信じる私たちは罪の赦しを得て、すべての律法の呪いから解放されました。イエス様を救い主として信じて受け入れた神の子どもたちは、病気とわずらい、貧しさ、その他あらゆる災いを免れるようになったのです。ですから、主を受け入れて、神のことばに聞き従う神の子どもたちは、常に守られるのです。

みことばどおり生きていても、試練や患難がやって来たなら、これは祝福のための試練です。<ヤコブの手紙 1:12>に「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて

良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」とあります。試練の目的を知って感謝して、喜びをもってよく勝ち抜いたならば、神様は「あの子どもは十分に喜んで感謝して勝ち抜いたのだ」と認めてくださいます。また、<マタイの福音書 5:10>には「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」とあります。義を行なうために、あるいは主の御名で苦しみを受けるとき、感謝して受けた人は霊肉ともに祝福されるのです。

それでは、神様のみことばのとおり生きられなくて、試練や患難がやって来た場合には、どうすればよいのでしょうか？ その時は、直ちに過ちを悔い改めて、立ち返ればよいのです。罪の壁を壊してから信仰をもって祈るとき、試練や患難が離れるのです。ところが、ある場合は、罪を犯したからではなく、人の間違いによって苦しみにあう時もあります。このような時も神様に頼れば、神様がその信仰どおりに働いてくださいます。

6. 十字架刑と槍でわき腹を突き刺されたこと

イエス様が十字架につけられていたとき、多くの人が十字架の周りに集まって、イエス様をののしってあざけりました。「もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」と言うのでした。そんな中で十字架につけられていたイエス様の両側には、ふたりの強盗がそれぞれ十字架につけられていました。

<マタイの福音書 27:44>に「イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。」とあり、両側の強盗どもが人々と一緒にイエス様をののしったと書かれています。ところが、<ルカの福音書 23:39-43>では、これと違うように書かれています。強盗のうちのひとりにはイエス様に悪口を言いましたが、もうひとりの強盗は、むしろイエス様に悪口を言う強盗をたしなめています。

1) 聖書の記述の差

それでは、なぜこのように聖書の記述に違いがあるのでしょうか？

これは、聖書を読む後世の人が、その場面をさらに実感できるようにと、神様が働かれたのです。イエス様が十字架につけられた場面は、今日のようにビデオで残すこともできず、文字で説明するしかありませんでした。ところが、人間耕作と救いのことばを書き記した聖書に、すべてを詳しく記そうとするなら、数千

巻でも足りません。ですから、十字架を負われた場面も、最大限要約して記さなければならず、その短い記述を読んで、私たちがその場面を最も生き生きと感じられるようにしなければならぬのです。

この場面をちょっと想像してみましょう。ゴルゴタの丘の上に三つの十字架が立っていて、その周りには、十字架の刑罰を見ようと多くの人が集まって騒いでいます。ローマの兵士たちが槍と盾を持って、押し寄せる群衆を防いでいます。十字架と兵士たちを中心に半円状に集まると、人が十字架のどちら側に立っているかによって、聞こえる声に差があります。

イエス様に悪口を言っている強盗のほうに立っていれば、悪口を言う強盗の声はとてはっきり聞こえますが、反対のほうにいる強盗の声はあまりよく聞こえません。しかも、強盗たちも十字架につけられて死にかけているので、ひと言ひと言、はっきりと大声で話すこともできません。こういう状態で、悪口を言う強盗のほうに立っている人には、悔い改めた強盗が、イエス様に悪口を言う強盗に向かってたしなめる姿が、まるでイエス様に向かって悪口を言っているように見えることもあるでしょう。しかし、悔い改めた強盗のほうや、イエス様のほうにいる人は、ふたりの強盗の言葉とイエス様の言葉が聞けるし、正確に記すことができます。

もちろん、全知全能の神様は、記す人に正確な内容を知らせて書かせることもおできになります。しかし、記述にこのような差が出ることを許されて、御霊に感じて聖書を読む人々には、まるで映画のフィルムが回っているかのよう、生き生きした臨場感の中で、当時展開された状況をさらに明らかに感じるようになさったのです。

聖書 66 巻は、全知全能の神様が人をつかさどって書き記させたものであり、どんな誤りもありません。したがって、聖書を読むとき、人の思いに合わないことがあっても、肉の思いでさばくことが決してあってはなりません。御父の前にその霊的な意味を求めて、御霊に感じてみことばに含まれた神様のみこころを明らかに悟るべきです。

2) すねが折られなかったこと

イエス様は十字架の上で何時間もひどい苦しみを受けて、ついに亡くなられました。<ヨハネの福音書 19:31>に「その日は備え日であったため、ユダヤ人たち

は安息日に（その安息日は大いなる日であったので）死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。」とあります。イエス様が十字架にかけられた日は金曜日でした。その翌日は土曜日で、ユダヤ人たちが大いなる日として守る安息日です。大いなる安息日には、呪われた死体を木にそのままかけておけないので、ユダヤ人たちはピラト総督のところに来て、十字架にかけられた死体を取りのけるように願います。

十字架にかけられた人のすねを折ると、これ以上からだを支えられないので、息が詰まって早く息が絶えます。イエス様の左右にかけられた強盗たちについては、すねを折って死体を取りのけましたが、イエス様にはそうしませんでした。兵士たちはすでにイエス様の息が絶えたことを確認して、イエス様のすねを折りませんでした。

<詩篇 34:19-20>に「正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される。主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。」とあります。イエス様は人類の罪を負って木にかけられて死なれましたが、イエス様ご自身は罪人でなく、傷もしみもない正しい方です。神様は、旧約の預言どおり、正しいイエス様のすねの骨が砕かれないように守ってくださったのです。

また、<民数記 9:12>や<出エジプト記 12:46>にも、エジプトを出た当時の民に、小羊を食べても、その骨を一本でも折ってはならない、と命じられました。聖書で「小羊」とは、イエス様を象徴します。その時も、イエス様を象徴する小羊の骨は折ってはならない、と命じておられたのです。

3) 槍でわき腹を突き刺されて、水と血を注ぎ出されたこと

このように預言されたみことばどおり、イエス様の骨は折りませんでした。兵士たちは息絶えたイエス様のわき腹を槍で突き刺しました。<ヨハネの福音書 19:34>に「兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。」とあります。

いばらの冠をかぶられたイエス様の頭と顔は、すでに血だらけになっています。また、全身にむちで打たれた傷と、釘を打たれた手足から流れた血で、惨めなお姿でした。このようなイエス様を、すでに息が絶えたことを確認しても、また槍で突き刺したのです。まるで野獣が死体まで食いちぎるように、残忍で悪い行な

いをしました。これだけ見ても、人間がどれほど悪いのかがわかります。

罪で満ちている今日は、イエス様の時代よりさらに悪い時代になりました。創造主の神様が信じられるように、非常に明らかな証拠を見せても、悪い人々は相変わらず神様を信じようとしません。世の欲を追い、ますます罪と悪に染まっています。さらに悪い人々は福音を伝える人々を嫌って迫害します。イエス・キリストの御名で神の力を現して、不思議なわざとするしを見せても、相変わらず信じられなくて、むしろ神様に敵対する人もたくさんいます。

それでもイエス様は、このようなすべての人々のために十字架にかかってくださったのです。

イエス様がわき腹を槍で突き刺されて、血と水を注ぎ出されたことにも、霊的な意味があります。

一番目に、これはイエス様が人となってこの地上に来られた、という証拠になります。

<ヨハネの福音書 1:14>を見ると、イエス様が「ことばは人となって」、つまり、霊である神様が人となってこの地上に来られた方であることがわかります。イエス様は人の精子と卵子によって宿られたのではなく、聖霊によって宿られました。しかし、人と同じからだを持って生まれて、人と同じ成長過程をたどられました。このように人となって来られたので、イエス様は私たちの救い主としてふさわしい資格を備えることができました。

「人類の救い主になれる四つの条件」のうち、一番目がまさに「人でなければならぬ」ということでした。天使も動物も、人の罪を贖うことができませんが、ただ人だけが、罪人の罪を贖って救うことができます。それで、イエス様は私たちと同じように骨と肉のあるからだを持って、人となってこの地上に来られました。むちで打たれると痛みを感じ、疲れも、飢え渴きも感じられました。

<マタイの福音書 4:2>に「そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。」と、イエス様も空腹を覚えられたことが記されています。また、<ヨハネの福音書 4:6>に「そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は六時ごろであった。」と、長旅でお疲れになった様子を記しています。まさにこのように、イエス様も人のからだを持たれたことをもう一度確かにするために、槍で突き刺すと血と水が出て来た、と書き記しているのです。

二番目に、私たちが神のご性質にあずかる者となれることを証しています。

<マタイの福音書 5:48>には「だから、あなたがたは、天の父が完全のように、完全でありなさい。」とあります。また、<ペテロの手紙第一 1:16>には「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」とあります。天の父が完全であられるので、子どもたちであるあなたがたも完全でありなさい、また、父が聖であられるので、あなたがたも聖でなければならぬと、命じておられるのです。

父なる神様は聖なる完全な方であられるので、私たちが神の子どもらしく、聖く完全になることを望まれます。<ピリピ人への手紙 2:5>にも「あなたがたの間では、そのような心構えていなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」とあり、<ペテロの手紙第二 1:4>には、「その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」と書かれています。すなわち、神のご性質にあずかる者にならなければならない、とされています。

イエス様は人と同じからだを持たれましたが、一生の間、どんな罪も犯さず、聖なる人生を送られました。私たちのように人となって来られたので、人と同じ感情を持たれましたが、悪魔の試みをはね除けて、真理どおりに生きられました。ただ「しかり。」と言って神様に聞き従い、すべての使命を果たされました。

ですから、私たちがイエス様のように神のご性質にあずかる者となれます。誰でも主を信じて、火のように祈って努力するなら、神様の恵みと力が臨み、聖霊に助けられて、罪と悪を脱ぎ捨てることができます。

三番目に、私たちがイエス様の血と水によってまことのいのちを得て、永遠のいのちを受けることを証しています。

原罪も自ら犯した罪もないイエス様の血は、しみも傷もない尊い血です。イエス様が尊い血を注ぎ出してくださったので、私たちは罪が赦されて、永遠に生きられるのです。また、「水」とは靈的に「みことば」を意味します。私たちが神様のみことばを聞いて、そのまま行なっていくほど、罪と悪が脱ぎ捨てられて、正しい人になります。

ですから、イエス様が注ぎ出された血と水は、私たちを変える力のある血と水

であり、私たちが死から救い出すいのちの血と水です。イエス様が血と水を注ぎ出されたので、私たちが罪の赦しを得て、神様のみことばどおりに生きられる力を受けて、まことのいのちを得たことを、もう一度証ししているのです。

したがって、<エペソ人への手紙 5:1-2>に「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」と書かれています。

7. イエス様の着物と下着についての摂理

1) 人の子らの恥を代わりに忍ばれたイエス様

イエス様はむちに打たれて、いばらの冠をかぶられたので、顔全体とからだは血だらけになり、今度は重い十字架を負わなければなりません。その十字架をご自身で負って、処刑場のゴルゴタの丘まで上がられました。ついにそこに着くと、兵士たちはイエス様の着物を脱がせました。

<ヨハネの福音書 19:23-24 前半節>に「さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。そこで彼らは互いに言った。『それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。』それは、『彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた。』という聖書が成就するためであった。」とあります。

十字架につけられるとき、イエス様は着物と下着をすべて奪われて、完全に裸のまま十字架にかけられました。尊い神のひとり子イエス様が、卑しい被造物の人々の前で裸になる恥をさらされたのです。イエス様がこのように恥をさらされた理由は、まさに私たちが受けるべき恥を代わりに受けられるためです。罪人が当然受けるべきあざけりとさげすみ、卑しめを、何の罪もないイエス様が代わりに忍ばれたのです。

もし、私たちのからだに服に腐った食べ物や汚物がたくさんついて、ひどい臭いがすれば、そのまま人の前に出られるでしょうか？ それを洗い落とすまでは、人前に出るのは恥ずかしいでしょう。ところが、からだについた汚れより、もっと醜くて恥ずかしいものが、まさに罪です。アダムも、善悪の木の実を取って食べるという罪を初めて犯したとき、神様の御顔を避けて、園の木の間に身を隠したことが記されています。まさに、罪があるから神様の前に恥を感じて、神様の

御顔を避けようとしたのです。

ところが、皆が罪の中に生きていますので、歳月が経つほど、人々はますます罪に対して無感覚になっていきます。罪を犯して悪を行なっても、「ほかの人もみんなそうでしょう」と言いながら、良心が鈍くなっていくのです。しかも、今は終わりの時、私たちは以前のどの時代より悪い世の中に生きています。仮に 30 年、あるいは 50 年前の人々が今の世の中を見るなら、大変なショックを受けることでしょう。以前は人が驚いてうしろ指を差しそうな犯罪が、今日ではあまりにもたくさん起きていて、前は想像することも難しかった恥ずかしいことが、最近はあまりにも満ちているからです。

しかし、いくら時代が悪くなったといっても、光である神様のみことばに照らしてみれば、恥ずかしい罪の姿が一つ一つ明らかにされます。真っ暗な時は、部屋が汚くてもよくわかりませんが、明かりをつけると、汚れが明らかにされます。世の汚れに染まり、罪と悪の中に生きていた人々は、将来、神様の審判台に立つとき、あまりにも大きい恥をさらすようになります。自分の汚い心と行ないが一つ一つ明らかにされるので、あえて頭を上げることさえできなくなります。

<創世記 3:21>に「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」とあります。罪を犯してエデンから追い出されるアダムとエバに、神様は裸の恥をおおうように心を込めて皮の衣を作り、彼らに着せてくださいました。この地上に来られたイエス様も、ご自身が裸になり、十字架につけられたので、罪人たちの恥を贖ってくださいました。イエス様は私たちの罪を贖い、私たちが受けなければならない恥とあざけりを代わりに受けられたので、これを信じる私たちは、罪人が受けるべき恥を受けなくてもよくなりました。

<ヨハネの黙示録 3:18>で、ラオデキヤの教会に主が「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」とされています。「神様を信じている」と言いながらも、冷たくも熱くもない彼らに、早く心を聖めて主を迎える備えをするように、と戒められたのです。

イエス様の着物と下着を脱がせた兵士たちは、着物を四つに分けて、四人が分け合いました。下着は、上から全部一つに織った、縫い目なしのものだったので、くじを引き、ひとりを取りました。今、罪のないイエス様が惨めに釘づけられる

緊迫した場面で、イエス様の着物がどうなったのかを、聖書にこのように詳しく書く価値があるのでしょうか？ イエス様の着物を兵士たちが四つに分け合ったとか、下着が上から全部一つに織ったとか、くじを引いて取ったとか、これらをいちいち記しているのは、ちょっとおかしいと思うかもしれません。また、イエス様の着物は、高価なシルクや宝石で飾られたものでもなく、長く着て古くなり、その上、土ぼこりと血で汚れたものです。そのような古い着物を、ローマの兵士たちが四つに分け合い、下着はくじを引いて取ったということも、不思議なことです。

しかも、はるか以前に書かれた旧約の詩篇にまで、これについての預言が記してあるのです。<詩篇 22:18>に「彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。」とあります。<ヨハネの福音書 19:24>には「それは、『彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた。』という聖書が成就するためであった。」とあり、この預言が成就されたことを説明しています。聖書はイエス様の着物を通して、神様の重要な摂理を表しています。それは、イエス様以降のイスラエルの歴史についての摂理です。

2) イエス様の着物を四つに分ける

まず、着物に含まれた摂理を調べてみましょう。イエス様は神の御子であり、神の民であるイスラエルの王であります。そのイエス様の着物とは、霊的にはイスラエルという国家、または、その民を意味します。ところが、イエス様の着物を四つに分けたので、その形がなくなり、着物を作った材料、つまり、布きれだけが残りました。これは、イスラエルの王であるイエス様の着物が分けられたように、イスラエルという国が滅び、その形がなくなることを意味します。

着物の材料の布きれだけが残ったように、「イスラエル部族」という名前だけが残るようになります。ローマの兵士たちが着物を分けたことは、イスラエルがローマ軍によって滅ぼされることを意味します。着物が四つに分けられたことは、イスラエルの民が四方、すなわち、東西南北、世界各地に離散することを表しています。それ以後の歴史を見ると、確かにそうになりました。今日、イスラエルの民はロシア、北米、中南米、アフリカ、ヨーロッパ全域にわたって散っています。

<ルカの福音書 19:43-44>には、エルサレム城についてのイエス様の預言があります。「やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中

で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」と書かれています。イエス様の預言どおり、エルサレムは AD.70 年に、ティトス将軍が率いるローマ軍により、包囲攻撃を受けました。イスラエルの民は最後まで抵抗しましたが、ついに城は陥落して、エルサレムは完全に破壊されてしまいました。

「石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」と言われたとおり（マタイ 24:2）、ローマの兵士たちは、聖殿の石までもすべて散らしてしまいました。歴史の記録によると、このエルサレム陥落の過程で 100 万人以上のユダヤ人が殺され、その中には十字架につけられた捕虜も多かったそうです。戦争で生き残った人々も、東西南北にちりぢりになってしまい、以後、ユダヤ人はあちこちに散って生活しながら、異邦人から多くの迫害を受けなければなりませんでした。

二千年近く受けてきた苦しみの中でも、ユダヤ人が経験した最も惨めな出来事は、第二次世界大戦の時のナチス政権による虐殺です。短い期間に 600 万人以上の人々が、ただユダヤ人だという理由だけで殺されました。しかも裸のままだったのです。

ふつうは、死刑囚を処刑する時もきれいな服に着替えさせるはずなのに、彼らはみな同じように、着ていた服まで脱がされて殺されたのですから、不思議なことです。これは、ユダヤ人たちが自分たちの王として来られたイエス様を殺したので、その子孫に臨んだ呪いの一つだったのです。

イエス様を直接処刑したのはローマの兵士たちでしたが、イエス様の処刑を求めたのはユダヤ人たちでした。当時、ユダヤはローマに支配されていたので、イエス様を処刑するためには、ローマから派遣された総督の許可がなければなりません。ユダヤの総督ピラトは、イエス様が無罪だとわかったので、イエス様に死刑を言い渡そうとしませんでした。それでもユダヤ人たちが死刑を要求し続けると、ピラトは「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」と言いました（マタイ 27:24）。

つまり、死刑の判決は下すけれど、罪のない人を殺した罪の報いはイスラエルの民に返すという意味です。これに対して<マタイの福音書 27:25>に、このことばを聞いたユダヤ人たちが「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」と言ったと書かれています。それで、彼らの世代と彼らの後の世代に血を流すことがあったことがわかります。「私たちや子どもたちの上にかかってもいい

い。」と言ったとおり、ローマのティトス将軍によってエルサレムが陥落して、100万人以上が殺され、また、子孫にも血を流す歴史が続いたことが見られます。

<箴言 18:21>に「死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べる。」とあります。ユダヤ人たちもやはり、自分たちが言ったとおりに、報いを受けるようになりました。第二次世界大戦当時、大量虐殺されたとき、不思議なことに裸で殺されたのは、イエス様を殺した方法そのままだったという報いを受けたのです。ユダヤ人たちは「私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」と言ったように、長い年月、苦難の歴史を背負ってきました。イエス様の着物を四つにちぎった出来事は、イスラエルの苦難の歴史のしるしだったのです。

3) イエス様の下着についての摂理

次に、イエス様の下着は、縫い目なしのもの、つまり、布を縫い合わせて作ったものでなく、上から全部一つに織ったものだった、と書かれています。ここで「下着」とは、人の心を意味します。イスラエルの王であるイエス様の下着は、イスラエルの子孫たちの心を意味して、神様への彼らの信仰を表しています。

神の民、イスラエルの先祖はヤコブです。神様はヤコブの名前をイスラエルに変えて、彼の十二人の息子たちから、イスラエルの十二部族が生まれるようになさいました。神様は信仰の父であるアブラハムの子孫の中でも、ヤコブの心が良いのをご覧になり、ヤコブによって神の選民が出るようにされたのです。イスラエルの民は、長い間、ほかの民族と結婚しないで単一民族を守り、唯一の神様だけに仕えてきました。

ところが、ソロモン王の子レハブアムの時にイスラエルに内紛が起きて、南ユダと北イスラエルに分裂してしまいました。それ以来、北イスラエルは異邦人と結婚して、単一民族としての純粋性を失いました。南ユダだけがまことのイスラエルの子孫として、異邦人と混ざらない単一民族として残りました。それで今では、イスラエルの子孫をユダの人、すなわち「ユダヤ人」と呼ぶようになったのです。イエス様の下着が上から全部一つに織ってあったように、ユダヤ人たちは先祖のヤコブからずっと純粋な単一民族としてつながってきました。

また、ローマの兵士たちはイエス様の下着を破りませんでした。上から全部一つに織った布を破ると、布がほつれて何の役にも立たないので、くじを引いてひ

とりが持って行きました。下着を破らなかつたのは、靈的に、ユダヤ人たちの神様への心は、決して人が分けたり、なくしたりすることはできないという意味です。ローマはイスラエルという国は滅ぼしましたが、イスラエルの民の信仰まではなくせなかつたのです。

エルサレムの陥落以後、世界中に離散したユダヤ人たちは、あれほど長い間苦しめられながらも、自分たちのアイデンティティーを失いませんでした。最後まで自分たちの民族と信仰を固く守り、ついに 1948 年 5 月 14 日、先祖の地へ帰り、独立国家を打ち立てたのです。これは、聖書の<エゼキエル書 38:8-12>の預言がそのまま成就されたということです。ここには終わりの年に、世界の国々から民がイスラエルの地へ戻り、その国が立ち直ることが預言されています。

世界のどの民族が、国の形がなくなって二千年以上、しかもひどく迫害されて苦しめられながら、その固有の民族性と信仰が守れるでしょうか？ また、滅ぼされてから二千年以上経って、その国が立ち直れる民族がほかにあるでしょうか？ これは常識では不可能なことです。先祖のヤコブから譲り受けたユダヤ人たちの心と信仰がそれほど堅固だったので、これらのことが可能になり、上から全部一つに織ったイエス様の下着がそのまま保たれたことが、まさにこのような歴史をあらかじめ告げてくれるのです。

<マタイの福音書 24:32-34>に「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。」と言われたイエス様のことばがあります。

ここで「いちじくの木」とは、靈的にイスラエルを意味します。冬には死んだようだったいちじくの木が芽吹くと、近づいてくる夏が感じられるように、滅ぼされたイスラエルが再び立ち直る日が来ると、その時代が過ぎ去る前に、主の日が近づいて来るということです。エルサレムの陥落や、ユダヤ人たちの苦難、イスラエルの滅亡と再建など、すべてのことは聖書に書かれたそのままに成就したのです。

第4章

十字架上の七言

臨終が近づくと、人々は過ぎ去った日々を顧みながら、自分の人生を結論づけるような遺言を残します。最近、ニュースを見ると、本当に心痛む事件と事故がたくさんあります。特にテロやさまざまな大事故は、一度に多くの人々の命を奪ったりします。ところで、このように犠牲になった人々が、最後の瞬間に携帯電話で家族と話をしたり、メッセージを送ったりして、その内容が報道されることがあります。

このように自分の命が危うい状況で、愛する人々に残す最後の言葉は、たいてい「もっとよくしてあげられなくてすまなかった」とか「愛している」という告白です。このように、最後の瞬間に残す愛の告白にはとても大きな力があり、聞く人の心にしみるほど深く刻まれます。

イエス様は頭と顔、全身が血に染まり、手と足に太い釘を打ち込まれたままつるされて、六時間もすさまじい苦しみにあわれました。イエス様も、十字架を負ってついに救いの道を完成する時点で、ちょうど遺言のような七つのことばを残されました。

このような苦しみの中で、命が尽きる最後の瞬間までも、私たちに何としてでもいのちを与えようと、ひと言ひと言、遺言を残されたのです。このように、イエス様が十字架につけられた時から死なれる瞬間までに残された七つのことばを「十字架上の七言」と言います。

イエス様のすべての苦しみにそれぞれ摂理があったように、イエス様が残された最後の七つのことばもまた、とても重要な霊的な意味を含んでいます。

1. 第一言：彼らをお赦しください。

十字架上の七言のうち、最初のことばは<ルカの福音書 23:33-34>にあります。「『どくろ』と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわから

ないのです。』彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」

イエス様が惨めな十字架の刑罰にあわれたのは、私たちの罪のためです。罪人として刑罰を受けるべき人類の代わりに、イエス様がすべての苦しみを受けてくださったのです。ところが、こういう事実を知らない群衆は、まるでイエス様が凶悪な犯罪人であるかのようにあざけり、さげすみました。ローマの兵士たちもまた、罪人を扱うようにイエス様を乱暴に引っ張って行って、残忍に十字架につけました。

しかし、イエス様は彼らを恨んだり呪われたりされたものではありません。むしろ「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と、彼らのためにとりなしの祈りをささげられたのです。その時のイエス様の祈りは、その場でイエス様を釘づけてあざける人々のためだけのものではありません。闇の中にとどまっているすべての人類のための祈りであり、今でも主の御名をさげすんで迫害する、すべての人々のためにささげられた祈りでした。

このようなイエス様の愛の祈りのゆえに、主を知らなかった私たちが赦されました。このように私たちが赦して、愛をもって祈られたイエス様は、主を信じている私たちも、すべての人を赦すように願われます。訳もなく迫害されたり、損をしたりしても、悪をもって立ち向かったり、わだかまりを持ったりするのではなく、ただ善で対するように願われます。

<ヨハネの福音書 3:20>に「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」とあります。このみことばのように、世の闇の中で生きていく人々は、光の中を歩む人々を嫌います。その光により、自分たちの悪が明らかにされることがいやで、それによって心が刺されることがいやだからです。それで、主を信じる人が主日を完全に守ろうとする時や、不義と妥協しようとしないうちに、迫害する人々がいるのです。

<マタイの福音書 10:22>にも「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」とあります。主の弟子たちが主の御名のために世から憎まれることを言われているのです。神様の敵、悪魔・サタンは、福音が世に伝えられて、人々が救われることを嫌うので、伝道する者を迫害するように悪い人たちを操ります。聖徒たちが信仰を失って落胆するように、世の人々を通して苦しみをもたらしたりします。

世の人々は、自分を困らせて悪で立ち向かう人々を憎み、同じように悪をもって対抗します。しかし、神様は、私たちがすべての人を赦して愛するように願われます。イエス様はすべての罪人たちを愛して、ご自分を釘づけた者までも愛されたので、彼らのために命を渡してくださいました。<マタイの福音書 5:44-45>に「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」とあります。

神の御子イエス様が敵までも愛して命を与えられたように、私たちが敵を愛して、迫害する人々のために祈るとき、イエス様のように神の子どもとして認められる、というみことばです。憎しみと争いを引き起こす敵である悪魔・サタンの奴隷でなく、愛と憐れみの神の子どもとして認められます。

ところで、ひょっとして敵でもないのに隣人や兄弟を憎んだことはないでしょうか？ 「あの人は嫌い、相手にしたくない」と思ったことはないでしょうか？あるいは「私を苦しめているあの人が、良くないことにでもあったらいいのに」と、はなはだしく悪いことを考えたことはありませんか？

もし、そういう心があったなら、徹底的に悔い改めなければなりません。「主の祈り」にも「我らに罪を犯す者を、我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」とあります。自分は兄弟が赦せなくて、愛せないのに、どうして「父なる神様、私の罪をお赦してください。私を愛してください」と祈れるのでしょうか？

救い主を十字架につけてあざける罪人たちまでも愛されたイエス様を見習い、私たちが兄弟を愛して、敵までも赦して愛さなければなりません。「父よ、彼らを赦してください。彼らも主の愛で変えられるように祝福して、救われるようにしてください」と祈らなければなりません。

2. 第二言：あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。

二番目のことばは<ルカの福音書 23:42-43>に出て来ます。「そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。』イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』」と書かれています。

イエス様が十字架につけられたとき、イエス様の左右にはふたりの強盗がやはり十字架刑を受けていました。そのうちのひとりはいエス様に向かって、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言いました。イエス様が本当に救い主ならば、イエス様ご自身はもちろん、つけられた強盗たちも救ってみろ、とあざけているのです。

その時、もうひとりのほうが彼をたしなめて言いました。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことへの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」つまり、自分たちは強盗であり、犯罪人であるから、当然受けるべき刑罰を受けているが、イエス様には罪がないと言っているのです。そして、イエス様に「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」と願います。

すると、イエス様はその人の信仰を見て、「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と約束してくださいました。この強盗は死ぬ直前、最後の瞬間であっても、イエス様を自分の救い主として受け入れたので、救いが約束されました。

イエス様のこのことばの中には、多くの霊的な意味が含まれています。

1) パラダイスとさまざまに分けられた天国

まず、天国の「パラダイス」について教えてください。聖書には天国についていろいろと記されています。<コリント人への手紙第二 12:2>には、使徒パウロが自分の見た天国について、「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に 肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。 第三の天にまで引き上げられました。」と書きました。そして、続く<4 節>には「パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。」とあります。

<ネヘミヤ書 9:6>をはじめとして、聖書のところどころに「天と、天の天」「天の天」などの表現が出て来るので、さまざまな天があることがわかります。私たちの目に見える肉の天（つまり空）だけがあるのではなく、霊の世界の天があります。使徒パウロが見た「第三の天」とは、天国がある空間であり、その中でも

特に「パラダイス」という場所のことを言っているのです。

また、<ヨハネの黙示録 21:10-11>には「そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。」とあります。神様の御座のある「新しいエルサレム」は、天国の中でも特に聖なる栄光の都だと説明しています。

こういうみことばを見ると、天国の中でも「パラダイス」や「新しいエルサレム」などに場所が分けられていることがわかります。

ある人々は「パラダイス」や「新しいエルサレム」はどちらも同じように天国を指すと言いますが、そうではありません。天国という大きい空間の中に、場所が段階別に分けられていて、その中に「パラダイス」もあり、「新しいエルサレム」もあるのです。同じ国に住んでいても、首都に住んでいる人がいれば、少し離れた地方に住んでいる人もいますし、とても遠い山間の僻地に住んでいる人もいます。このように天国も、各人がとどまる場所がいろいろに分類されています。

たとえば、<ヨハネの黙示録>にある「新しいエルサレム」は、天国でも最も上の段階の天国です。ここには主のかたちに似せられて、すべての罪と悪を完全に脱ぎ捨てて、全家を通じて忠実な者だった人々が入れます。たとえば、モーセやアブラハム、エリヤ、使徒パウロ、ペテロ、こうした人々が「新しいエルサレム」にとどまります。彼らは傷もどんなしみもなく、悪はどんな悪も避けて、また、神様をこの上なく愛して信じ、全家を通じて忠実だった人々です。このように主に似せられた、父なる神様に似せられた人々が入る所なので、その家はすべてが黄金と宝石で建てられているのです。

<ルカの福音書 23 章>に出て来る強盗の場合は、死ぬ直前に主を受け入れました。ですから、心の罪と悪を捨てる時間もなく、主のために忠実だったこともなく、まるで生まれたばかりの赤ちゃんのように、ただ救いの資格をкаろうじて得ただけです。信仰でささげたことも、行なったこともないので、天国で受ける報いもありません。こういう人々は、イエス様が言われた「パラダイス」に行きます。パラダイスは天国でも最も低い場所です。

「パラダイス」と「新しいエルサレム」の間にも、天国はさまざまな段階に分

けられていて、各人の心が聖められた程度により、また、信仰と忠実さにより、とどまる場所が違います。それなら、天国はなぜこのように分類されているのでしょうか？ これは、公義にふさわしいからです。種を蒔けばその刈り取りもすることになるのが、神様の公義であり、人の行ないに応じて報いるのが神様の公義です。

天国で永遠に住む場所も、人がこの地上で行なったことによって変わります。すなわち、この地上で私たちがどれくらい罪を捨てて、どれくらい聖なる主のかたちに似せられたのかによって、天国の場所が変わるのです。また、それぞれの場所で、その中にいる人々の栄光が全く違い、報いと幸せと権勢が全然違います。<コリント人への手紙第一 15:41-42>に「太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、」とあるとおりです。将来、主が再び来られて、死者たちがよみがえるとき、おのおのの栄光がすべて違うということを説明しています。

本当に信仰のある人ならば、「適当に生きて救われればよい」と言うのでなく、何としてでももっとすばらしい天国に入ることを慕い求めなければなりません。<マタイの福音書 11:12>に「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」とあります。ここで「天国を激しく攻めて奪い取る」とは、私たちが敵である悪魔と戦い、罪を捨てて主に似せられていくほど、もっとすばらしい天国に入る資格を得ることを意味します。

もし、そねみ、ねたみ、さばき、罪に定めること、憎しみ、裏切り、ずるがしこさ、欲、憤り、姦淫、こういう罪をそのまま持って天国に入ったとしたら、天国がどうなるのでしょうか？ そうなると天国が汚染されて、もう聖なる幸せな場所とは言えないでしょう。この地上と同じように、互いに憎んで苦しみを与えて、罪と悪の中に生きていくはずだからです。

天国には罪と悪を持って行くことができないし、善に、霊に耕したものだけを持って入ります。それで、霊に耕したレベルが似た人どうし、同じ場所に集まって生きるようになります。この地上でも、子どもは子どもどうし、青年は青年どうしで過ごすほうが楽しいです。同じ年頃の友だちというほうが幸せです。おとなも、子どもたちと話すよりは、レベルの合うおとなどうしで話すほうが楽しい

でしょう。

このように天国も、聖められて主に似せられた程度により、似たレベルの信仰を持った人々が交わって生きることで、よりいっそう安らかで幸せになれるのです。

2) 主が「きょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われた意味

イエス様は強盗に「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われました。このことばは、イエス様もパラダイスに行かれるという意味ではありません。天国で主がとどまられる場所は、パラダイスにではなく、最も美しい新しいエルサレムにあります。しかし、主は天国全体の主人であり、すべての天国におられる方です。パラダイスにも、新しいエルサレムにも、どこにもおられて、天国のすべてのことをご存じであり、治めておられるのです。

また、ここで「きょう」ということばも、十字架につけられたまさにその日、イエス様がパラダイスに行かれるという意味ではありません。強盗が信仰で救われて神の子どもとされたので、まさにその時点からは、彼がどこにいても主がともにおられる、という意味です。私たちも、主を受け入れて救われたその日から、主が私たちを常に覚えておられます。どこへ行こうが、何を見て何をしようが、主は知っておられ、私たちのために祈っておられます。また、私たちを守る天使を遣わし、一緒にいるようになさいます。

それでは、イエス様が十字架で死なれたその日、つまり、金曜日、イエス様はどこへ行かれたのでしょうか？

これについて<マタイの福音書 12:40>に「人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」とあり、<エペソ人への手紙 4:9>には、「彼がまず地の低い所に下られた」と説明しています。また、<ペテロの手紙第一 3:19>に「その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。」とあります。イエス様は十字架で死なれた後に、パラダイスではなく、捕われの霊たちのところに行つて福音を宣べ伝えられたということです。ここで「捕われの霊たち」とは、イエス様が十字架を負って救い主になられる前に死んだ人々の中で、救われる人たちを意味します。

3) 良心さばき

私たちが救われるためには、ただイエス・キリストを信じることで、罪の赦しを受けなければなりません。人が、自分なりにはいくら正しく生きたといっても、皆が原罪を持って生まれた罪人であり、律法どおりには行なえなくて、自ら罪を犯してしまいます。イエス・キリストの尊い血だけが、私たちをすべての罪からきよめて、救ってくださるのです。

それなら、イエス様がこの地上に来られる前に、救い主であるイエス・キリストを知らずに死んだ人は、すべて救われずに地獄に行ったのでしょうか？ また、イエス様が来られた後も、福音を一度も聞かなくて信じなかった人は、すべて地獄に行かなければならないのでしょうか？ そうではありません。神様は愛と公義の神様であり、すべての人が救いに至ることを望んでおられます。

したがって、主が来られる以前の人々や、福音が聞けなかった人々のためにも、イエス・キリストによって救われる道を備えておられました。福音が全く聞けなかった人々の中にも、正しい心で創造主を認めて、正しく生きた場合があります。正しい良心で来世、すなわち、天国と地獄があることを認めて、神様の律法は聞かなかったけれど、自分なりに良心に従って正しく生きた人々です。

<ローマ人への手紙2:14-15>に「 律法を持たない異邦人が、生まれつきそのまま律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。 」とあります。

人には誰にでも良心があって、心の正しい人は、神様を知らなかったとしても、良心の声に従って生きていきます。悪に染まらないように努めて、自分なりに正しく生きるために努力するのです。このように正しい心を持った人は、自分の欲を追って、むなしい偶像や悪霊を拝みません。漠然とではあっても、ひとりの創造主を認めて、人の道理を追って生きていきます。

もし、こういう人が福音を聞いたら、当然イエス・キリストを主として受け入れたでしょう。一方、いくら正しく見えても、福音を聞いても信じない人は、その良心が悪くて救われない人なのです。人はほかの人の良心がはっきりとわかり

ませんが、全知全能の神様はすべての人の心と行ないをご存じです。したがって、イエス様が来られる以前の人々の中でも、もし福音を聞いたなら信じるような良心を見分けることができになるのです。

これがつまり、良心さばきです。神様はこのような良心さばきにより、救われる人々の霊と魂を、イエス様が救い主になられる時まで「上のよみ」にとどまって安息するようになさいました。主が来られる前の旧約時代に、神様のみことばどおり生きて救われた魂たちも、「上のよみ」にとどまっています。

<ルカの福音書 16 章>に金持ちと貧乏人ラザロのたとえがあります。神様のみことばのとおり生きなかつた金持ちは、死んでハデスの火の中で苦しんでいるけれど、神様を敬っていたラザロは、アブラハムのふところであらいでいるのです。まだイエス様が救い主になられる前なので、天国に行って主のふところにいだかれるのではなく、信仰の父アブラハムのふところにいだかれて安息しているのです。その時、金持ちが苦しんでいる所は「下のよみ」で、ラザロが安息している所は「上のよみ」です。「下のよみ」は闇の領域で、地獄の一部です。一方、「上のよみ」は、天国と同じように光に属した領域です。

イエス様は十字架で死なれた後、「捕われの霊たちのところ」すなわち「上のよみ」の人々を訪ねて行かれました。<使徒の働き 4:12>に「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」とあるように、彼らにも救いの道になられたイエス・キリストを宣べ伝えなければなりません。まさにその時、「上のよみ」にいた人々もはじめて、イエス様を救い主として受け入れて、すべての罪が赦されて救われたのです。

3. 第三言：女の方。そこに、あなたの息子がいます。 そこに、あなたの母がいます。

十架上の七言の三番目のことばは、<ヨハネの福音書 19:26-27>にあります。「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に『女の方。そこに、あなたの息子がいます。』と言われた。それからその弟子に『そこに、あなたの母がいます。』と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。」ここで「そこに、あなたの息子がいます。」と言われたとき、「息子」とは、イエ

ス様ご自身ではなく、そばに立っていた弟子ヨハネのことで、マリヤにヨハネを息子のように思うように頼まれたということです。そして、ヨハネにはマリヤについて、「あなたの母がいます。」と言われました。ヨハネはその時から、マリヤを自分の家に引き取って、母のように仕えました。

1) おとめマリヤを「女の方」と呼ばれた理由

ここでまず私たちが覚えなければならないことは、イエス様がマリヤを「お母さん」と言われたのではなく、「女の方」と呼ばれたということです。<26 節>に「母と、そばに立っている愛する弟子とを見て」とあるのは、イエス様がおとめマリヤを「母」と呼ばれたという意味ではありません。これは弟子のヨハネの立場から記したものです。聖書には、イエス様がおとめマリヤを「お母さん」と呼ばれた記述がありません。

<ヨハネの福音書 2 章>で、水でぶどう酒を作られた時のことです。おとめマリヤがイエス様に「ぶどう酒がありません。」と言いました。その時、イエス様は「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」と言われました。マリヤに向かって「女の方」と呼ばれたのです。

これは、おとめマリヤが決してイエス様の母になれないからです。イエス様はもとは父なる神様の御姿で、三位一体の神様のおひとりであられます。創造主の神様には母親がありえません。<出エジプト記 3:14>で「わたしは、『わたしはある。』という者である。」と仰せられています。誰かが神様を生んだのでもなく、神様を作り出したのでもないのです。神様は永遠の昔から世々限りなく、「わたしはある。」と仰せられる方です。したがって、神の御姿であられるイエス様が、被造物であるおとめマリヤを「お母さん」と呼ぶことはできないのです。

遺伝的にも、おとめマリヤはイエス様の母になれません。人が母の胎内に宿る時は、父の精子と母の卵子が結びついて宿ります。その精子と卵子の中に、両親のすべての気質が集約されています。ところが、イエス様の場合は、マリヤがイエス様を産んだとしても、マリヤの卵子によってイエス様が宿られたではありません。イエス様は、マリヤのからだを借りて生まれただけで、聖霊の力によって宿られました。たとえば、赤ちゃんが保育器の中で育ったからといって、保育器が赤ちゃんの親になることはできません。同じように、マリヤが神の御子、イエス様の母になることはできません。

神様は、神の子どもたちが「わたしはある。」という方、御父、御子、御霊の三

位一体の神様だけに仕えて拜むように願われます。それで、<出エジプト記 20:3-5 前半節>に「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。」と仰せられるのです。「私はある。」と仰せられる神様のほかに、どんな被造物も、その形を造り、拜んで仕えてはならないのです。

次に、イエス様がおとめマリヤに「そこに、あなたの息子がいます。」と言われたのは、マリヤを慰めておられることばです。愛するイエス様が苦しんでおられるのを見ると、マリヤはまるで剣で心が刺し貫かれるような痛みを受けていました。細やかなイエス様は、このようなマリヤを覚えられたので、最後の瞬間までマリヤを慰め、弟子のヨハネを実の息子のように頼るようにと言われたのです。

2) 霊の家族

そして、ヨハネには「そこに、あなたの母がいます。」と言われ、母のようにマリヤに仕えるように頼られました。マリヤはおとめとしてイエス様を生んだ後、夫であるヨセフと一緒に、子どもたちを産みました。しかし、イエス様はマリヤの子どもたちでなく、弟子ヨハネに「あなたの母がいます。」と頼られました。

ここで私たちは「私たちのまことの所属がどこなのか」を悟らなければなりません。<ピリピ人への手紙 3:20>に「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」とあります。

このように、救われた私たちは、国籍が天にある、天国の民です。人が主を受け入れた瞬間、まるで赤ちゃんが生まれた時に出生届けを出すように、その名前が天国のいのちの書に記されます。私たちが聖霊を受けるその時に、誰が何年、何月、何日、何時に主を受け入れて、聖霊を受けて神様の息子、娘になったと、いのちの書に名前が記されます。いのちの書に記された天国の民の父は神様であり、天国の民のまことの兄弟、姉妹は、主を信じる神の子どもたちです。

それでは、肉の両親が私たちを生んだのは確かなのに、なぜ神様を私たちの父と言うのでしょうか？ これは、私たちの命の元が神様から来たからです。私た

ちのからだを生んだのは肉の両親ですが、もともと両親の精子と卵子も、神様が下さったものです。お父さんのお父さん、そのお父さん、このようにさかのぼって行くなら、結局、私たちの先祖はアダムです。人類の先祖であるアダムの命は、神様から来しました。神様がご自身でアダムのからだをお造りになり、その中にいのちの息を吹き込まれました。ですから、もともと私たちの命は神様から来たものだという事です。

また、人が結婚して子どもを生むといっても、神様がお許しにならないと、命を宿すことはできません。また、胎に宿った子どもに霊と魂を与えることも、神様がつかさどられます。(今日、科学が発達して、遺伝子工学でクローン人間を作る技術に関して多くの論議があります。しかし、今後いくら遺伝子工学が発達しても、人の霊と魂を作り出すことは、永遠にできません。仮に、人の形、つまり、からだはコピーできるとしても、神様がその中に霊を与えられないから、そのコピーされた形は動物と変わらず、本当の人とは言えないのです。)また、みごもった子どもの性別や性質、容貌も、両親の思いのままにはできません。ただおひとり、神様だけが人の命をつかさどることがおできになります。人に霊と魂を与えられる方も神様で、生死禍福をつかさどる方も神様で、このような神様がまさに私たちの父であられるのです。

ところが、神様を信じないで、世の欲望に従って生きていく人々は、神様を「お父さま」と呼ぶことはできません。聖書には、こういう人々について「あなたがたの父は悪魔である」と書いてあります。<ヨハネの福音書 8:44>に「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」とあります。

世の人々は、悪魔が惑わすままに罪を犯して生き、世の終わりの日には、地獄の火に投げ込まれます。しかし、神様を「お父さま」と呼ぶ聖徒たちは、永遠に天国で生きます。ですから、この地上では互いに血縁関係で結ばれた家族だからといって、天国でも永遠に一緒に生きられるわけではありません。この世の人生を終えれば、地獄と天国に分けられて、その行き先が永遠に違うからです。

<マタイの福音書 12:48-50>にも「しかし、イエスはそう言っている人に答えて

言われた。『わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか。』それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。『見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。』と言われています。主を信じる聖徒であってこそ、将来、天国で永遠に一緒に生きようになる、まことの家族であるということを教えてくださっています。

かといって、これは肉の両親、兄弟を愛してはいけないという意味ではありません。肉の家族は当然愛して仕えますが、ただし、この愛は神様の前にふさわしい霊の愛でなければならないということです。聖書では、主にあって両親に仕え、主にあって子どもを育てなさいと言われています。もし、家族が神様をそして、神様のみこころに逆らわせるようにするなら、こういう時は、家族に合わせる事がまことの愛ではありません。

たとえば、親が「今度の主日は家の手伝いをしなければならないから、教会に行ってはいけない」と言うなら、そのまま従えるでしょうか？ また、肉の兄弟が罪を犯しながら「一緒に罪を犯して、放蕩して楽しもう」と言えば、兄弟を喜ばせるために従うことができるでしょうか？ これは愛ではなく、一緒に死の道に向かうことです。

それで、<マタイの福音書 10:37>に「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と言われたのです。肉の両親、兄弟も愛すべきですが、必ず真理にあって愛して仕えなければなりません。また、肉の両親と家族を愛するなら、何よりも彼らも救われて、一緒に天国に行けるように伝道しなければなりません。それで、永遠の天国で一緒に生きられる、まことの家族にならなければなりません。

十架上の七言の三番目のことばには、このように悲しむマリヤの心を慰めようとする、イエス様の愛が含まれています。また、救われた私たちの所属は天国にあり、私たちのまことの家族は、主にあっての兄弟、姉妹であることを教えてくださるのです。

4. 第四言：エリ、エリ、レマ、サバクタニ。

次に、十架上の七言の四番目のことばは<マタイの福音書 27:46>にあります。「三

時ごろ、イエスは大声で、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』と叫ばれた。これは、『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。』という意味である。」とあります。その時が「三時ごろ」と書かれています。

<マルコの福音書 15:25>に「彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九時であった。」とあるので、イエス様は午前九時に十字架につけられました。ですから、三時ごろになったなら、苛酷な苦しみの中で、血を流しながら六時間もつるされておられた、ということです。

ある人は「どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と言われた意味を「イエス様が激しい苦しみのため、神様を恨んでおられるようだ」と誤解したりします。しかし、イエス様は、神様を恨んだり、苦しみのために嘆いたりされたのでは決してありません。

イエス様は、この地上に来られる前からすでに今後起こることをみなご存じで、十字架の苦しみについても知っておられました。それでも御父の摂理を成し遂げるために、喜んで十字架の道を選ばれました。そのようなイエス様が、しかもすべての苦しみが終わる時が来ているのに、その時になって神様を恨まれるはずがありません。このことばには、恨みや嘆きでなく、重要な霊的な意味が含まれているのです。

1) 大声で叫ばれたイエス様

まず、この時、イエス様は「大声で叫ばれた。」と書かれています。イエス様は、このように大声を出すほどの力は残っておられませんでした。夜通し連れ回されて尋問を受けて、激しいむち打ちにあわれました。何度も倒れながら、重い十字架を背負ってゴルゴタの丘を上られました。こういう状態で十字架に釘づけられて、六時間血を流しながらつるされておられます。ですから小さい声で話することも難しいのに、力を尽くして大声で叫ばれているのです。

これは、すべての人々がこのことばを聞いて悟らなければならないからです。なぜイエス様が神様に捨てられなければならないのか、なぜ残酷な十字架につけられねばならなかったのか、すべての人々が聞いて悟るように願われたのです。今、イエス様は、呪われた十字架にかけられるまで、神様から徹底的に捨てられた状態です。その理由は何でしょうか？ まさに、罪人となったすべての人類の罪を贖われるためです。

私たちがみな、律法の呪いによって神様から捨てられる運命であったのに、イエス様はその呪いを代わりに受けて、神様から捨てられたのです。地獄に行くし

かなかつた私たちを救つて天国に導くために、イエス様が代わりに死なれたのです。こういう意味をすべての人々が悟るように願われたので、イエス様は全力を尽くして叫んでおられるのです。

2) 「父よ」と呼ばないで「わが神」と呼ばれた理由

人が神様を信じて祈り始めると、初めは「神様」と呼びます。そして、信仰が大きくなるほど、次第に「父なる神様」と呼びます。神様が父であることが心から信じられるために、自然に「父」という表現を使うようになります。

さらに深く神様を愛して交わる人々は、「神様」もつけないで、ただ「お父さま」あるいは「アバ、父」と表現します。あまりにも親しくて愛する父なので、あえて「神様」という言葉もつけないのです。それほど神様との間に、個人的で親密な関係が作られたということです。神様を愛して深い交わりを持つ神の子どもたちは、祈るとき、「父よ」と親しみを込めて呼ぶようになります。

たとえば、大企業の会長の息子が系列会社の社長だとしましょう。すると、社長である息子が会長を呼ぶとき、公の場では「会長」と言うけれど、家庭では「お父さん」と呼びます。もし家庭でも「会長」と呼んだら、この父子の関係は何かぎこちないでしょう。

ただし、多くの人が集まった場で、公式に代表祈禱をする時などは、信仰が大きい人や小さい人、いろいろな人を代表するので、「神様」または「父なる神様」と呼ぶほうが適切です。

聖書を見ると、イエス様は神様と呼ばれるとき、常に親しく「父よ」と呼ばれました。イエス様は神の御子として常に深い愛を分かち合い、祈る時もいつも「わが父よ」と呼ばれました。

ところが、<マタイの福音書 27:46>では唯一「わが神」と呼んでおられるのです。その理由は何でしょうか？ これは、呪われた罪人の立場で神様と呼ばれるからです。イエス様は今、人類のすべての呪いを代わりに負って、罪人の身として十字架につけられました。

聖なる神様に向かって、罪人があえて「父よ」と呼ぶことはできません。光の中を歩まない時、罪の中に生きている時は、神様を父と呼ぶことはできません。

さらには、信仰があるという人が死の道に向かう肉の行ないをした時は、神様を父と呼んではいけないのです。ですから、今イエス様も、罪人たちの代わりに捨てられて十字架につけられた、ということと言われる場面では、「父」と呼ばずに「神」と呼ばれました。

私たちも同じです。主を信じていると言いながら、相変わらず罪の中に生きている時は、神の子どもとして堂々と祈ることができません。神様のみこころどおりに生きないで、神様の敵である悪魔・サタンが惑わすままに生きていながら、神様を大胆に「父よ」と呼ぶことはできないのです。神様も「あなたはまことに私の子どもだ」と認められないのです。

イエス様は何の罪もない神の御子でありながら、罪人たちの代わりに捨てられて、そのために「父よ」と呼ぶこともできないでおられます。このように、イエス様が天のすべての栄光を捨てて、罪人のように捨てられた理由を悟らせようと、イエス様は力を尽くして大声で語っておられます。「神様がなぜわたしをお捨てになったのかわかるか？」「わたしがこのように捨てられたのは、あなたがたを愛して、あなたがたの罪を贖うためだ」と、すべての人に知らせたいと願われたのです。

このように大声で叫ばれたもう一つの理由は、神様が罪人たちのためにひとり子まで渡されたのに、相変わらず数多くの人々がこれを知らずに、世と友になり、死の道を歩んでいるからです。すべての人が、イエス様が十字架につけられた理由を悟り、救い主として受け入れて、いのちを得てほしいと願われるので、このように大声で叫んでおられるのです。

5. 第五言：わたしは渴く。

<ヨハネの福音書 19:28-29>に「この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、『わたしは渴く。』と言われた。そこには酸いぶどう酒のいっぱいはいった入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。」と書かれています。

人は血を大量に流すと、激しい渴きを感じます。しかもイエス様は、イスラエルの乾燥した気候の中、長い時間、熱い太陽の下で十字架につけられていました。

脱力状態で血を流し続けられたので、渴きがよりいっそう激しくなりました。

しかし、この時、イエス様が「私は渴く。」と言われたのは、単に肉的な渴きを訴えられたものではありません。このことばにも霊的な意味が含まれています。それは、主を信じている私たちが、イエス様が血で代価を払ってくださったその恵みに報いることで、その渴きを解消してほしい、と託されているのです。

それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか？

イエス様が血を注ぎ出された理由は、罪人となった人類を贖われるためです。したがって、「イエス様が血で代価を払ってくださった恵みに報いる」とは、まさに地獄へ向っている魂を救うことです。熱心に伝道して、多くの魂が主を受け入れて、信仰によって天国に行くようにすることです。

直接伝道するほかにも、魂の救いのために祈ることや、宣教のために献金することなども、間接的な魂の救いです。イエス様が「私は渴く。」と言われたのは、私たちに「魂の救いに努めるように」と託されたからです。

酸いぶどう酒を飲まれた理由

イエス様が「私は渴く。」と言われると、ある人が酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝につけて、それをイエス様の口もとに差し出しました。海綿は、綿やスポンジのように、液体を吸って含む性質があるので、酸いぶどう酒を含んだ海綿を口につけると、ぶどう酒を吸うことができます。

ところが、イエス様がこの酸いぶどう酒を口にしたのは、渴きを解消しようとされたためではありませんでした。旧約の預言どおり、酸いぶどう酒を味わわなければならないという霊的な意味があるので、受けられたのです。<詩篇 69:21>に「彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。」というみことばが、そのまま成就されたのです。

それでは、酸いぶどう酒を味わわれたことには、霊的にどんな意味があるのでしょうか？

これは、イエス様が酸いぶどう酒を飲まれたことによって、その代わりに私たちには新しいぶどう酒を飲ませられた、ということを表しています。酸いぶどう酒、すなわち、古くなり酸っぱくなったぶどう酒は、旧約の律法を意味し、新しいぶどう酒は、イエス様によって完成された新約の愛の律法を意味しています。

旧約の律法によると、罪人は必ず罪に伴う刑罰を受けなければならず、罪の赦しを受けるためには、罪を犯すたびに動物をほふり、血のいけにえをささげなければなりませんでした。

ところが、イエス様ご自身が罪のためのいけにえとなって、十字架で死なれたことによって、律法のすべての呪いから私たちを救い出してくださいました。つまり、私たちのために酸いぶどう酒を受けられたのです。私たちがこれを信じて、心から罪を悔い改めるなら、その信仰によって罪が赦されます。これが「新しいぶどう酒を飲む」ということです。このようなことを私たちに悟らせようと、イエス様は酸いぶどう酒を受けて、口につけられたのです。

6. 第六言：完了した。

十字架上の六番目のことばは、<ヨハネの福音書 19:30>に出て来ます。「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した。』と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。」とあります。「完了した。」ということばの意味は、人類の贖いの摂理をすべて成し遂げた、すなわち、愛で律法を全うした、という意味です。

「愛で律法を全うした」とはどういう意味でしょうか？ 律法によると、「罪から来る報酬は死」なので、すべての罪人たちが死の刑罰を受けて、地獄に行かなければなりません。また、神の民が罪を赦されるためには、罪を犯すたびに牛や羊をほふり、血のいけにえをささげなければなりませんでした。

しかし、イエス様が十字架で死なれたことによって、すべての律法の呪いを贖ってくださいました。これについて<ヘブル人への手紙 7:27>に「ほかの大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」と書かれています。

この贖いの過程は、人が想像できないほどの大きな愛によって全うされました。尊い神の御子が卑しい人となってこの地上に来られ、哀れな人々に天国の福音を伝えて、すべての病気とわずらいをいやしてくださいました。いくらでも悪い人々を滅ぼす権威がありながら、何の力もない弱い人のように、罪人の手に捕らえられて、むち打たれ、いばらの冠をかぶって、手足に釘を打たれるという、すべての苦しみを受けてくださいました。この途方もない愛と犠牲により、人類を支配

していた敵である悪魔・サタンの死の力が打ち砕かれて、私たちは信仰によって永遠のいのちを得て、天国に入れるようになりました。

それでは、私たちはどうすべきでしょうか？ イエス様が御父の摂理をすべて成し遂げて、王の王、主の主になられたのですから、私たちも、私たちに向けられた神のみこころをすべて行なわなければなりません。

私たちに向けられた神様のみこころとは何でしょうか？ まさに、私たちが完全に聖められることであり、完全に忠実な者となることです。御霊の九つの実、霊の愛、八つの幸いを心に耕して、「地の果てにまで、わたしの証人となりなさい。」と言われたとおり、熱心に魂を救う働きを完了しなければなりません。このような神様のみこころをすべて行なうと、主が神の御座の右に座られたように、私たちも、天国で新しいエルサレムにある神様の御座の近くに座るようになります。

何の報いも積まなかった強盗のように、やっとのことで悔い改めて、恥ずかしい救いだけ受けるのではなく、神様の御座の近くにとどまって、直接神様を拝見することができるのです。主が来られる前に、こまめに花嫁の備えを終えて、それぞれに与えられた使命をすべて果たし、再び来られる主をお迎えするとき、「私は完了しました」と言えなければなりません。

7. 第七言：わが霊を御手にゆだねます。

1) 大声で叫ばれる

最後の七番目のことばは<ルカの福音書 23:46>にあります。「イエスは大声で叫んで、言われた。『父よ。わが霊を御手にゆだねます。』こう言って、息を引き取られた。」十字架上の四番目のことばでは、イエス様が神様を「父よ」と呼ばれずに「わが神」と呼ばれました。これは、イエス様が罪人の立場で十字架を負われたことにより、神様の前に御顔を隠されたことを知らせるために、「わが神」と呼ばれたからです。ところが、今は贖いの働きを完了されたので、再び「父よ。」と呼んでおられます。

この時、「大声で叫んで、言われた。」と書かれています。これは先にも説明したように、イエス様が最後に残されることばが、人々によく聞こえなければならなかったためでした。また、ここで「大声で叫んで」とは、祈る時は、「神を呼んで、切に祈ること」が神様のみこころだからです。

<エレミヤ書 33:3>の「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」というみことばをはじめとして、旧約や新約に何度も、祈る時は切に神を呼んで祈らなければならぬと記されています。

弟子たちもいつも神を呼んで祈り、バルテマイという盲人のこじきイエス様の前に出て来る時も、大声でイエス様を呼びました。彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめましたが、バルテマイはますます叫び立てて、ついに答えを受けました。また、<使徒の働き 7:59>には、ステパノ執事が福音を伝えているとき、石を投げられて殉教する場面が出て来ます。「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』」つまり、石に打たれて死にかけていながらも、主を呼んで祈りました。

<ヨハネの福音書 11:43>には、イエス様が死んだラザロを生かされる時、「ラザロよ。出て来なさい。」と大声で叫ばれました。すでに死んで葬られて四日になり、臭くなっているはずなのに、主は大声で叫ばれました。周りの人々が主の近くにいたので、小さい声で言ってもいくらでもわかるけれど、主も神様のみことばに従って、神を呼んで切に祈るようにラザロに大声で叫ばれたのです。

また、イエス様がゲツセマネという所で祈られた時も、汗が血のしずくのように地に落ちたほど、切に祈られました。医学者たちは、人がとてつもない努力をすると、毛細血管が破裂して、汗と一緒に血が染み出ることがあるので、汗が血のしずくのようになることはありうると言います。黙想の祈りでこうなるはずがありません。しかもイスラエルの夜は寒いのです。そのように寒い時も、汗が流れるほど神を呼び、苦しみもだえて祈られたので、血のしずくのように汗が地に落ちたのです。

もちろん私たちが祈る時は、時と場所をわきまえて黙想の祈りをする時もありますが、いつもは神を呼び、心の底から出る祈りをささげなければなりません。イエス様が十字架につけられていても、神のみこころを私たちに明らかに教えてくださるために、そして、完全に神のみこころどおり行なわれるために、大声で神を呼んでおられるのです。

2) 人の霊と魂

次に、イエス様は「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」と、御父の前にご自身の霊と魂をゆだねられました。イエス様が十字架につけられて死なれると、その肉の生命は尽きて、霊と魂まで消えるものではありません。

霊と魂は父なる神様がお受けになります。人は目に見えるからだけで造られているのではなく、霊と魂とからだで構成されています。からだは霊と魂を入れる器にすぎず、からだがなくなっても、霊は永遠不滅のものであり、消滅することはありません。

先に述べたように、神様が土地のちりでアダムのからだを造られた後、神様のいのちの息を吹き込まれると、いのちの種、つまり、アダムの「霊」が生まれました。神様はアダムの霊の中に、霊の知識、すなわち、真理を満たしてくださいました。このようにいのちの種を真理の知識が包んでいる霊が、アダムの心でした。ですから、その時、アダムはただ「霊の生きた者」であり、「心」というものがなかったのです。心が霊そのものだからです。「魂」とは、頭脳の記憶装置とその中に含まれた記憶、そして、記憶したことを思い出して、考えて、活用する、すべての作用をまとめたものを言います。本来、アダムは霊が主人であり、魂とからだを動かしていました。霊が真理で満たされているので、霊がつかさどる魂は真理の思いだけをして、霊が支配するからだも真理に従って行っていました。

ところが、アダムが善悪の知識の木の実を取って食べて罪を犯したことにより、霊が死んでしまいました。「霊が死んだ」とは、神様との交わりが途絶えて、霊が活動できなくなったことです。神様との交わりができないので、これ以上真理の知識は与えられなくなりました。神様との交わりが途絶えれば、死んだということです。人の主人であった霊が死んで活動が止まると、人の魂が主人の役割をするようになり、からだを支配するようになりました。魂は敵である悪魔・サタンの働きを受けて、真理に逆らう知識を受け入れます。こうして心に真理に逆らうものが満たされるほど、もともと神様が植えつけられた真理は抜け出るようになりました。

柔和な心が出て行って憤りが入り、相手の益を求める心が消えて、自分の益を求める心が満ちていくようになりました。正直と真実が消えて、偽りとずるがしこさが入り、謙遜と仕えの代わりに、高ぶりと傲慢が入り込みました。すなわち、神様に属する性質のすべてが一つ一つ消えて、反対に真理に逆らうものが入って来たために、真理が消えるようになったのです。このように、心に満ちた真理に逆らう知識が、いのちの種を囲んで、活動できないようにふさいでいる状態を、

まさに「霊が死んだ」と言うのです。

しかし、事実は、霊が死んで活動をやめたとしても、人の霊が消えるのではありません。人の霊は、永遠不滅である神様のいのちの息が吹き込まれて造られたものなので、消えてなくなることはありません。からだは朽ちてなくなりますが、霊は永遠に存在するのです。

それでは、からだが死んだら、魂はどうなるのでしょうか？

脳があってはじめて、脳細胞で記憶したり考えたりします。動物は、からだは朽ちて脳の記憶装置がなくなると、魂も消えて、完全に無に帰ります。しかし、人は違います。人は魂が働くと、その働きが心に伝えられて、入力されます。それで、生きていた時の魂は消えるのでなく、霊の中に入力された魂の状態、言いかえれば、霊と魂が結びついている形で、永遠に存在するようになります。

人が福音を聞いてイエス・キリストを受け入れると、聖霊を受けます。聖霊を受けると、死んでいた霊がよみがえります。そして、再び神様と交わり、心に真理が入ります。心に真理が満たされるほど、真理に逆らうものを脱ぎ捨てることができます。心に真理が満たされると、魂の働きも真理の思いだけするようになり、行ないも真理だけになります。

それで肉の人、霊の人が完全に見分けられます。私たちが霊に入れば、目で見ること、聞くこと、話すことがただ真理です。目で見ても真理で見るようになり、聞いても真理で聞き、話をしても真理だけ話します。こうして霊が生き返って、完全に心が真理で満たされると、その人は「魂に幸いを得ている」と言います。

すなわち、霊が生きていて霊が活発に働くと、魂が霊に従うようになるので、魂が幸いを得ているというのです。<ヨハネの手紙第三 2 節>に、「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」とあるとおり、私たちの魂に幸いを得ていくほど、つまり、心が真理で満たされるほど、すべての点でも幸いを得て、健康である祝福を受けるようになります。

<ヨハネの福音書 3:5>に「イエスは答えられた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。』」とあります。このように、水と御霊によって生まれた人々、すなわち、霊がよみがえった人々は、寿命が尽きれば、その霊と魂が結びついて天国に

行きます。

しかし、霊が生き返らないで、真理で心を耕さなかった人は、天国に行けません。それで、このような人を受け入れるために備えられたものが、地獄です。罪の中に生きて寿命が尽きた人は、敵である悪魔とともに、永遠の地獄の火の中に閉じ込められるようになります。

世の人々はこういうことをよく知らなくても、本能的に死を恐れます。何としてでももっと長生きするために努力して、死ぬ瞬間は恐ろしくて真っ青になり、目をむいてからだをこわばらせて死ぬ姿も見られます。本当に悪いことをして生きた人間は、死ぬ時には目をかっと見開いて、本当に恐怖で真っ青になって死にます。そのように亡くなる姿を見た方はご存じでしょう。

しかし、救われたという確信がある人々は、死を恐れることがありません。死を恐れるなら、その人はまだ救いの確信がなく、今救われるのが難しい人です。<コリント人への手紙第二 5:8>に「私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。」とあるように、むしろ早くこの地の人生を終えて、主のふところにいだかれたいと願うのです。臨終を迎える時も、幸せそうに天国を望みながら、イエス様が言われたように、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」と告白します。

実際、信仰のある人は、最後の瞬間にとっても安らかに息を引き取ります。その心にすでに信仰と希望があるだけでなく、最後の瞬間には霊の目が開かれて、自分を連れに来た天使と、自分がこれから行く天国の光を見るからです。それで、臨終の直前になれば天国と地獄があることをはっきり知ようになります。このように、人の最後の姿だけ見ても、聖書がまことであり、本当に天国と地獄があることが信じられます。

3) 生死禍福は神である父に

イエス様はその霊を父の御手にゆだねる祈りをささげられたことは、イエス様がただ神様の摂理に従ってすべてを成し遂げられたことを証しています。生死禍福と人類の歴史のすべては、神様がかさどられます。イエス様がこの地上に来られたことも、十字架につけられて死なれてからよみがえることも、イエス様の心と計画によって成し遂げられたものではありません。

<ヨハネの福音書 4:34>に「イエスは彼らに言われた。『わたしを遣わした方の

みこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。』とあるように、イエス様はただ父なる神様の摂理に従われただけなのです。神様が摂理のうちに計画されて、イエス様の霊まで受けられるのです。

私たちが祈る時は、イエス・キリストの御名で祈ります。それは、神のひとり子イエス様が私たちの罪を贖われ、神様の前に罪人たちの仲介者となってくださったからです。しかし、結局、その祈りをお聞きになって成し遂げられる方は、天下万物と人間の生死禍福をつかさどられる、父なる神様なのです。

<マタイの福音書 10:29-31>に「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。」とあります。私たちがこういうみことばの霊的な意味を悟って、深く心に刻むなら、私たちのすべてを神様にゆだねることができます。

雀一羽も神様のお許しなしには地に落ちることがなく、私たちの頭の毛さえも神様が数えられていると言われたのですから、そのような神様に本当に信仰で頼るならば、私たちが健康でない理由がなく、答えられない理由がないのです。

病気や問題だけでなく、職場や事業の祝福も、働き人が神様の働きを進めていく時も、すべて同じです。イエス様は、神の御姿であられる方なのに、ただ神様のみこころに従い、神様にだけゆだねられました。

人の方法を使う時は、人の能力と限界の中でだけ可能ですが、すべての事において神様にだけ頼る時は、人の能力を超えて思いきり栄光をささげて、神の国を大いに実現することができます。

8. 十字架で死なれた時に起きた出来事

神殿の幕が真二つに裂けた

<マタイの福音書 27:51-54>には、イエス様が死なれた後に起こった、いくつかの驚くべき出来事が記されています。「すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生きた。そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都にはいって多くの人に現われた。百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、『この方はまことに神の子であった。』と言った。」

イエス様が死なれた後、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けたことは、罪人たちと神様との間の罪の隔ての壁が壊されたことを意味します。本来、旧約時代の聖殿には、聖所の中でも最も聖なる聖所、つまり、至聖所があって、至聖所の前には幕が垂れていて、この中には誰も入れなかったのです。ただ一年に一度、大祭司だけが罪のためのいけにえを持って幕の中に入り、罪人たちのために祭事をささげました。罪人たちは神様と交わることができないからです。

ところが、イエス様が罪のためのいけにえになられた後は、聖殿の幕が裂けたように、神様と神様の子どもたちの間の罪の隔ての壁が壊されました。私たちは、主の尊い血により、神様との交わりができるようになりました。

<ヘブル人への手紙 10:19-20>に「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。」と書かれています。このようにイエス様が血を注ぎ出して罪を贖われたので、主を信じる私たちは聖殿に入って来て礼拝することができますし、直接神様の前に祈って交わることもできるのです。

今日、ある人々は「神様を信じています」と言っているのに罪を犯すと、直接イエス・キリストの御名で神様に祈るのではなく、人に「告解の秘蹟」をします。これを受けた人が代わりに赦しの祈りをすれば、それによって赦されると考えるのです。

もちろん、罪を犯した人が悔い改めの恵みを受けるように、信仰と愛のある人が、とりなしの祈りをしてあげることができます。「義人の祈りは働くと、大きな力があります。」と言われたように、まことに傷がなくて、神様の御前に愛される人が、信仰と愛をもって切にとりなしの祈りをささげると、赦され難い罪を犯した人にも、神様は愛する者が頼み続けるので、悔い改めの機会をもう一度与えられることもあるからです。また、兄弟に罪を犯したら、相手に対して悔い改めると、相手が代わりにとりなしの祈りをささげる場合もあります。

たとえば、アロンとミリアムがモーセを非難したとき、モーセがとりなしの祈りをしたので、神様は彼らを赦されました。ヨブの友だちがヨブに罪を犯した時も、ヨブが友だちの代わりに祈ったので、神様はヨブの祈りを受けて、友だちを赦されました。

しかし、基本的に「悔い改め」とは、主イエス・キリストの御名で父なる神様の前に直接祈ることです。悔い改めだけでなく、すべての祈りも同じです。神様と

の間を隔てていた罪の壁を壊してくださり、私たちの仲介者になられたイエス・キリストを通して、神様に私たちの心を直接お話しするのです。

地が揺れ動き、岩が裂けた

イエス様が死なれた後、幕が裂けただけでなく、「そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。」と、地震が起きたことが記されています。これは、天と地を造られた神様が、とても悲しんで嘆かれたので起きたことです。命のない固い岩さえも裂けるほどですから、天下万物がともに揺れ動いたのは、当然のことです。

<ルカの福音書 23:44>にも、「そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。」とあり、太陽でさえ光を失ったことがわかります。傷のないひとり子をなだめの供え物として渡された痛みと、人間の悪によってイエス様が死なれたのに、これを知らずに相変わらず罪の中に生きている人々のために神様がひどく悲しまれたので、このような現象が起きたのです。

聖徒たちの復活

<マタイの福音書 27:52>には「また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都にはいて多くの人に現われた。」と書かれています。

救われた人々のこの地上での寿命が尽きれば、「死んだ」と言わずに「眠っている」と言います。将来、主が再び来られる時は、深い眠りから目覚めたようによみがえり、主の栄光にあずかるからです。

旧約時代に生きた人々の中にも、聖書に預言された救い主を切に慕うので、やがて来られる主を信じて待ち望んだ人もいました。女預言者アンナやシメオンのような人々は、まだイエス様が働きを始められる前、赤ちゃんの時に会っても、救い主だとわかりました。こういう人々は、イエス様が十字架を負って、救いの働きを全うされる前に死んだとしても、救われる信仰があるために、死んだのではなく「眠っている」と言えます。

<マタイの福音書 27:52>の「眠っていた多くの聖徒たち」とは、このように信仰によって救われる人々の中で、イエス様が死なれる前に、肉の寿命が尽きて死んだ人々を言います。そして、<コリント人への手紙第一 15:20>に「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」とある

ように、復活の初穂としてイエス様がよみがえられた後は、彼らも復活にあずかれるようになったのです。

第3部

全き救いに

至るには

第1章

御霊によって霊を生んでいく

<エペソ人への手紙5:31-32>には、永遠のいのちを得る過程が記されています。「『それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」とあります。

人が結婚すると、その父と母を離れて、夫と妻は一体になります。これは隠されたことではなく、世の人もほとんど知っていることなのに、なぜ「この奥義は偉大です。」と言うのでしょうか？ これは、世の人の結婚についてでなく、キリストと教会、つまり、聖徒たちについて言っているからです。世界の始まる前から隠された霊的な奥義、すなわち「十字架の救いの摂理」のことを言っているのです。

<ヨハネの福音書8:44前半節>に「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。」というイエス様のことがばがあります。また、<ヨハネの手紙第一3:8前半節>に「罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。」とあります。人が罪と悪に満ちた世の中を歩み、心と行ないで罪を犯していく時は、罪に従う罪の奴隷であり、敵である悪魔に支配されるようになります。ですから、罪を犯す人に対して「あなたがたは、父である悪魔から出た者だ」と言うのです。

しかし、イエス・キリストを受け入れた人は、悪魔に属する悪魔の子どもでなく、神様に属する子どもになります。また、花婿なるイエス・キリストと信仰によって結びつくようになります。イエス様が十字架を負って、私たちの罪を贖ってくださったことを信じる時、イエス様と私たちが結ばれて一つになります。このように主と結ばれて一つになれば、神様は私たちの心の中に、聖霊を賜物として遣わしてくださいませ。

<ヨハネの福音書3:6>に「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」とあるように、聖霊が私たちの中に来られると、死んでいた霊を生き返らせ、御霊によって霊を生んでいくようにされます。「御霊によって霊を生んでいく」とは、自分の心に真理の知識を満たしていくという意味です。

このように御霊によって霊を生んでいく人は、霊であられる神の子どもになり、神様を「父」と呼ぶことができます。神の子どもとされると、神の国である天国が相続できるのです。

1. 人の心の三つの要素

神の子どもたちが聖霊を受けて、御霊によって霊を生んでいくことを理解するために、人の心について少し説明します。

人の心は、いくつかに分けられます。一番簡単に見分けられる心は、明らかな真理の心と、明らかに真理に逆らう心です。簡単に言えば「白い心」と「黒い心」です。白い心とは、神様が最初にアダムに植えつけられたとおり、真理を追おうとする「真理の心」であり、黒い心とは、後で敵である悪魔・サタンが植えつけたもので「真理に逆らう心」です。

神様が最初の人アダムを造られたとき、神様のいのちの息を吹き込まれたので、人にいのちの種ができました。その後、真理を植えつけてくださったので、いのちの種を核として、真理で包まれているものが、まさにアダムの霊であり、アダムの心になりました。このように、最初、アダムの心は、ただ真理だけで満たされた白い心だったのです。

ところが、アダムが罪を犯したので、神様との交わりが途絶えるようになると、敵である悪魔・サタンがアダムに働きかけて、罪と悪、不義、不法など、真理に逆らうものを植えつけました。それでアダムの心には、本来の白い心と一緒に、敵である悪魔が植えつけた黒い心が共存するようになりました。

ところで、この二つに加えて、もう一つの新しく作られた心があります。それは「良心」というものです。良心とは、両親から受け継いだ本性を基にして、自分が見聞きして習いながら、自ら入力したものが加わって作られます。真理と真理に逆らうものが混ざって、自分なりに価値判断の基準を作り出したものが、すなわち、良心です。

したがって、人の心を大きく三つに分ければ「真理の心」「真理に逆らう心」そして「良心」に分けられます。実は、この三つのうち、神様が初めに植えつけてくださった真理の心は、ほとんど残っていません。

良心は人によって違い、地域によって、また、時代によっても違います。それで、ある人が自分の良心に照らして「これが正しい」と主張しても、それがすべての人に全部正しいと認められるわけではありません。

ささいな嘘をついても良心の呵責を覚える人もいるし、大きい嘘で人に被害を与えても、あまり良心がとがめない人もいます。ほかの人から悪を行なわれると、これに対して悪で報いることが「当然だ、正しい」と思う人もいて、ひどく悔しくて傷ついても、どうしても悪で報いられない人もいます。このように人によって良心が違うだけでなく、人が見て正しい良心のようでも、神様をご覧になる時は「正しい」と言えない場合がほとんどです。

たとえば、心には怒りと悔しさがあっても、無理にがまんして赦す人がいるなら、世の人の良心では「正しい」と言うでしょうが、神様をご覧になる時は正しくありません。本当に神様の前に正しい良心を持った人は、怒りと悔しささえなく、敵までも愛して、相手の立場を理解して、過ちをおおってあげるのです。

ところが、終わりの時になるほど、世が悪で染まり、人々の良心もますます悪くなっていきます。その上に、良心の声に全部従うのではなく、自分の益のために、真理に逆らう心に従って行なう人がほとんどです。そのように悪に悪を積み重ねていくと、結局、良心が麻痺した人になり、こういう人々は、悪を行なっても、罪の意識さえなくなります。

2. 御霊によって死んだ霊が生き返る

人には一番初めに神様が下さったいのちの種がある、と言いました。いのちの種は、神様と交わり、真理が満たされてこそ、活発に働くことができます。ところが、アダムが罪を犯したので、神様との交わりが途絶えて、真理に逆らうものが入って来ると、いのちの種をますます包み込むようになりました。真理に逆らうものがいのちの種を包み、いのちの種が動けないようにするので、いのちの種はますます萎縮して、死んだようになりました。こうして神様との交わりが途絶えて、いのちの種が真理に逆らうものに囲まれて動けない状態を指して、「人の霊が死んだ」と言います。

しかし、いのちの種は完全に死んだわけではありません。活動を停止してはいますが、また生き返る時を待っています。まるで、植物の種が硬く死んだように見えても、その中に生命が残っていれば、いつかは芽を出して成長するようなものです。まさに、<伝道者の書 3:11>に「神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。」とあるように、いのちの種の活動は中止していますが、永遠への思い、神

と真理への思いをもって生き返る時を待っているのです。

それでは、人の霊はいつ生き返るのでしょうか？ それは聖霊を受ける時です。人が伝道されて福音を聞くと、神の光、いのちと真理の光が心の中を照らします。

この時、心に残っている真理の心、正しい心がこの光を受け入れて、イエス・キリストを救い主として受け入れるようになります。すると神様が心に聖霊を遣わしてくださいます。聖霊は心の中でいのちの種と結びつきます。心に真理に逆らうものが多くて、良心が汚れた人々は、その分真理に逆らうものがいのちの種をぎゅっと固く包んでいて、真理がその心に入りにくいのです。真理の心がたくさん残っているほど、良心が正しいほど、福音を受け入れやすく、御霊によって新しく生まれることができます。

3. 真理に逆らう心と本性の悪も捨てる

聖霊を受けるといのちの種が動き始め、働くようになります。アダムが罪を犯して以来、途絶えていた神様との交わりが始まり、再び真理の知識が満たされるようになります。憎しみ、高ぶり、争い、憤り、姦淫などの真理に逆らうものでぎっしり満ちていた心に「愛しなさい」「仕えなさい」「低くなりなさい」「平和をつくりなさい」という真理が満たされていくのです。

これが、御霊によって霊を生んでいく過程です。ここでどうしても必要なものが、祈りです。苦しみもだえて祈るほど、上から神様の恵みと力を受けて、心の真理に逆らうものを捨てていけます。そうするほど、真理の心がますます力を得るようになります。

しかし、祈らなければ、相変らず肉の人にとどまります。いくら熱心に忠実に働いているようでも、御霊によって霊を生んでいくことができず、肉の熱心と肉の善で終わります。ところで、いくら熱心に祈ったとしても、自分のはかりごとと思弁を打ち砕かなければ、何にもなりません。聖霊は真理の心に働きかけ、御霊の願いに従って行なうようにします。一方、サタンは魂を通して、つまり、思いに働きかけて、心にある真理に逆らう部分を支配します。

真理に逆らう部分が多ければ、心に聖霊に働きかけられる前に、まず思いを通してサタンに働きかけられるので、肉の願いに従って滅びの道へ向かうようになります。たとえ真理をたくさん聞いて、長い時間祈っても、肉の思いと思弁を捨てなければ、聖霊の働きに従って行なうことはできません。祈っても心が苦しいし、神様のみわざを明らかに体験することもできません。

それで、<コリント人への手紙第二 10:5>に「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」とあるのです。

祈って変えられて、三つの心のうち、真理に逆らう心を脱ぎ捨てたとしても、それで訓練が終わるわけではありません。その次には良心の悪、言いかえれば、深い本性の中に隠された罪の性質を発見して、捨てなければならないからです。

先ほどの説明で、「良心」とは、両親から受け継いだ本性を基礎として、自分が見聞きして習いながら、自ら入力したものが加わって作られる、と言いました。そのように作られた良心が、また自分だけの深い本性を作るようになりますが、これは自分も知らない、深い心です。

本性の中の真理に逆らうものは、神様の義とは合わないけれど、自分の目にはとても正しいので、自ら発見して捨てるのがやさしくありません。それで、神様が訓練の過程で人の本性の中にある真理に逆らうものを発見させ、完全に聖なるものにしていかれるのです。

潔白なヨブがあればほどの訓練を受けたのも、自分の義を悟って捨てるためでした。ヨブは、三つの心のうち、真理に逆らう心は脱ぎ捨てましたが、まだ深い本性の中の悪は捨てられなかったのです。それで、自分が理解できない訓練を受けると、本性の中に隠されていた悪が現れるようになりました。こうして悪が発見された後、神様が会ってくださると、ヨブはその場で徹底的に悔い改めて、完全な真理の心を持つことができました。

私たちが御霊に感じてみことばを聞いて、熱心に自分を発見して悟っていくなから、本性の中の真理に逆らうものもすみやかに捨てられます。

ところが、いくら説教を聞いても、他人のことだと思って自分の姿が悟れない人は、長い歳月が過ぎても、信仰の発展が遅いのです。真理に逆らう心を捨てて、本性の中の真理に逆らうものも発見して脱ぎ捨てたら、その時からは、真理の心だけが残るようになります。そうすると、神様の御前で「霊の人」として認められるようになり、御霊による霊の世界を常に体験して生きていくようになります。<ヨハネの手紙第一 3:21-22>にあるとおり、自分の心に責められないので、大胆

に神様の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神様からいただくことができます。また、「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」と言われたように、すべての事に信仰どおり働かれるのです。

4. キリストにつき合わされた人生

いのちの種と結びついた真理の心が大きくなったほど、主と完全に一つになって、天国でも神様の御座にさらに近いところにとどまるようになります。「この奥義は偉大です。」というみことばのように(エペソ 5:32) 私たちが、十字架を負って救いの道を開いてくださったキリストにつき合わされて一つになり、永遠のいのちを得るのです。

主イエス・キリストを受け入れた聖徒たちは、悪魔が支配する世から離れて、花婿なる主と結びつきました。男性の精子と女性の卵子が結びつくと、新しい生命ができるように、聖徒たちが花婿なるイエス・キリストと信仰で一つになると、信仰によって永遠のいのちを得るようになります。

イエス様は<ヨハネの福音書 17:21>で「父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」と言われました。主が父におられ、父が主におられるので、主と父は一つです。男女が結ばれて一体になったように、私たちが花婿なる主と結ばれるなら、私たちも主と一つ、父なる神様と一つになります。心から真理に逆らうものを脱ぎ捨てて、真理を満たして霊の心に耕したほど、ますます完全に一つになれるのです。

<ガラテヤ人への手紙 4:4-7>に「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父。』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。」とあります。

このように、聖霊を受けて救われた聖徒は、信仰によってキリストとつぎ合わ

され、これからは神様を「アバ、父」と呼ぶ子どもとして天国を相続して生きるようになります。

第2章

人の子の肉を食べて血を飲んでこそ永遠のいのちを持つ

<ヨハネの福音書 6:53-55> 「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。』」

光の中を歩いてこそ

イエス様がすでに約二千年前に十字架につけられたとき、私たちのすべての罪を赦すために苦しみを受けられました。その時に、すでに私たちの過去、現在、未来の罪までみな贖ってくださいました。

イエス様の十字架を信じれば、すべての罪が赦されて永遠のいのちを得ると言いましたが、なぜ「人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」と書かれているのでしょうか？

私たちがイエス・キリストを受け入れたからといって、すぐ罪を犯さない人に変えられるわけではありません。イエス様が道であり、真理であり、いのちであるので(ヨハネ 14:6)、イエス様の肉、すなわち、真理のみことばを食べて、イエス様の血を飲んで、神様の力で真理のみことばどおり行なうとき、私たちは罪が捨てられるからです。

これがすなわち、光の中を歩んでいるとき、イエス様の血が私たちをすべての罪からきよめるということです(第一ヨハネ 1:6-7)。「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」(使徒 3:19)とあるとおり、心から立ち返って、罪を犯さないようにしなければならないのです。それで、「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」(マタイ 7:21)とされているのです。

1. 人の子の肉を食べなさい

1) 主に似せられて、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するべき

イエス様を救い主と告白して、自分の罪を悔い改めると、神様が聖霊を下さって神の子どもと認められるので、新しく生まれ、いのちを得るようになります。ところが、肉的にも、赤ちゃんが「おぎゃー」と生まれたからといって、すぐに一人前になるわけではありません。お乳を飲み、ご飯を食べて、おとなになるのであって、知識と人としての道理を学ばなければなりません。ところが、十分に食べなくて育たないなら、生まれたとしても正常に生きることはできないで、結局、死んでしまうでしょう。

靈的にも同じです。主を受け入れて新しく生まれることで、永遠のいのちを完全に所有したのではなく、靈の糧を飲んで食べ、主に似せられて、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するべきです。

それでは、靈と魂の成長のために、聖徒に必要な糧とは何でしょうか？ <ヨハネの福音書 6:53>に「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。』」とあります。また、<55 節>に「わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。」とあり、人の子の肉と血、つまり、主の肉と血が私たちのまことの食物と飲み物だと書かれています。人の子の肉を食べ、その血を飲まない、「いのちはありません。」すなわち、救われないということです。

2) 人の子の肉とは何で、どのように人の子の肉を食べるのか

私たちが食べるべき人の肉とは、靈的に、聖書に記された「神のことば」を意味します。<ヨハネの福音書 1:14>に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とあり、イエス様は、神のことばが人となってこの地上に来られた方であることを証ししています。<ヨハネの福音書 6:51>には「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」とあり、イエス様が天から下って来た生けるパンだとしています。

イエス、神の小羊

ところが、私たちが神のことばであり、いのちのパンである「人の子の肉」をどのように食べるのかは、聖書の小羊のたとえとも直接かかわっています。<ヨハネの福音書 1：29>にも、バプテスマのヨハネがイエス様にお会いした時も、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と言いました。

羊は、ただ牧者の声だけに聞き従って、おとなしくて人に益だけ与えます。イエス様も、ただ御父のみこころに聞き従って、おとなしい小羊のように贖いのいけにえになってくださり、人に良いものだけ与えられました。特に一歳になった傷のない小羊は、人間では青年期の最も美しい時であり、さかりがつく前の純潔な状態であり、靈的には、傷もしみもないイエス様のたとえなのです。

<出エジプト記 12章>には、イスラエルの民に傷のない一歳の雄の羊を食べるように、神様が命じられる場面があります。それは、エジプト全地に初子の災いが臨む時でした。子羊をほふり、その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱とかもいにそれをつけると、その血で示されているイスラエルの民の家に初子の災いが臨まないように、神様が守ってくださったのです。

ところで、羊を食べるのも、好きなおりに食べるものではありません。神様が教えてくださった方法がありました。

<出エジプト記 12:8-10>に「その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。」とあります。

このように子羊を食べる方法を詳しく教えてくださったのは、その中に私たちのいのちに関わる靈的な教訓が含まれているからです。これが人の子の肉を食べる方法であり、神のことばを糧とする方法です。

(ア) 子羊を食べる時は火に焼いて食べるべき

(i)ここで「火」とは、聖霊の火を意味します。

つまり、私たちが聖霊に動かされて、神のことばを悟って、糧としなければな

らないのです。

(ii)また、聖霊の火をつけるためには、私たちが火のように祈らなければなりません。

<ペテロの手紙第二 1:20-21>にも「それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」とあり、<ペテロの手紙第二 3:16>に「その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所のことばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」とあります。

すなわち、神のことばを、聖霊に動かされてでなく曲解するなら、むしろ真理から外れて滅びを招く、と戒めているのです。聖霊に動かされてでなく、曲解するとは、神のことばを、<出エジプト記 12:9>にあるとおり、「生のままで」食べることに、または「水で煮て」食べることなのです。

(イ) 生のままで食べてはならない

「神のことばを生のままで食べる」とは、みことばの中に書かれた霊的な意味が悟れなくて、記されている文字どおりに解釈することを意味します。肉を生のままで食べると、消化にも良くないし、おなかをこわしやすいように、神のことばも生のまま食べると、とんでもない反応が出て来るようになります。子羊を生のままで食べる例をいくつか挙げてみます。

「奥まった部屋にはいり、戸をしめて祈りなさい。」

<マタイの福音書 6:6>に「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」とあります。このみことばを文字どおりに解釈すれば、祈るためには必ず自分の奥まった部屋を作り、そこに入って祈ってはじめて神のことばに従うこととなります。しかし、聖書のどこを見ても、信仰の昔の人々が自分の奥まった部屋で祈ったという記述は見つかりません。イエス様も祈られる時は、奥まった部屋ではなく園や荒野で祈られ、使徒たちは聖殿で祈り、屋根や海辺で祈った、と書

かれています。ダニエルは窓を開いて、エルサレムに向かって祈りました。

したがって、ここで「部屋」とは、実は家の部屋のことではありません。靈的に「部屋」とは、「人の心」を意味します。そして「祈る時に奥まった部屋に入りなさい」ということは、深い心の底から神様と交わるべきだと悟らせてくださっているのです。奥まった部屋に入り、戸を閉めると、その中は外部から完全にさえぎられるようになります。そのように、私たちが祈る時は、人に見られるために偽善を行ったり、世の憂いと心配、雑念の中で、同じ言葉をただ繰り返したりせず、心の底から神様と交わらなければなりません。

「教会では、妻たちは黙っていなさい。」

また、<コリント人への手紙第一 14:34-35>には「教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません。律法も言うように、服従しなさい。もし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、妻にとってはふさわしくないことです。」とあります。これを文字だけで見ると、妻たちは教会で黙っていなければならないので、祈りや賛美でも声を出せないし、前に立って何かの使命を果たすこともできません。

今日も、これを文字どおりに解釈して、教会の中で女性の活動を制限する、昔の人たちの言い伝えを作った教団があります。しかし、聖書を見ると、旧約時代にも、デボラのように女性が民を導くさばきつかさとして立てられた時もあり、民に神様のみこころを伝える預言者の中にも、女預言者がいました。新約でも、イエス様に付き従ったさまざまな女性や、教会に仕えた女性たちの名前がところどころに記されています。

したがって、「教会では、妻たちは黙っていなさい。」と言うとき、「妻たち」とは、神のことばに従って歩んでいる女性聖徒を意味するものではありません。性別を問わず、教会の中に入っただけにいるけれど、まだ真理の中を歩まない人々を意味します。女性、つまり、エバが真理の中にとどまらなかったのが、軽率に蛇に惑わされたように、また、アダムまで惑わして罪を犯させたように、罪を犯す属性を持った人々を意味するのです。

真理に変えられていない人々は、真理に逆らう言葉をよく言い、心が狭くて軽率で、教会の中でもサタンの会衆を作り、さばいて罪に定めたり、党派心を持ち、

混乱を起こしたりします。聖書では、このように肉の属性が捨てられず、不従順な人々に「黙っていなさい。」と戒めて、真理の中で秩序に従うように教えているのです。

水でぶどう酒を作った出来事

また、イエス様が水でぶどう酒を作られたことも、文字どおりに受け取る人々は、愚かな解釈をします。<箴言 23:31>に「ぶどう酒が赤く、杯の中で輝き、なめらかにこぼれるとき、それを見てはならない」というみことばをはじめとして、神様は明らかに、酒に酔ってはいけない、と戒められました。イエス様も、人々が飲んで酔うためにぶどう酒を作られたわけではありません。

これは、イエス様が神の国の働きを始めるとき、「水」つまり「みことば」そのものがこの地上に来られたイエス様が、ぶどう酒のように尊い血を注がれるというしるしです。その霊的な意味を知らない人々は「イエス様もぶどう酒を作ってくださいだったので、酒に酔ってもかまわない」と言い、真理から外れることが見られます。

「ヨルダン川に七たび身を浸しなさい。」

また、ハンセン病のナアマンがヨルダン川に七たび身を浸すと、完全にいやされましたが(第二列王5章) これも、イスラエルのヨルダン川にいやしの力が含まれている、ということではありません。「ヨルダン川に七たび身を浸す」とは、神のことばに完全に聞き従うことを意味し、そうする時、どんな病気や問題でも解決されるという霊的な意味が含まれているのです。その意味を知らずに、イスラエルのヨルダン川に行っていくら熱心に身を洗っても、それで病気がいやされるわけではありません。

このように、文字どおり解釈して霊的な意味が悟れないことが、まさに、神のことばを生そのまま食べる、ということです。

(ウ) 子羊を水で煮て食べてはならない

次に、「水に煮てはならない」とは何でしょうか？ これは、神のことばを扱うとき、ほかのどんな世のことも加えてはならない、という意味です。時々、神のことばに真理以外の理論などを混ぜて理解しようとしたり、人の思いと理論を用いて説教したりする人々がいます。ある人は、明らかに神のことばを語っているのに、説教の内容は政治や社会の話など、あらゆる肉の話で満ちています。ある

いは、「ある立派な人がこう言った」「ある哲学者はこう言った」など、世の知識で説教する人もいます。

しかし、人の思いと知識は極めて限られていて、いくら立派な思想も完全なものではありません。歳月が流れると変わります。<コリント人への手紙第一 1:25>に「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」とあります。神のことは、世のどんな知識よりも優れていて、神のことはだけが唯一の真理であり、永遠に変わりません。

ある人はヘブライ語とギリシャ語を研究して、聖書の単語一つ一つの意味を調べることに没頭して、その中にいのちを探そうとします。しかし、それで霊的に神様のみこころが悟れるのではなく、いのちが得られるのでもありません。ユダヤのパリサイ人と律法学者たちは、自分たちの母国語で記された神のことはを学び、またそのみこころをすらすら暗唱して、一字も変えずに保存しようとしてきました。それなのに、彼らは実際にことばが人となって来られたイエス様が悟れず、永遠のいのちを得ることもできなかったのです。

説教者がメッセージを語る時も、こういうことを心に留めなければなりません。講壇で宣べられるべきみこころは、人の知識でも、いかなる理論でもなく、世の話でもありません。聖霊に感じて解き明かされた聖書のみこころを語らなければなりません。神様の生きておられることを確かに信じて語り、どうすれば生きておられる神様に会えるのか、また、聖徒に向けられた神様のみこころが何か、どう信仰生活をしてこそ救われるのか、このような内容を語らなければなりません。

(エ) 子羊を丸ごと食べなければならない

<出エジプト記 12:9 後半節>には、「その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。」と書かれています。これは、創世記の初めからヨハネの黙示録の終わりまで、66巻の聖書に記されたすべてのみこころを糧とすることを意味します。

ところが、聖書を読むとき、ある人々は、レビ記のように理解しにくいみこころは飛ばして読んだり、旧約聖書は主がお生まれになる前のみこころなので私たちと関係がない、と言ったりする人もいます。聖書に明らかに記されているのに、不思議なわざとするしは信じない人もいます。このように、人間の思いに合わないことをすべて取り除くと、結局残るものは真理でもなく、信仰でもなく、倫理

と道德だけが残ります。それさえも守り行なうことが難しいのは、心に留めないからであって、それではいくら神のことばを読んでも、永遠のいのちを得ることはできません。

神のことばは、自分の思いに合う特定の部分だけでなく、すべてを信じて糧としなければなりません。ですから、子羊を食べる時も、「その頭も足も内臓も」、つまり、丸ごと食べるように命じられたのです。

(オ) 朝までに子羊をみな食べなければならない

子羊を朝まで残してはならず、朝まで残ったものは、みな食べてしまわなければなりません。つまり、夜が明ける前に全部食べられなければ、残ったものは火で焼いてしまわなければならないのです。霊的に「夜」とは、敵である悪魔・サタンがこの世を支配している期間です。終わりの時になると、世はますます罪と悪に満ちて暗やみが深まります。

そして時になり、主が再臨なさると、闇が退いて光が臨み、朝になります。その時は、聖書に記されたすべてのみことばがまことだったことを、世の人々はみな知るようになり、また、聖徒がそれぞれどれほど聖められて、報いを積んだのかも明らかにされます。捨てられなかった自分の義と欲、自尊心などがどれほど愚かなものだったか、世を愛する心がどれほどむなしいものだったか、はっきりとわかるようになります。

しかし、この時は明らかにされた結果を変える機会がありません。「早く罪と悪を捨てて霊に入ったらよかったのに、天国の報いをもっと積んだらよかったのに」と後悔しても、すでに手遅れです。したがって、聖徒は主の再臨の前に、すべてのみことばをこまめに霊の糧として、自分のものにしなければなりません。朝が来る前に、夜の間、すべてのみことばを心に耕して、花嫁の備えを終えて、再び来られる主を待たなければならないのです。

2. 人の子の血を飲みなさい

1) 人の子の血を飲まなければ消化できない

人が肉の生命を維持するためには、食物を食べて、水分も一緒に取らなければなりません。もし水分を全く摂取しないならば、食物が消化されないので、結局死ぬしかありません。食物が水と一緒に胃に入れば、そこでポンプ作用が起きて

消化され、栄養分は吸収されて老廃物は排泄するのです。

これと同じように、私たちが人の子の肉を食べる時も、人の子の血を飲まなければ消化できないので、人の子の肉と一緒に人の子の血を飲んでこそ永遠に生きられるのです。

2) 人の子の血を飲むとは？

「人の子の血を飲む」とは、糧とした神のことばを信仰で行なうことを意味します。神のことばを聞いたら、その次にはみことばどおり行なうことが大切です。これがすなわち、信仰です。もし、神のことばを聞いて知っていながら行なわないならば、何の役にも立たないからです。

3) 神のことばである真理は吸収され、真理に逆らうものは排泄

先に言ったように、私たちが食物と一緒に水分を取れば、よく消化され、栄養分は吸収されて老廃物は排泄されます。このように、霊的にも、神のことばを聞いてそのまま行なえば、神のことばである真理は吸収されて、これと反対になる真理に逆らうものは排泄されるので、黒い心が白い心に変わります。

それでは、吸収される真理とは何であり、排泄される真理に逆らうものとは何でしょうか？ たとえば、「憎んではならない。互いに愛し合いなさい。」という神のことばを聞いたとしましょう。そのみことばを聞いて糧として、そのとおりに行なうようになれば、「愛」という栄養分は吸収されて、「憎しみ」という老廃物が排泄されるのです。

4) そうすると、自然に真理の心に変えられる

このようにして汚くて醜い心を取り出してしまうと、自然に私たちの心は正しい心、すなわち、真理の心に変えられるのです。

もし私たちが「憎んではならない」という神のことばを聞くばかりで行なわないならば、これは人の子の血を飲まないということであり、単にみことばを頭で知っているにすぎない知識的な信仰になり、結局救われなくなります。

5) 本人の意志と努力、火のような祈りによって神様の恵み、力、助けを受ける

ところで、人の子の血を飲むこと、すなわち、神のことばどおり行なうことは、人の力だけではできません。まずはみことばどおり行なおうとする本人の意志と努力がなければならぬし、火のような祈りによって神様が下さる恵みと力を受け、聖霊に助けられなければなりません。自分の力だけで罪が捨てられるならば、

イエス様が十字架につけられなければならない理由がないし、聖霊を遣わしてくださらなければならない理由もありません。

私たちが自分では罪の問題が解決できないので、イエス・キリストを遣わしてくださり、主が十字架につけられて死なれることで私たちの罪を贖ってくださいました。そして、聖霊を遣わして、黒い心が白い心に変えられるように働いてくださったのです。

したがって、イエス・キリストを受け入れた神の子どもたちは、真理と義の中に生きていくように導く聖霊に助けられて、罪を捨てて神のことばどおり生きて、神様の愛と祝福を受けなければなりません。

第3章

水と御霊によって新しく生まれてこそ永遠のいのちを持つ

1. ニコデモの信仰

イエス様は当時、パリサイ人たちをしばしば厳しく叱られました。彼らは、自分では神様によく仕えていると思っていましたが、実はその心は真理を求めず、神様とはかけ離れた人々だったからです。ですから、イエス様の教えを聞いても信じないし、むしろイエス様に敵対して殺そうとしたのです。

はなはだしきは、パリサイ人をはじめとするユダヤ人の指導者たちは、イエス様を信じる人々を会堂から追放することまで決議しました。これはつまり、社会的に葬る、ということです。

ところが、ニコデモはほかのパリサイ人とは違いました。神様のみことばを知っていて、命令を守ると言いながら、表面だけ聖なるふりをすることに満足できず、真理に飢え渴いていました。そのうちイエス様のことを聞いて、イエス様なら自分の飢え渴きを解決してくださるだろうと慕い求めて、ある夜、イエス様のもとにきました。まだ人の目を恐れずに堂々とイエス様のところに来る信仰ではなかったのです。人目につかない夜に来たのです。

この夜以後のことを記した箇所を見ると、イエス様のもとに来たニコデモは、結局救われたことがわかります。たとえば、<ヨハネの福音書 7:50-51>に、パリサイ人たちがイエス様を非難したとき、ニコデモが殺気立ったパリサイ人たちの前で、イエス様をかばって守ることが記されています。「彼らのうちのひとりで、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。『私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。』」と言います。これは決してやさしいことではありません。

今日、キリスト教を厳しく禁止しているイスラム教国家やヒンズー教国家で、国家公務員か国会議員が公然とキリスト教を擁護するようなものです。まかり間違えば、自分の地位と命まで危なくなるかもしれないのに、ニコデモはイエス様の味方をしたのです。

また、イエス様が十字架につけられて死なれた後、<ヨハネの福音書 19:39>に「前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。」とあります。イエス様が罪人の身になって死なれた後も、このようにイエス様に仕えるために出て来たのです。このようなニコデモの行ないを見ると、彼が十分救われたことがわかります。

次は、ニコデモがまだ真理を知る前、イエス様と初めて会って話をする場面です。「この人が、夜、イエスのもとに来て言った。『先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。』」（ヨハネ 3:2）ニコデモは正しい心を持っていたので、イエス様の行なわれることを見ると、疑ったり論争したりしようと思わず、まず信仰を告白します。イエス様が神のもとから来られたことを信じる、と告白したのです。

2. イエス様とニコデモの対話

イエス様は彼の心が飢え渴いていることをご存じで、彼が尋ねてもいないことに答えてくださいます。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われました(ヨハネ3:3)。知識が多いから、富んでいるからといって、神の国に入るのではありません。神のことばをたくさん知っていて、教会に長く通ったからといって、救われるのでもありません。いくら教会に通って務めがあったとしても、新しく生まれなければ何の役にも立たず、天国にも入ることができません。

ニコデモはイエス様のことばが全く理解できなかったのです。「新しく生まれなければならぬなら、すでに母の胎から生まれてもう大きくなった人が、どのようにして新しく生まれるのだろうか？」と、想像さえできませんでした。ニコデモは、ユダヤ人の指導者であり、民を教える教師として、知識としては律法をよく知っていて、神のことばに通じていた人でした。それでも、イエス様が霊的なことを話される時は理解できなかったのです。

今日、教会に長く通った人や務めを受けた者、さらには牧師や伝道師でも、霊的な悟りがなければ、ニコデモのように理解ができません。いくら神学博士、牧

会学博士の学位を受けて、聖書について多くの知識を積んだといっても、それだけではみことばの霊的な意味を悟ることができません。神のわざを体験することもできないし、羊の群れを霊的に成長させることもできないので、教会もリバイバルしないのです。

イエス様のことばが理解できなかったニコデモは、再びイエス様に尋ねます。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができますでしょうか。」するとイエス様は「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」と答えられました(ヨハネ3:4-8)。

イエス様が言われたことは、朽ちる肉についてはありません。霊についての話をしておられるのです。人が天国に入るためには、目に見える肉が新しく生まれなければならない、ということではなく、目に見えない霊が新しく生まれなければならない、と言われたのです。

人類の先祖アダムは、いのちの息を吹き込まれて「霊の生きた者」として造られました。罪を犯したので、霊が死んでしまいました。今は霊の生きた者でなく、肉の人になったのです。「肉によって生まれたものは肉です。」というみことばのように、肉の人になったアダムの子孫も、霊が死んだ肉の状態で生まれました。すべての人類は霊が死んだ肉の人となり、肉の人は天国に行くことができないので、結局は地獄、すなわち、死の道に向かうようになりました。

人が天国に入るためには、死んだ霊が生き返らなければなりません。まさに、水と御霊によって新しく生まれなければならないのです。イエス様はこのような霊のことについて「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」と言われました。

人は風の吹く音は聞けますが、その風を目で見ることにはできず、風がどこから始まって、どこで終わるのかも知りません。このように、肉の目で見られない風のように、霊の世界のことも、肉の限界の中で理解できるものではありません。

科学がいくら発達しても、世のすべてのことをみな把握はできません。今日、尖端科学技術によって風に関して知るようになったとは言いますが、最近のニュースでは、アメリカのように科学の進んだ国さえ、ハリケーンの被害が防げなかったことがわかります。このように、風の動きさえ人は知らないのに、まして天のこと、つまり、霊の世界のことを、肉の限界の中でどうして理解できるでしょうか？ ただ神様の働きによってのみ、聖霊の御力によってのみ、知って体験することができます。

3. 水と御霊によって新しく生まれてこそ

人の霊が「水と御霊によって新しく生まれる」とは、どんな意味でしょうか？
ここで「水」とは、<ヨハネの福音書 4:14>にあるみことばのように、「永遠のいのちへの水」のことです。イエス様が、「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」と言われたとおり、永遠のいのちへの水を飲むことによって、人は新しく生まれるのです。では、永遠のいのちへの水、すなわち、イエス様が与えられるこの水とは、何でしょうか？

人の子、つまり、主の肉を食べて、その血を飲まなければ、私たちの中に永遠のいのちがないと言いました。人の子の肉を食べるとは、神のことばを糧とすることであり、人の子の血を飲むとは、信仰で神のことばを行なうことだと言いました。このように、人の子の肉を食べて、その血を飲むこと、つまり、神のことばそのものが、人に永遠のいのちを与える水になります。水は汚れを洗って、万物にいのちを与えます。霊的にも水、すなわち、神のことばは、私たちから汚い罪と悪を洗い落として、永遠のいのちを持つようにします。

私たちの心にそねみ、ねたみ、憎しみ、憤りなどがあれば、どれくらい汚くて醜いでしょうか？ 将来、私たちが神様の御前に立つとき、このように汚くて醜い罪と悪を捨てなかった人は、恥ずかしくて顔が上げられないのです。花婿なる主の御顔を拝見することもできません。

ところが、心に神のことばが臨むと、この罪と悪のあかが洗われます。たとえば、先に説明したように、霊的な愛が心に臨むと、憎しみが洗われ、そねみ、ねたみも洗われて、憤りと自分の利益を求めるとも洗われます。このように水で

心の罪と悪を洗い落とすと、新しく生まれて救いに至るようになります。

それで、<ペテロの手紙第一 3:21>にも「そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。」とあるのです。

神のことは真理そのものであり、ことは人となって来られた方が、主イエス・キリストです。神のことは、旧約聖書にも新約聖書にも、イエス様について記してあります。ことは神の御子がよみがえって救い主になられたので、新・旧約聖書のみことはすべて成就されて、まことになりました。

このみことを私たちが信じて、神の命令を心に糧としながら行なっていくと、ますます正しい者となっていきます。「水」すなわち、神のことは、人にいのちを与えて、正しい者に作り上げていくのです。

まことにことは神の御子を救い主と信じる人は、みことば、つまり、聖書 66 巻に記された命令も、信じて行なうようになります。こうしてみことが私たちの中にとどまり、私たちの心を洗いきよめていくと、それが救われたという証しになります。私たちが洗礼式の時に水でバプテスマを受けるのも、このようにみことばで心を洗うことを象徴しているのです。

「聖霊」とは聖なる神の御霊のことで、すべての救われた子どもたちの心に臨み、完全な救いに至るように助けてくださいます。<ヨハネの福音書 15:26>でイエス様が「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」と言われたように、主が復活、昇天された後は、神様は救われた子どもたちに聖霊を遣わしてくださいませ。

<使徒の働き 2:38>に「そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。』」とあります。このみことばのように、人が福音を聞いて悔い改めて、イエスを自分の救い主と告白すると、罪が赦されて、その心に聖霊が来られます。聖霊を受けると、死んだ霊が生き返り、信じられる霊の信仰を持つようになります。

<ヨハネの手紙第一 5:5-8>に「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御

子と信じる者ではありませんか。このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。あかしするものが三つあります。御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。」とあります。

ここで「イエス・キリストは、水と血とによって来られた」とは、水、つまり、ことばが人となって来られたイエス様が、尊い血を流して死なれたことを意味します。イエス様が十字架で死なれたので、私たちはその尊い血によって救われます。ですから、水と血とによって来られた方が、まさにイエス・キリストであり、主が昇天された後に遣わされた聖霊は、私たちがこの事実を確かに信じられるように助けてくださるのです。

イエスが神の御子であることを信じる人は「世に勝つ」と言われましたが、これは世の人と戦って勝つという意味ではありません。世の欲と戦って勝つことによって、罪を犯さず、真理に逆らうものに染まらないことを言います。聖霊様は、主を確かに信じるようにされるだけでなく、罪と義とさばきについて悟らせて、私たちが十分世に勝てる力を下さいます。

御霊によって霊を生んでいく過程

聖霊が悟らせて、罪が何かを知り、私たちが義に至るべきことを知り、さばきがあることをまことに信じるなら、当然、御霊の願うことを求めて生きようになります。心の罪と悪を毎日、水で洗っていくのです。そうすれば、心にある真理に逆らうものが抜けて、だんだん真理の心に変えられ、結局は、アダムが「霊の生きた者」として造られた時のように、真理だけで満たされます。

これがまさに、御霊によって霊を生んでいく過程です。このように水と御霊によって新しく生まれて、御霊によって霊を生んでいく人だけが、神の国を見ることができるようです。〈エペソ人への手紙 2:8〉に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」とあります。人が水と御霊によって生まれることも、そして、永遠のいのちに至ることも、ただ父なる神様の愛によるのであり、私たちが価なしに頂いた賜物です。

人は誰でも自分の力と意志で救われることはできず、ただ十字架のほかには救いの道がありません。世界の始まる前から隠された奥義としての神の摂理に従っ

て、イエス様が十字架を負われ、私たちのために救いの道を完成されました。このことを信じる人はみな、水と御霊によって新しく生まれて、永遠に生きるようになりました。

<ヨハネの福音書 1:12>に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあり、<ピリピ人への手紙 3:20>には「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」とあります。主を信じて、水と御霊によって新しく生まれた人は、神の子どもとされる特権を受けます。

敵である悪魔が、これ以上死の力をふるえなくなり、これからは天に国籍をおいた天国の民になり、この地上でも天の御国でも、神様に守られて祝福されて生きるのです。これが救われた人すべてに与えられた特権です。

第4章

死に至る罪と死に至らない罪

世では、罪の結果が外に現れて、相手に被害を与えた証拠が確かな場合を、罪だと言います。しかし、光であられる神様は、このように行ないとして現れた「肉の行ない」だけでなく、光と反対になるすべての暗やみを罪だと言われます。

すなわち、行ないとして現さなかったとしても、心にいただく憎しみ、そねみ、ねたみ、姦淫はもちろん、相手をさばき、罪に定めること、情け知らずのことと欺く心など、すべての肉のことが悪であり、罪なのです。

それで、神様は「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」(マタイ 5:28)と言われ、「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。」(第一ヨハネ 3:15)と言われたのです。また、<ローマ人への手紙 14:23>で「信仰から出ていないことは、みな罪です。」と言われ、<ヤコブの手紙 4:17>では「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」と言われました。

それなら、このような罪を犯した場合、みな死に至るのでしょうか？

ここで私たちが知るべきことは、偽りを言う人が偽りを言わないで真実な人になろうと祈って、努力して変えられていくことが信仰生活であり、また、信仰だということです。ですから、もし自分がまだ信仰が弱くて、偽りを完全に脱ぎ捨てなかったとしても、それによって救われないことはないのです。

<ヨハネの手紙第一 5:16-17>に「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようにとは言いません。不正はみな罪ですが、死に至らない罪があります。」とあります。

したがって、罪は大きく、死に至らない罪と、死に至る罪に分けることができます。死に至らない罪を犯した人は、愛で熱心に勧めて祈るなら、悔い改めて救われることができますが、死に至る罪を犯した場合は、祈ってあげても救われないのです。

1. 死に至らない罪

世では正直だと言われる人も、自分の益のために時に偽りを言うかと思えば、他人に直接害を与えないとしても、いかに多くの偽りを行ないながら生きているのでしょうか。

私たちが神様を知る前は、いくら正しく生きてきたと思っても、イエス・キリストを受け入れて真理を悟るようになれば、自分が罪人であったことを認めないわけにはいかなくなります。神様は、行ないとして現れた肉の行ないだけでなく、心にいただいた悪い思いまでも「罪」と言われるからです。

すべての不義が罪であり、罪から来る報酬は死ですが、イエス様が十字架で尊い血を注ぎ出して死なれたので、私たちの過去と現在と未来のすべての罪を赦してくださいました。このようにイエス様の尊い血によって、私たちが悔い改めて立ち返る時に赦される罪を「死に至らない罪」と言います。

ところが、もしこれから立ち返らないで罪を犯し続けたら、良心が鈍くなるしかありません。この時、赦されない罪、すなわち、死に至る罪を犯せば、これ以上悔い改めの霊を注いでくださらないので、悔い改めようとしても悔い改められなくて、罪が赦されることもできなくなります。

2. 死に至る罪

それでは、死に至る罪とは具体的に何か、大きく三つに分けて調べてみます。

1) 聖霊を冒し、逆らい、けがす場合

<マタイの福音書 12:31-32> 「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒しも赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒しは赦されません。また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。」

(ア) 聖霊冒し

「冒し」とは、神聖なもの、清浄なものを犯し、けがすことです。「聖霊冒し」とは、自分の思いのままにさばいて、神のわざがなされないように聖霊の働きをいやしめる場合を言います。すなわち、聖霊の働きなのにもかかわらず、自分の

思いに合わないので、悪をもって神のわざをいやしめる場合を言うのです。

例を挙げれば、聖霊のみわざが起きる所を異端だと罪に定めて、流言飛語をまき散らしたり、偽りの文書をでっち上げて、集会を妨げたりすることなどが、これに属します。もちろん、真理の霊でないほかの霊を受けさせたり、神様をご覧になって本当に「異端」で分派を起こす者なら、私たちはキリストの福音に立ち、厳しく警戒して、受け入れてはいけません。<テトスへの手紙 3:10>で「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい」と言われたからです。

しかし、異端でないのにやたらに「異端」だと罪に定めて、聖霊の働きをいやしめるなら、これは聖霊冒涇であり、神様の前に赦されない大きい罪を犯すことです。ですから、私たちは真理のみことばに立って、霊を見分けなければなりません。

今日、多くの人々が霊を明らかに見分けられないので、三位一体の神様を認めて、聖霊の働きが現れる教会に対して、異端だと罪に定めたり、一步進んで、さまざまな方法を使って迫害する場合がたびたび見られます。神様を信じていると言いながらも、異端についての聖書の知識がなかったり、異端の定義さえ知らなかったりするからです。

このように、よく知らなくて冒涇する場合は、立ち返って悔い改めれば罪が赦されますが、知っていながらそねんでねたみ、悪い心で冒涇するなら、決して赦されないのです。

ベルゼブルに取りつかれている？

聖書でもこのような例が探せます。<マルコの福音書 3 章>を見れば、イエス様が人間に行なえない驚くべき不思議なわざとしるしを施されると、これをそねんでねたんだ悪い輩が、イエス様は気が狂った、という悪い噂を立てました。どれほど噂が広がったのか、身内の者たちが聞いて、イエス様を連れ戻しにやって来たほどだったのです。

そうかと思えば、律法学者とパリサイ人たちはイエス様について「ベルゼブルに取りつかれている。」「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」と非難しました。彼らは神のことばに精通した人々であり、律法をよく知っていて教える人々でしたが、イエス様をそねんでねたみ、むしろ神のわざを冒涇したのです。

(イ) 聖霊に逆らう

「逆らう」とは、上の人々の心や命令にはむかうことです。「聖霊に逆らう」とは、神様が聞かせてくださった聖霊の声に逆ったり、聖霊のみわざを思いのままさばいて罪に定め、教団に知らせて追い出すなど、相手に害を与える場合、また、これと似たことを言います。

それでは「人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。」とは、どんな意味でしょうか？ ここで「人の子」とは、まだ十字架を負う前に、人となって来られたイエス様のことです。したがって、「人の子に逆らう」とは、神のひとり子でありながら、人となってこの地上に来られたイエス様を、ただの人だと思って逆らうことを意味します。これは、イエス様が救い主だと悟れない無知から出た罪なので、悔い改めて立ち返り、主を受け入れれば、罪が赦されて救われるという意味です。

今日でも、真理を知らなかった時、まだ聖霊が臨まなかった時に、このような罪を犯せば、神様も悔い改めて赦されるように、最後まで機会を与えてくださいます。しかし、もしイエス・キリストがどんな方なのか知っていながらも、主を冒瀆して逆らうなら、これは聖霊に冒瀆して逆らうことと同じなので、決して赦されないのです。

(ウ) 聖霊をけがす

<ルカの福音書 12:10>「たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。」

それでは、「聖霊をけがす」とは、具体的に何を意味するのでしょうか？

「けがす」とは、大切なもの、清らかなものを汚すことです。「聖霊をけがす」とは、神の御霊である聖霊をけがしたり、神の神性をけがしたりする場合があります。

もし、聖霊の働きをサタンのしわざだと非難したり、聖霊の働きでないことを聖霊の働きだと言ったりするなら、これは神の永遠の力と神性をけがす罪になります。また、真理を真理ではないと偽りの証しをしたり、事実を事実ではない、と言ったりするなど、まことを偽りに仕立てていく場合も聖霊をけがすことです。

昔も、王をけがす言葉や行ないが発覚したら、重罪人として殺されたりしまし

た。まして、この地上の王とは比べられない、全知全能の神様の聖なる神性をけがすことは、すなわち、神様をけがすことなので、決して赦されないのです。

神の御姿であられる方、ことばが人となってこの地上に来られたイエス様も、誰も罪に定められませんでした。まして、私たちが兄弟姉妹をむやみにさばいて罪に定め、一步進んで、聖霊が行なわれることまでけがすなら、どれほど大きい罪になるのでしょうか？ 神様を恐れるなら、決して聖霊を冒瀆したり、逆らったり、けがすことはできないのです。

したがって、このような罪はこの世だけでなく、公義と愛の神の国が来ても、永遠に赦されない大きい罪であることを悟って、決して罪を犯すことがあってはなりません。もし過去によく知らなくて聖霊を冒瀆して逆らい、けがしたなら、今からでも徹底的に魂を砕いて罪を告白して、神様の憐れみを求めなければならぬでしょう。

2) 主を十字架にかけて、恥辱を与える場合

<ヘブル人への手紙 6:4-6>「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」

「主を十字架にかけて、恥辱を与える」とは、聖霊を受けた後、天国と地獄があることを知って、真理のみことばを聞いて知って信じながらも、世に誘惑されて教会と神様を離れて墮落し、神様の栄光をさえぎることを言います。

このような場合、サタンのしわざを受けて、さまざまな罪を犯すことはもちろん、神様まで否定して、教会と信じる人々をはなはだ迫害して悪口を言うことが見られます。すでにその良心を敵である悪魔・サタンに任せてしまったので、暗やみでぎっしり満ちているのです。したがって、頑な心のため悔い改めようともしないし、悔い改めの霊も臨みません。それで、悔い改める機会さえ与えられないので、罪の赦しを得ることができません。

イスカリオテ・ユダ

イスカリオテ・ユダがこれに当たります。彼はイエス様の弟子としてイエス様に付き従って、多くの不思議なわざと見るしを見たのに、物質の欲が生じて、この世の救い主として来られたイエス様を銀貨三十枚で売り渡しました。後で良心

の呵責を感じ、お金を返して後悔しましたが、悔い改めの霊が臨まないで罪が赦されず、良心が耐えられなくて結局、自殺してしまったのです(マタイ 27:3-5)。

3) 真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続ける場合

<ヘブル人への手紙 10:26-27>「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」

「真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続ける」とは、神様が赦されない不法をわざと行なう場合、または、犬が自分の吐いた物に戻り、豚は身を洗って、またどろの中にくるがように、罪だと知っていながら罪を犯し続けていく場合を言います(第二ペテロ 2:22)。

神様を愛していたダビデ王が姦淫をすると、これによっていろいろな罪を生み出し、結局殺人まで犯します。ところが、預言者ナタンが罪を指摘すると、ダビデ王は直ちに悔い改めて立ち返りました。

サウル王

しかし、サウル王は預言者サムエルが罪を指摘したにもかかわらず、罪を犯し続けました。その結果、悔い改めたダビデ王は、再び神様の祝福を受けましたが、サウル王は悔い改めないで罪を犯し続けたので、神様に捨てられました。

バラム

また、バラムは神様がともにおられて、祝福権と呪い権まで受けた預言者でしたが、神様のみこころを知っていながらも、財物と名誉のために一度、二度と世と妥協して、結局惨めな最後を自ら招いてしまいました。

このように「神様を信じている」と言いながら、ことさらに罪を犯していく人々は、神様が顔を背けてしまわれるので、聖霊が消えていくしかないので。そして、信仰までも消えるようになると、自然に敵である悪魔につかれて、悪と不正を行なうようになるのです。そして、聖霊が消えてしまい、悔い改めることもできないので、結局その名がいのちの書から消されて、救われないのです(黙示録 3:5)。

もちろん、神様について単に知識で知っているだけで、本当に心で信じなかった人の場合は、神様が働かれて信仰を持つようになれば、救いの道に導かれます。仮に、教会に通っていたのに世に向かって離れたとしても、再び伝道されて、悔い改めて立ち返れば、新たに恵みが受けられるのです。

しかし、聖霊にあずかる者となって、天国と地獄があることを明らかに信じて、神様の恵みを大いに体験した人が、肉の行ないをし続けていけば、いくら「主よ、主よ。」と叫ぶとしても、ことさらに不法を行なったので救われないことを明らかに悟らなければなりません。また、死に至らない罪といっても、すべての罪は不法であり、暗やみであり、神様が憎まれるものであることを悟って、ささいな罪であっても犯してはなりません。

この「十字架のことはば」は、マンミン国際神学校(MIS)の理事長であり、大韓民国ソウルにある万民中央教会の堂会長イ・ジェロク牧師の説教が編集され、教材として出版されたものです。

さらに詳しいことを知りたい方は、以下にご連絡ください。

email: japanmis@gmail.com

851 Guro-dong Guro-gu Soul Korea 152-879

Manmin International Seminary

Manmin Central Church

Tel: 82-2-818-7335

www.manminseminary.org

マンミン国際神学校 教材案内

既刊

十字架のことはば

以下、出版予定

信仰の量り（『信仰の量り』ウリム・ブックス刊あり）

霊・魂・肉

祈り

信仰生活の基礎（礼拝論：レビ記講解、十戒）

まことの祝福（幸いな人、八つの幸い、善）

聖霊（聖霊論、聖霊の御声、御霊の九つの実）

愛（神の愛、愛の章）

地獄（『地獄』ウリム・ブックス刊あり）

天国（『天国 上・下』2冊、ウリム・ブックス刊あり）

創世記講解

教会成長の秘訣（七つの教会、カナン征服史）

ヨハネの黙示録講解

* 聖書の引用は日本聖書刊行会『新改約聖書第2版』によります。